北辰會雜誌

第參拾四號

明治三十六年四月十七日發行

（非賣品）

第四高等學校北辰會

北辰會雜誌第參拾四號目次

奉弔小松宮殿下辭

論說

人格修養法に就て　但豊
歌人としての和泉式部（承前）　八波則吉
方丈記に顯はれたる鴨長明の世界觀及ひ人生觀（承前）　木曾淨專
學生と宗教　竹橋杉南
佛教の實踐信仰主義を皷吹す　本莊廿一郎

雜録

歴史的諺の二「レディ、ヲブ、シヤロット」につきて　田部隆次
連俳雜談抄　梶山紙魚之助
人生果して無常なるか　鳴水
Die zwei Blinden.　H. Arima.

文苑

散文

秋夕の露雫　妬翠
春季行軍　鶴秋風
谿の隱者　山田耿
師走遊山の記　迦介

漢文

保眞堂記　村上函
觀瀧記　櫻陵散人

新體詩

ホーマー作「イリアド」の一節（第六卷三六九行―五〇二行）　我澤
向上の曲　木曾紫
春のあしたの萌草　外圃光風
グゼントの墓　秋山
老いし小使　ざくら

俳句・和歌

山崎麓

批評

前號新體詩、和歌等の批評　白桃、梅花、合評

雜報

小宮松殿下の薨去。春を迎ふ。皆勤賞牌を廢せよ。榮葉。第二回演說會。劍道部報告。柔道大會記事。明治三十五年第十回秋季陸上大運動會附天長節祝賀會。運動會雜俎。斷片錄。寄贈書目。

奉弔

元帥陸軍大將大勳位功二級彰仁親王殿下

嗚呼親王　宗室懿親　文武兼備
忠勇絕倫　際會中興　龍驤虎視
內討外征　克全國寄　日月所照
我武維揚　博愛及衆　公益維張
皇上倚賴　民人瞻仰　千古無儔
勳德俱奘　溘焉長逝　將星失明
普天率土　莫不傷情　曾臨吾校
溫容在目　肅々靑衿　東向慟哭
嗚呼哀哉

北辰會雜誌部委員總代
近藤達兒恐懼再拜

北辰會雜誌第參拾四號

論說

人格修養法に就て

但豊

昔から人は萬物の靈とも云つて、凡そ天地の間に存在せる物の中で、最も貴いものになつて居るが、其の貴い所以のものは何であらうか、身體であらうか、智識であらうか、又は所謂道德であらうか、人の身體は、其の構造が、他の動物などとは大に異つて居つて貴いに相違ないが、世の中には、身體の肥滿、强健なる人で、殘忍、暴惡忌むべきものが澤山に居る、人の智識は靈妙不可思儀であつて、他の動物などが決して持たぬ所のものであれば、これも貴いに相違ないのである、併しながら、世間には、才智、學識の豐富なる人で、狡猾、狠戾惡むべきものも尠なからぬのである、又、世間の所謂道德家なる人を視ても、成る程表面ばかり見たならば、別段に、是れと云ふ程の惡事、非行もなく立派に見えて居るが、よく〳〵其の裏面を觀ると、其の心根正しからずして賤劣、破廉耻賤むべきものが多く居る、若し世人の謂ふ所の道德家を求めんとならば、學問、智識を備へたる人よりも、反つて片田舍の無學、無識の田夫野人に多く得らるゝやうである、此の如く數へ擧げて見れば、身體を以ても、智識を以ても、所謂道德を以ても、尙ほ、人間は貴きものとするに足らぬのである、されば、人の貴き所以のものは何れの處にあるかと云へば、人

格にあると云ふより外はあるまいと思ふ、そうして、人格とは如何なるものかと云へば、誠とでも云ふの外はあるまい、誠とは、中心眞實、無妄にして自ら欺くことなく、物に應じ、事に接するに、一に道理の命する所に從ひ、常に人間固有の品格を失はず、俯仰天地に愧つるなしとても云つたならば、大抵其の意を明かにすることが出來やうか、古人と云はず、今人と云はず、彼の衆人が最も景仰、欽慕する、所謂聖賢、君子に於て屢〻見る所のもの、卽ち、溫乎として親むべく、又、威ありて犯すべからざる底の德を云ふのである、

さて人たるものは、是非とも、此の德卽ち、人格を備へねばならぬものであるが、此の人格を修養すると云ふ事は中〻六ヶ敷い事であつて、一と通りや二た通りの敎育法では出來難いので、實に容易ならぬ事である、殊に我が日本國の現在の如く、社會一般の文明が幼稚である間は、別して六ヶ敷いのである、併し、六ヶ敷いからと云つて打ちやつて置く譯には行かぬ、現在の文明が許す限りの範圍内に於て、勉めて之れが修養法を求めなくてはならぬのである、故に、家庭に於ても、學校に於ても、又社會に於ても、改善すべき事はずん〳〵之を改善して、大に、人格修養の事に力を盡くすべきは申すまでもない事であるが、滔々たる天下、衆愚の聚まる所、卽ち盲千人の世の中なれば、是れ亦容易に改善することが出來ないのである、されば、今日の學生は、少なくとも高等學校以上の學生たる者は、他に多きを求むることを爲さず、自分で己れ自身の人格を修養するの道を求むるより外はあるまいと思ふのである、元來、敎育の理論の上から視ても、彼の他人の敎導のみに依賴して、自ら己れ自身を敎育せざる人は、決して大學者にも成れず、亦大人物にも成れぬと云ふ事は固より云ふまでもない事である、又、古代と云はず、今代と云はず、彼の英雄、豪傑大人、君子とも云ふべき人々の歷史を看ても、大概は、自ら自分を敎育した人々であるから、爰に、殊更に言はずとも分り切つて居る事ではあるが、兎角、此の事に深く注意しない人が多いやうであるから、今日の日本では、自敎育と云ふ事が別段に必要であるやうに思はれる、故に、殊更に此處に此の事を云ふのである、次に、現今の家庭と、學校と、社會との敎育の有樣を雜と述べて見やう、

第一、家庭に於ける修養　の方法は如何、胎敎などの事は云はずもかな、子供が此の世に生れ出づるや、西洋人の育て方とはまるで違つて居つて、父母たるものは、只管犬猫の愛に溺れ、寢るも、起るも、常に母親の懷を離すことなく、飲食度なく、衣服節なく、幾んど玩弄の人形と一般、蝶よ花よともてはやし、此の際に於て、業に己に、動物性の我儘を增長せしむるのである、稍〻成長すると云ふと、我儘、氣儘も段々大きくなつて來て、中〻、親の言ふことなどは聞かぬやうになる、そうすると、親は、自分が我儘に育て上げた事は棚に上げて仕舞つて、唯子供の生付きがわるいと云つて、無暗に小言を云つたり、矢鱈に叱つたりして居る、もう一つ困つた事には大概の家には、夢にも文明流の感化を受けた事のない、まるでわけの分からぬ、ぢいさんや、ばあさんが居る、此のぢいさん、ばあさんなる者は、孫は子よりも可愛と云つて、無暗、矢鱈に甘やかし、親の言ひ付けた事も、蔭に廻つて、打壞わして仕舞ふのみならず、常に、途方、途轍もない、迷信の事や、頑陋の敎を吹込んで、子供の性格を無茶、苦茶に壞わして居る、此の点から見

ると云ふと、ぢいさん、ばあさんの長命して居るのは、幸か、不幸か分らぬ位である、又、ぢいさんも、ばあさんもなく、親の手斗りて子供を育つる人もあるが、是れとても、大概は、其の育て方を甚しく誤つて居る、少しく考へて見ると分るが、日本の子供の躾け方は、所謂消極的とでも云ふのか知らんが、そうしてはいかん、ああしては善くない、是れも惡い、彼れもするなと、殆んど禁制、防止的であつて、かうすべし、あゝすべし、是の事は務むべし、彼の業は勵むべしと、積極的に誘導する事が甚だ少ないのである、尤も現今に於ては、父母たる人に、大分、文明流の教育を受けた人が殖ゑて來たから、其の子供に、積極的の教育を施して居る人も多少あるやうではあるが、それとても、唯口先きて教へ諭すのみであつて、善き行を躬に行うて、自ら立派な手本を示して、導き育てゝ居ると云ふ人は、余り多く見掛けないやうである、然かのみならず、子供を一とたび學校に送つてから後と云ふものは、其の教育を、まるで學校任せにして、善きも、惡しきも、全く顧みないと云ふのが、通例のやうである、以上は、心に浮んだ事柄を雜と取摘んで書き並べたのであるが、是れだけの事を見ても、家庭に於て人格修養などと云ふ事は、今日の處では、先づ望を絶たなければならぬのである、

第二、學校に於ける修養　の方法は如何、是れも西洋文明國の學校とは非常に違つて居る、第一良教員に乏しいのである、尤も智識の教育は、近來年一年と進んで來て、稍〻見るべきものがあると云つてよろしいが、身體の教育はまだ甚だ不充分であるし、德育に至つては殆んど形なしと云つてもよい位である、尤も、脩身とか、倫理とかの科目はちやんと備つて居つて、毎週一度か二度は、教場の講釋はあるが、所謂講釋の仕放しと云ふのであつて、又其の講釋の有樣は、例のかうしてはならん、あゝしてはいかんとの消極主義であつて、重もに惡事を戒めることが多くて、善事を勸めると云ふことは甚だ少ないやうである、然かのみならず、脩身の講釋をする先生達が、口では色々と八釜敷き事を述立つるも、其の行に於ては、隨分惡しき手本を生徒の眼の前に示して居ることが少なくないやうである、ちよつと一つ例を擧けて見やうが、或る家の高等小學の女生徒が、家に於て食事をするに、何時も茶碗を食臺の上に置き、體を食臺にもたらして、其の上に肱を掛け、頰杖を突いて食する僻があつた、そこで、其の親たる人が大に其の不行儀を戒めた、そうすると、女生徒の云ふには、學校でた弁當を食べる時に、先生は何時もかうしてめしあがると云つた、親たる人は驚いて、先生は兎もあれ、内では其の樣なた行儀をしてはならぬからと云つて、深く後來を戒め、尙ほ其の他に、色々先生のた行儀の事を尋ねて見たれば、實にた話にならぬ程の不行儀の事が澤山にあつて、家内一統抱腹、絶倒して、一時食堂に花を咲かせたと云ふことを聞いたことがある、是れはほんのちよつとしたた行儀の話であるが、人として最も大切なる所の、心情に關係した事柄に於ても同樣の事が澤山にあるのである、尤も小學校に於ては、生徒の年齡が幼けなく、隨て智惠の發達も稚さなく、慾心も未だ甚だ盛んに起らぬ時であるから、比較的に甚しき惡弊を見ることが少ないやうであるが、中學時代になると云ふと、年齡も長じ、智惠も相應につき、色々の我儘、氣儘の起る時代である上に、其の教員は比較的に良き人が少ない爲めに、此の時代に於て、生徒の惡しき氣質を增長せしめ、其の行狀も無茶、苦茶にして仕舞ふので

ある其の事に就ては多く云ふにも及ばぬ、今度の教科書事件を見れば、思ひ半ばに過ぐるではないか、今度拘引せられたる人の内には、師範學校長や、中學校長や、其の外、教員連が澤山に居るではないか、中には、學者もあらうし、智者もあらうし、脩身の先生も居るであらう、そこで、此等の先生達に教育せられた子弟達はどうであらうか、若しも教育なるものが、人の精神の上に、人の心情の上に、何等の影響をも及ぼさぬものとすれば、格別心配するにも及ばぬのであるが、元來教育と云ふものは、そんな力の弱いものでないとして見れば、其の子弟達はどうなるであらうか、誠に氣の毒なものと云はなければならぬ、又、今度拘引された人〻が、少年の時、教育を受けた場所はどんな處かと云へば、立派なる高等の學校が多いやうである、是れに據つて觀るに、學校の教育と云ふものも、亦人格修養などと云ふ事の上には、多くの効能がないと云はねばならぬではないか、

第三　社會に於ける修養　如何、これは亦、西洋文明國とは雲泥の相違であつて、何れの方面に向つて見ても、歎息の外なしと云はなければならぬ、政事界と云はず、實業界と云はず、驕奢、淫靡、欺瞞、譎詐、强欲、壓迫、貪婪、詭計等のあらゆる惡德が盛んに行はれて居る、それのみならず、教育界、宗教界の如き、常に最も神聖にして、社會の風教を維持して行くべき職責を擔へるものに於てすら、一般に、俗世界の流潮に左右されて仕舞つて居るやうな始末である、今、現社會の大勢を知らんと思へば、彼の社會の耳目、文明の木鐸、風教の警告者を以て任務として居る所の、新聞紙の有樣を視るが一番近道である、多くの新聞紙は、所謂三面記事なるものを設けて居るが、此の記事は、表面は、世の惡德、醜事を懲罰する爲めなりと稱して居りながら、其の裏面は、反つて之を勸誘、煽動するの傾きがあるではないか、中には、人の陰事を發き、甚しきは虛構、讒誣の文字を並べて、善人を害し恬として恥ぢざるものもある、又、何れの新聞にも小說を掲げて居るが、其の多くは、甚だしく風教を害して居る、此等の新聞紙が廣く世に行はれて居る間は、社會一般の風俗が腐敗、墮落して居ると云ふことは、言はずもがなであつて、誠に歎はしき極みである、斯の樣なる社會に棲息して居つて、日夜之れが薫陶を受けて、立派なる性格を造らうなどと云ふことは、とても出來ない相談である、

さて以上述べたるが如く、家庭も、學校も、社會も、實に情けない有樣であつて見れば、何れも、人物養成卽ち人格修養と云ふやうな事の上には少しも恃みとするに足らぬのである、誠に歎息すべき次第ではないか、そうして見れば、現今の世の中に於ては、到底一つも特むべき所がないかと云ふに、爰にたつた一つの大に恃むべき所があるそれは外ではない自分、自身である、そうして、此の自分自身を恃みとして、自分の人格を修養すると云ふ事は、何人でも出來得る事かと云ふに、中〻そう甘くは行かぬのである、此の事の出來得るのは恐くは高等學校以上の學生諸君の外にはあるまいと思ふのである、諸君は、幸に、既に普通教育を受けて、普通若くはそれ以上の智識を備へて居る人〻である、既に普通以上の智識を備へて居れば、物の是非、善惡、事の利害、得失は、他人の指導を俟たずして、十分に判別する事が出來得る筈である、既に物事の道理を判別することが出來る以上は、最早、他人の世話にならずして、自ら己れ自身を教育し、自ら己れ

の人格を修養することが出來るに相違ない、又自ら大に奮發して、此の事をしなくてはならない、殊に諸君は、成業の後は人の上流に立つて、社會萬般の事物を支配せんとの大なる志望を懷いて居る人〻である、して見れば、諸君は、家庭が不十分だからとか、學校が惡いからとか、社會が腐つて居るからとか云ふやうな、卑屈極まる逃げ口上を設くることは止めにして、家庭も、學校も、社會も、自分達一手で引受けて、所謂專賣特許で、大に改造して以て、將來此の日本國を、世界中何れの文明國に對しても、恥かしくないものと爲さうと云ふ位の意氣込を常に持つて居て、今より、斷然と一段の奮發をして、自ら己れ自身の人格を修養することに勉めなければならぬと思ふのである、

さてそこで、人格修養と云ふ事は、唯心で思つたり、口で言つたりすることは、誠に容易い事であつて、誰人にも出來る事であるが、愈々之を實現、實行すると云ふことは非常に六ヶ敷い事であつて、中々、一朝一夕の能すべき事でないのである、されば如何すれば善いのであるか、余か常々考へて居る所の方法を、爰に、雜と申述べて見やう、西洋の學者の言に、人を育てる上に於て、道德は內部の容儀であつて、容儀は外部の道德であると云つて、內部の心と、外部の行と、兩つながら同時に、訓練せなければならぬと云ふことがあるが、誠に千古の金言であつて、人々自ら其の性格を修養する上に於ても、內外相應して、或る一定の方向に進むことが肝要であると思ふのである、學生の中には、動もすると、內部卽ち心さへ正しければ、外部卽ち行は、少〻位惡しくとも左程咎むべきでない、行の如きは、世の中に出た後に於て、如何樣にもなるものだなどと思つて居る人がないでもない、中には此の事を、口に公言して憚らぬ者もあるやうだが、是れは大間違と云はねばならぬ、其の當人に於ては、それで必ず善き人に成れるものと信じて疑はないのであらうが、何時の間にか、習ひ性と成つて、自分は善いと信じつゝあるも、知らぬ間に大間違をやつて居ることがあるから、書生生活をやつて居る時から、常に大に注意して、內は心を誠にし、外は身を修めて、以て人格の修養に資することを勉めなければならぬ、そこで又此の人格と云ふことも、學生時代に於ては、銘々に、何か豫め目標を定めて置くことが必要であらうと思ふ、が、その目標は、古代の豪傑でも、聖人でも善し、亦今代の賢哲でも、學者でも善し、亦其の他理想中に、完全、無缺と思ふ人物を畫いて置いても善いから、何でも一つの目標を定めて置いて、苟も此の目標に達せんが爲めの資料と爲るものは、事の內外、大小を問はず、物の輕重、難易に拘らず、一切之を自己に收獲し、深く之を貯藏して、常に之を失はざるやうに勉むるのが、一番善き手段、方法であらうと思ふ、是れより以上の事は、此處には、餘り細かに言はずに置いて、一に讀者諸君の思考と、判斷とに任かすことゝせう、

歌人としての和泉式部（承前）

八波則吉

外形の裝飾（つゞき）

其二　文字

句格についで云ふべきは短歌に於ける文字の用法なり。之が注意如何に由て句調の上にも躰裁の

上にも良否大に其途を異にするものなれば、左に簡單に之を述ぶべし

一、頭字韻　我國の歌には押韻の事なし。旗野某氏は曾て無韻非歌論を唱へしといへども、ウとオは通じ、イとエは同韻をなし、夫等配合してたのづから一定の押韻ありといへるものにて、決して首肯するに足らず。其他古來いまだ之を論じたるものなく、又實際韻を踏めりとも見えざるなり。然れども毎句の終りに同韻の文字を排置する代りに、句の頭に同音の文字を用ゐて自ら句調を流麗ならしむる法、記紀万葉其他後世の和歌にも專ら行はれたるが如し。これを名つけて頭字韻といふ。英國の古詩にも多しと聞く。古事記に

　　たほ坂にあふやをとめを道問へば、たぶにはのらずたぎまちにのる

書紀に

　　なにはのさきのならびはまならべんとこそ……

万葉に

　　紅のあら染衣、あさらかに、あひ見し人に戀ふる頃かな

　　たちのしりたゝまくたゐにいつまでかいもを相見ずいへ戀ひ居らむ

等枚擧に遑あらざるべし。和泉式部また巧に此法を用ゐき。例へば

　　いづくとていそくなるらむいつこにも、今宵は同じ月をこそ見れ

　　この身こそこの代りにはこひしけれ、おや戀しくはおやを見てまし

其他

　　はる毎のはなの盛は、たえし頃たえぬと思ひしたまの緒の、

　　さも待遠にさく櫻哉、やま草のやまずよ人を……

等その例甚だ多かり。是等は求めて巧を裝ふにあらざるも、たのづから口に從つて出づる一種の修辭といふべし。就中「さも待遠にさく櫻かな」の如く、下半の兩句に同音を用ゐたるは最も句調の圓滑を助くるが如し。これ殆んど自然の調ともいふべければ也。之に反して若し固意に頭字韻を用ゐんか、却て耳ざはりとなりて、寧ろ無くもがなと思はるゝものなり。例へば伊勢大輔が

　　いふやとていふ程を待ついは躑躅、いはずとてやはいはでやむべき

の如し。過ぎたるは及ばざるにも若かずといはまし

二、枕詞　こは日本文學獨特の裝飾法にして、上古の長歌及び短歌に盛に之を用ゐ、抑も和歌の始祖といふべき素尊の詠にも「八雲たつ」出雲とこそは詠まれつれ、然るに惜い哉この貴重なる裝飾法は奈良朝の末葉に至り、長歌の衰ふると共に漸次其影を歌壇に潛め、古今以降三代八代と次第に年を經るまゝに、短歌の上にも殆んど其隻影をだに止めずといふも敢て過言にあらざるに至れり。試に見よ、今日の所謂新派歌人なる者、殆んど萬葉の句格を摸倣すといへども、誰か巧に當時の枕詞を利用するものぞ。新陳代謝は世の常なり。然れとも先客去つて幾百年、而も一人の後客を迎へんとするものなきを見て予は甚だ遺憾に思ふもの也。請ふ眞淵の冠辭考を開いて一讀せよ、如何に多くの珠玉は埋れて今日の土芥の中にあるかよ。而して之に代ふべき珍品は一も發見せられざる也。ア、誰か枕詞を無用の長物となす。最も簡にして加之も甚だ多くの意味を含む

ものなり。「あきつしま」―大和といへば僅々五文字の内に如何に多く歴史的意味を語り、「こもりくの」―初瀬といへば如何に詳に地理的説明をなすよ。此外「あらたまの―年」「天さかる―ひな」「うまさけ―三輪」「みけむかふ―紀の路」等一方には句調を助け、又一方には内容に變化を來して之れあるが爲に單簡なる詩形に頗る復雜なる思想をさへほのめかし得べきにあらずや。アヽ誰かなほ枕詞を以て無用となす。僧正遍照が歌に

垂乳根はかゝれとてしもむば玉の、我黑髪は撫でずやありけむ

と詠めるあり、名高き歌なり。俊惠かつて物語のついでに、此歌の中にて何れの詞か殊に勝れたると問へるに對して、鴨長明が無名抄に、「かゝれとてしもと云ひつゞけて、むば玉のと休めたる程こそ殊にめでたく侍れ」といへり。「古來これを半臂句といふ、裝束の中に飾りとなるものなり云々」。誠に穿てる評といふべし。夫れ枕詞は最も普通に用ゐらるゝ如く一首の短歌の頭に置くだに趣あるを、巧に之を中央に挿入せんか、愁々として通らず、綽々として餘裕を生じ、句調の上にも思想の上にも大に興味を増すものなり。然るに惜ひ哉かの法の廢れて再び起らざる。式部が集にも只僅かに

管の根の―長き春日もあるものを、短かりける君ぞ悲しき

かざゝじと誰か思はむ千早振―神のまれ〳〵許す葵を

の二三首あるのみ。概して式部は脩辭上あまり注意をなさゞりしといへども、如此枕詞を用ゐる事の僅少なりしは、蓋し當時一般の風潮既に此種の珍器を遺棄したりしに由らんか、既往は追ふべからず、予は將來に於て枕詞の復活を冀ふもの也。但し記紀萬葉時代のものを其儘に(悉〳〵)用ゐよといふにあらず。何となれば拾捨增減、識別撰擇あるべきは、苟も改良進歩の上に缺くべからざる要素なれば也

三、かけ詞　頓智あり頓才あるもの〳〵突然思ひついたる一種の洒落ともいはゞいふべく、當意卽妙いかにも輕快なる代りに浮華輕卒むしろ無くもがなと思はしむるものは短歌に於ける「かけ詞」なり。其濫腸は遠く上古に發し

大君の八重のくみかきかゝめども、名をあましみにかゝぬくみかれ

及び倭建命の卽吟「ながきせるたすひの裾に月たちにけり」、並に万葉の

梅の花すきて散りなばわきも子を、こんかこじかとわがまつの木ぞ

等の如し。されど當時なほ尠なかりしが古今以後に至つては續々出でゝ擧例に遑あらず。而して和泉式部は前章かの女が傳記に於て見たる如く頗る才氣放奔の婦人なりき。かつて加茂に詣でけるに草鞋に足をくはれて紙を卷きたりしに、神主忠頼

千早振かみをも足にまくものか

と云ひたるに式部取り敢へず

これをぞしものやしろとはいふ

金葉集に出づ。逸話は小なりといへども其人を語るや大なり。以ていかに式部が頓智に富めりしかを知るに足らずや。されば彼女は、常に予がいふ如く深く意匠を凝らさゞれども、「口に任せて」

發したる語に、語呂卽ち「かけ詞」甚だ多し

さゝかにのーいかで、　今日ーくれ竹の、　岩つゝじーいはねば、
旅にやーいでの、　よも尋ねでは！やましなの里
代らんといかゞ賴まん今はなほ、うら柴の色ときくく、
見る人のなぎさに居ればかひなしと思はぬあまのしわざなるべし

等その例なり。最後の一首は殆んど卽吟とも思はれぬ程巧妙なれども、概して是等の「かけ詞」には式部は餘り苦心したりとも見えざる也。偖この「かけ詞」は其後盛に行はれて、物名の歌となり、狂歌となり、狂句となり、語呂となり、地口となり、謠曲に用ゐられ、都々逸に用ゐられ、淨瑠理の道行は全篇殆んど此種の裝飾を以て組織せらるゝに至りぬ。緣語また此の類なり。要するに「かけ詞」の類は大率俗味を帶び浮薄に聞えしむる傾あれば短歌の上にも、之が用法に多少斟酌する所なかるべからず

四、序歌　緣語「かけ詞」に似て一段氣品高く、枕詞に類して一層長大なるものを序詞又は序歌と稱す。殆んど一種の比喩法とも見るべく、外形の裝飾といはんよりは寧ろ內容の修辭とも謂つべし。されど便宜に從ひ茲に其一班を述べん。古來我國の歌人中最も巧に、しかも最も盛に序歌を用ゐたるは云ふまでもなく歌聖柿本朝臣人麿大人なり。其歌ふ所を聞くに蕩々數十言、悉く一語の文字にかゝりて、對句單句其間に出沒隱見し、小なる波瀾、小なる起伏を惹起しながら一個の序歌となるなり。例は茲に揭ぐるを要せじ、かれの長歌殆んど過半は其例なりといふべし。眞淵の稱して、「大海原に八百潮の沸くが如し」と驚嘆せるもの、蓋し詞想の豐富にして其序歌の高大なるを指せるなるべし。短歌に於ても亦然り、「足引の山鳥の尾のしだり尾の長々し」き序歌誰か大人を除いて之を能くせんや、實に古ならず後ならず我國一人の姿といふべし。之に反して赤人は甚だ稀に序歌を用ゐぬ。式部は卽ち此の流なり、

下萠ゆる雪間の草のめづらしく、我思ふ人にあひ見てしがな
野邊に出づる御狩の人にあらねどもとりあつめてぞ、物は悲しき

の外二三首あるのみ、思ふに「かけ詞」に其例多くして、序歌に其例少きは、序歌は前者に比して思慮を要し、彫琢を要する事一層甚しく、式部は前來しば〳〵云ひしが如く才女にして才を恃める其人なれば、人麿の如く工夫せず、いはゞ赤人の如く質素簡潔を旨とし、「富士の高ねに雪は降りつつ」と心に浮びし其まゝを一氣呵成に直寫したる人なれば、序歌を作るの暇なかりしならんか。「あじまさの事に乘りて傍目もふら」ぬ赤人の特点は略ぼ式部にも見るべしといへども、「八百潮の沸くが如き」詞藻を以て迂餘曲折、巧に和歌を修飾せる人麿が長所は慥に彼女になかりしなり。」

五、繰り返し　繰り返しは美學の所謂、「ユニチー、アンド、マルチプリシチー」と稱して尊重せらるゝものにして、古來我國の文學に甚だ多し。神に捧ぐる祝詞の如きは（其儀式と共に）簡單なる言語、質直なる敬語の繰り返し、又繰り返したるものにして、長歌の對句、短歌の對語、またこれ繰り返しの一種と見るべし。式部盛んに之を用ゐぬ。まづ同字（或は同語）を繰り返せるものには、

人もがな見せん聞せん　君は君吾は吾とも
誰を誰とも　心々に　見えもせん見もせん人を
うゑしうゑば　切りに切りても　たちにたちぬる
かへばやかへん　やきにやくかな　泣きにこそ泣け
とてもかくても　いひにはいはで　思ひにぞ思ふ

等、僕を代ゆるも盡くさゞるべし。次に句を重ねたるものには

くらしても明ることだになかりせば、何思はまし何思はまし
うつゝにて夢ばかりなる逢ふ事を、うつゝばかりの夢になさばや

などあり。後者は少しく種類を異にすれども、尚ほ一種の繰り返しと見るべく、其他

秋霧のたつたの山に逢ふ人は、たつたの山に行きや過ぐらん

及びかの「子はまさるらん、子はなさりけり」「槇の戸たゝき門たゝき」等、半對句などの類をも併せ數へば殆んどこれ日も足らざるべし。抑も繰り返しは情の切なる時たのづから現はれて人を感動せしむるの功あり。例へば式部老後の述懷

いかにせんいかにかすべき世の中を背けは悲し住めば住み憂し

の如きは讀者をして坐ろに同情の涙に咽ばしむ。然れども之が濫用に至りては大に警戒せざるべからず。例へば

いとへども限りありける身にしあれば、あるにもありてあるをありとや

あはれ〳〵あはれ〳〵とあはれ〳〵あはれいかにか人をいふらむ

の如し。一は意味を澁晦ならしめ、他は輕佻浮華ほとんど嘔吐を催ふさしむ

之を要するに和泉式部は、形式上の裝飾に於ては、其多少こそあれ殆んど凡ての方法を採用したるが如し。而して就中句格に於ては、新古今流の初句絶多く、文字に於ては序歌枕詞の尠く、之に反して「かけ詞」繰り返しの多きよりして斷案を下すに、彼女は愈々才女にして和歌には既に先天的の技料を有し、加之も文字の上に餘り重きを置かずして率直に充滿せる胸裡の思想を發表したるを知るなり、之を古來の歌人に照すに、人麿ならずして赤人、康秀ならずして業平、貫之ならずして躬恒ならんか。（以下次號）

方丈記に顯はれたる鴨長明の世界觀及び人生觀（承前）

木曾淨專

第二章　批評

第一節　長明は隱士なり、佛教を誤認せり、

吾人は方丈記に顯はれたる所に依て彼が世界觀及び人世觀を述べ、彼れが生涯の暗黑面たる事をも述べぬ、此に於て彼れの眞面目を一瞥し、冥目して彼を想へば、彷彿として映じ來る一の仙士隱人を認む、卽ち彼は隱士なり、單に世を遁るゝてふ意に過ぎずして他に遠大なる抱負はあらざりき、重ずべき人生を輕して一生を山中に送り、衣食住は單に生を保つに足るのみ、彼れは抑

も何の望ありてかの幽境に入れる、朝露の如き人生の無常を觀じ心を飛花落葉にとゞめて緣覺の悟にあこがれしか、念々修學悉到成佛して宇宙の眞理に徹底せんとつとめしか、佛陀の人に敎へ給ふところ物に執する勿れといふは眞なり、然れとも執着し戀々たらざる根本の所由に至りては如何、憐れむべし長明はこれに一顧の勞を取るに吝なりき、皮相の形迹を知て血と骨との根本の意義を悟らざりき、

夫れ佛陀の人に執を去れ着を脫がれよと訓へ玉ふ所以は、無執その物に價値あるに非す無着そのものに憧がるゝに非す、觀念修行、悟道を辿るがための一要件として執を去れ着を脫がれよと宣へるなり、人、物に執着すれば心を一境に留むる能はず、心を一境に留むる能はずんば何に依てか散亂波動の意馬を鎭めむ、若し夫れ靜心正意なるに非ずんむばいかでか徹底悟道の大志を果さんや、橫まに現象界の萬物に就きて直ちに眞如の法体に覺達し、廓然大悟、雲霓を排して天邊の朗月を眺め、自家の毘盧遮那法身を把住して萬事了達す、これ佛者第一義の目的たり主眼たり、この目的を達するの方便要件として佛陀は自家精神の既往に鑑みて執を去れ沈思せよと敎ふ、烏んぞ知らんや、山に入りて風聲溯水を友とし、徒らに世を後に顧みて放言して以て佛陀の意を得たりとなす、豈に周梨槃特の微行にだも若かんや、誤謬も亦甚しといふべし、

若し厭世そのものを以て佛者の意なりとせば世に忌むべく遠かるべきは佛敎なるかな、然れとも其本旨の存する所既述の如し、況んや一塵一塊にも無限の趣旨を認め、死物をしてなほ活如たらしむるは佛敎の活ける生命なるをや、長明は一を知て全部を知らず、手段を知て目的を知らず、何のために世を去り何のために山に入れる、曰く世は心に應ぜず、怒て世を捨つ、彌陀の名號は裝飾品のみ、西方明なる幽谷、彼れは一の洒落を以て觀念の便ありといへるのみ、隱士々々、嗚呼吾人は如此の隱士を嫌ふ、所謂求快的卑屈なる一慷慨漢のみ、佛敎の主とするところ、豈これ等沒意義の死塊ならんや、實の名に應ぜざる、長明たるもの地下に慚愧して可なり。

第二節、唯識止觀は終に長明に於て成功せざりき

長明が世を捨てたるは事實なり、而して捨世の原因の一小不平に存したるも事實なり、更に又不平を以て世を終りしも事實なり、然らは則ち、所謂長明が通ぜりきてふ唯識止觀は彼れが心的修養に何の資せし所ぞ、聲聞は四諦を觀じて羅漢となり、緣覺は飛花落葉に心の丹田を練て大悟す、三界唯一心、心外無別法、所謂唯識てふ根本原理に基きたる心的修養に成功ありとせば、自ら自家本心の叫喚に滿足なる解答なかるべからず、世に對し人生に對し、單調なる「無常の」一語を以て山に隱れ、一の思索なく、一の修養なく、蠢々として十六の小童や時鳥と群をなして遊ぶの呑氣さ加減、そも何の語を以てこれを形容すべきぞ、彼れは未だ唯識止觀によりて宇宙を解釋し安心立命するの光明を得さりき、否これを得んと望むの心たもあらざりき彼れは「人は心の儘」てふ一語を以て唯識の解答と信じたりき、憐れむへし、唯識止觀は終に彼れに於て成功せず、彼れは單に不平小量の徒を以て終れるのみ。

第三節　長明は人生の眞價を知らず——固定的にして活動的に非ず——生きたる死塊なり、

通ぜりきてふ唯識止觀も成功せざりし長明、方丈の室に木實を食ひ泉流を掬びたりし長明、彼は人生を草露の如しと觀じ、悲しき涙顏に唯さめ〳〵と泣けるのみ、果敢なき生命を保てる人生は此無常てふ世變に對して他に永久の天地を認め、これに依りて不動の大志を養成する能はざりき、試に思へ、三界唯一心と觀ずべき識は、自己が日々碌々として悠遊せる五尺の体軀に藏まれるに非ずや、彼れが生涯は不平を以て起り小言を以て終る、切々たる長明が眞面目豈に一の見るべきものあらんや、山川の美は常に見て美なるに非ず、日夜孜々營々の閑、碧潭を探り新綠を尋ねてはじめて悅ふべし、昔は陶隱居茅山に隱れ、性を養ひ心を靜にし、青雲に交はり白日を弄す、齊の高祖これに問うて曰く、山中何の有る所ぞやと、陶隱居卽はち賦して曰く、「山中何の有る所ぞ嶺上白雪多し、只自ら怡悅す可し、持して君に寄するに堪へず」と更らに語をなして曰く、老常に好んで松聲を聞く、庭前松を植ゑて其響を樂とす、而して玉澗の路傍古松悉く合抱なり、微風驟々至れば淸風琅然として梢を度り万壑響き應すること音律の節に中るか如しと、忽ち一喝天邊にありて曰く「夫れ淸風朗月を弄し澗水深嶺を愛して虛靈天眞の性を養ふと雖も、心を岩洞に留め淸を林木に殘す則んば萬境卽ち隔歷して無心の地に心を着く、不覺にして粘着し松風に惑うて眞性を忘る、還て是れ賊を認めて子となすと何づれぞ」と、二人聞き終て呆然たりきといふ、これ直ちに以て長明にうつすべきに非ずや、世人我が意に從はずと稱し忽ち小敗に屈し堂々事をなすの身を以て山に入り、小屋を結びて小童とつばなを拔く、この心を以て山に入るが故に所謂實の山に入りて手を空くして歸る、若し夫れ聖者山に入らば正に一定の世界觀と人生觀とによりて宇宙を解釋し大悟せん、若し夫れ丈夫この時間を費さば正に天下經營の策を講せん、聖にも非ず世俗にも非ず、生ける身、不朽の靈を收めて徒らに爲すなくして山間に終る、其身を輕ずる事の何ぞ若かく甚しきや、嗚呼、林の樂は鳥に非ずば知らず、水の生活は魚にあらずば知らず、我が樂は誰かよく解せんと高言せし彼が身心は、業に既に淸を林木に殘し澗水に惑うて賊を認めて子となすに非ずして何ぞや、況んや陶氏は終に松風に世を忘れしも彼れは生を涙に終りしをや、山中方丈の住居は、實に長明にして初めてこの瓦礫の生を送るべきなり、

夫れ古昔の聖者、一度流轉無常を觀じて山に入り、晝夜沈思工夫の勞に酬いて安定の境を得れば、無常の世には忽然として常住の光あり、松風はとこしへに不滅の琴を奏で流水は萬古一貫の法音を嘆ず、躍如たる世相は彼をして和光同塵たらしめき、然り聖者は岩端の滴瀝落ちて千尋の瀧となり流れて無邊有情の曠野を濕ほしき、自己が靈精の不安に推して世俗を憐れみ、こゝに救世の德音高く野に轟き、五尺の身化して八万由旬に達すべく其活動は偉大なりき。自己を憂へて自己を安んじ、一歩して急救常沒の慈悲に基きて利他活動に燦たる珠玉の身を終るこそ、誠に人師の責に非ずや、吾人は長明に擬するに聖者人師を以てするは過ぎむ、丈夫の量を以てせんは越えん、然れども彼れすでに若干の歩みを向上の一路に運び、時には堂々の言辭其口より漏れたるに非ずや、而かも飜て彼を思ふ、山に入れども心在俗の小憤を去らず、谿間に書を繙けども自利安心の果を結ばず、身は岩端に固定して世に示すべきの活動なし、これ正に生きたる死骸、人生の眞價を語らんに吾人は一厘を吝むものなり。

第三章　結　論

長明は憐むべく賞すべきの人に非ず

吾人は前來の所論によりて暗面生活の長明を見るも、未だ光明に浴せる長明を見ざるなり。世にありては志を得ずして世を憤り、祿欠け財を失うて糊口に苦しみ、妻なく子なくして未だ温乎たる家庭の妙味を解せず、策盡きて世を捨て逃れて山に隱れ、山野に對して强ひて秋聲白雲に心を遣る、人誰れか美衣を惡むものぞ、人誰れか美食を歡せざるものぞ、人誰れか美屋を思はざるものぞ、而かもこの天眞の常識を强壓して主義なき不平心の爲に意志を犧牲とし、然して其原因の一小拒請に基ぐを思はゞ、人生の悲哀これより大なるあらんや、彼れ强て文を弄し笑ふと雖も畢竟苦笑にして欣然たる春光の笑に非ず、況んや文末尙ほ不遇をかこつに至りては彼れが謝世の意蓋し憐れむに堪へたり、學ひたる唯識は彼れが心志を養はずして、不足の情に一鞭を加へたるのみ、不遇不滿、憤然たるも世は容るゝの耳なし、叫んで聲すでに枯れ、世は舊によりて幾度か春花秋月にすさみぬ、憐れむべし嗚長明、然れども到底賞すべからざるの人たるを奈何せん

（終）

學生と宗教

竹橋杉南

一

現今、苟も道に志ある士にして、我國社會道德の腐敗を憤慨し、國民が趣味の墮落を悲嘆せざる者、殆ど無之に、不思議にも、社會の現象は依然として舊の如く、濁氛充塞、殆ど廓淸の期なきに似たるは、民心全く、無明の闇中昏睡に陷りて、未だ正義の光明を認めざるに由る乎、抑また甘じて墮落の淵に沈淪せんとする程に大膽なるが爲か、殊に近時敎育界の事の如きは、吾人唯耳を掩ふの外無き也、朝に庠序に道を說きし者も、夕は囹圄に呻吟の身となり、剩へ最愛の妻子をして、饑渴の悲境に泣かしむるに至るとは、僞善もまた甚からずや、斯る悲む可く耻づ可き現象を眼前に認め、糜爛せる道德と、腐敗せる宗敎とを有する社會に遭遇したる吾人青年たる者、思を遠く往古に馳せて、建國の由來を稽へ將來國家の運命に想到せば、縱令才智淺陋にして、黃吻白面の喇を受くる者と雖ども、豈一片耿々の志無らんや、此に於てか、吾人青年の重大なる責任を自覺し、以て將來世に立つ可き根柢を固くするは、焦眉の急務にして、又我等の生命の依て存する所なる可し、曩に校風を論じて、調和的發達の必要を辨じ、又學生の本領と題して、青年元氣の復活を鼓吹せられたれば、生が所論は或は蛇足の言たるを免れじ、されど聊か愚見を披瀝して賢明なる諸君が高敎を仰がむとする耳

二

熟々我國現今の精神界を觀察するに、恰も秋風寂莫の曠野にさも似たらずや、枯梗かるかや女郎花は聊か荒凉たる風景に趣を添へざるにあらねど、哀や野分の朝は其さへ地に委して唯、肅殺たる北風の、さらさらと落つる木の葉に、はや來らん冬枯の淋しさを示すが如きは亦我等が精神界

に於ける感想とや云はまし、暖き春の光を身に浴びて、百花咲き匂ふ美しき野に、思ふごち、手を取り交して、自然を謳歌する風情は、恰も北氷洋にありて氷雪の解くるを待つに等しかる可けれど、さりとは餘り哀れに淋しき至ならずや、元氣旺盛にして燃ゆる計の熱情を有する青年學生は如何にして斯る枯淡なる境遇に蟄居するを得可きぞ、籠中の鳥は束縛せられたる其が翅を、再び天空に振はんとて絶えず青空を望み見んが如く、青年も亦常に熱望の眼を以て人生の大海に快樂を目標として漕ぎ出んとす

人類は畢竟快樂の爲めに動き絶ねず苦悶を避けんと力むる者に非ずや、かの一簞の食一瓢の飲、陋巷草廬の裡、肱を枕にして樂其中にありとなしゝ賢人も、一個の桶を此世の住家と爲し赤貧洗ふが如くなりし哲人も、胸中無限の歡樂を感じたればこそ、當時の英雄をして賞讃措く能はざらしめしか、彼が清き樂の前には帝王の宮殿も、陶猗の富も、九尺二間の裏棚住と何の異なる所ありしぞや、尙進で「王位を見る事隙を過ぐる塵の如く、金玉の寶を視ること瓦礫の如く、紈素の服を見ること弊衣の如く、大千界を見ること一訶子の如し」と叫ぶものあるに至りては、人物の軒輊如此大なる者あるに驚くと同時に、「人はパンのみにて活くる者にあらず」との語は直に萬古不磨の金言たるを覺ゆる也

されど、我等が先輩の多くは唯物と云ふ旗幟の下に集まりて、共に渺茫たる人生の荒海に融々たる閑鷗を學ばんと力められき、嚴肅沈重なる君子は未だ之を以て快しと爲すして、聊か世の風潮に逆漕して復古の精神を鼓吹せられぬ、而も頑固不逞の徒に至りては、奮然挺起、曲瀾を既倒に反する熱誠もなく、白眼冷笑徒に世海を睥睨するのみなりき、然りと雖も滔々たる唯物の潮流は此等小數の反抗者を空しく渦旋中に葬り去りて、果ては曩に閑鷗を學はんとせし爽悧怜巧の輩をも、却て濁流に自己破滅の災厄を蒙らしめき、これ物質界に於て過大の要求を爲したるに由るか、將眼前の經營に齷齪として更に餘裕なかりしが爲か、我等其何れなるかを知らずと雖も、精神の糧を忘れしが爲めに、社會が其美妙なる調和を破られたるに由らざる無きか、幸哉最近我等學生間に於て肉体のパンの外に、向上の一路を辿らんとする傾向あるを見て、實に炎威身を焦す許の沙漠を旅行して、忽然緣樹欝葱たる處、銀滴迸る清流に遭遇したるが如き感なき能はざる也枯木寒鴉蕭殺の氣に滿ちしが如き精神界が、今後此等熱誠なる青年が清き心の活動によりて、花香鳥韻、永久の春の如き樂しき現象を呈出せんことを禱ると共に、相與に提携誘掖以て向上の一路に清き光を望みて進んかな、

三

學生と宗教的信念の養成に就きて述ぶる前に、我等が祖先は如何なる宗教思想を今日我等に傳へたるかを歴史に溯りて觀察せしめよ、

今日歐洲の文明は其淵源、羅馬法と希臘の科學及美術と外に基督教とにありと聞く、然らは亦我國の今日ある多少宗教に負ふ所ある可き也、或者は曰く、我國民は思索力に乏しき國民也と、勿論之を過去の歴史に徵して國民が辿り來りし、思想の歴程を考ふれば、其間に於て靈界の偉大無きに非ざれとも、未だ萬國に光被す可き哲人は認め難し、よし此事を以て我國民性上の欠点と爲

すも我國民は古來より新舊兩思想を調和し、內外補充して、百花園中總て採用して自家藥籠中の物となすの能力は、卽ち我等の今日ある所以にして、今後我等も益此力を發揮し以て圓滿なる社會の發達進步を圖る可き也

試に二千五百有餘年前の我國を想像せよ、四面を圍繞せる大海原は今に變らず蒼々たりしなる可しされど內地に至りては、天地宵壤の差も管ならざりき、未だ斧鉞を加へられざりし森林は欝葱として全國を被ひ、蠢々乎たる裸体洗足の醜類は野獸を伴ひ彼處の山腹、此處の曠野に三々伍々群を爲して餌を求めたりしなる可きに偉哉皇祖の功哉神旗一度西陲に飜るや、恣睢暴戾徒らに天物を暴殄せし蕃民皆悉く風靡せざる無く、數年ならずして容易く區夏に光宅し給ひ、寶祚無窮の帝國は既に已に忠勇義烈の國民が赤心を根底として建設せられぬ、爾後奈良朝の末に至る迄其思想に幾分の變遷のりとても月に對して泣き花に對して悲むが如き柔腸を見ずして、皆悉く英氣溢れ龍躍虎嘯の慨ある益良雄なりき、故に國民上代の文學思想に之を觀るとも、花鳥風月を歌ひたる者少くして質樸勁健の風調にとみ、かの大伴家持が「海行かば、みづくかばね、山行かば、草むすかばね、大君の、へにこそ死なめ、顧みはせじ」と歌ひたるに見ても、其氣風は思ひやらるゝなり、素より萬葉歌に厭生思想の分子無きに非ざれども、そは管に僅に佛敎思想の加味せられたるのみ

唐代の文物を飽く迄輸入して、文物典章燦然として備はり詩歌管絃の聲朝に滿ちし平安朝の盛時に至りては忠勇義烈の武士も暖き朱雀大路の風に吹かれては、堅き心の氷も解け初め武勳を以て身を立てし鎌足の子孫は玆に墮落して雨に惱める海棠の如く、曉鐘に驚き烏の音を恨む遊子と成り果てつ

春風殿上紫のゆかり匂ひし藤の花はいつしか色褪せて、赤旗天下を靡かすに至りても、いつしか太平の夢に醉ひ、臙脂粉膩の眼前に逍遙するを見ては、蓬々たる虎髯いかめしき平氏の武者も帽にして涅なるやさしき姿となり、只管大宮人の風を摸しつ、如此奢侈淫逸一世を風靡せし時代に至りては、花々しき昔の精神は唯僅かに東國武者によりて其幾分を保存せらるゝのみなりき

物質界の現象如此變化せし間に、佛儒二道は國民一般の思想上に如何なる影響を與へしぞや、漢學の研究は遂に假名の發名となりて、我國民が思想の表彰に偉大なる便利を與へしと共に、其に伴ひて鼓吹せられし儒道も亦人倫道德の要旨に止まり、忠孝仁義を稱道するを以て、太古より民心が胸臆に傳へ來りし敬神愛國の觀念をして愈益明ならしめたれば、儒道の精神は全く我國古來の思想と調和せしに似たり、然りと雖も佛敎に至りては、儒道の如くに容易く調和せられざりき是乃ち生が事々しく歷史に溯りて論ずる所以にして、今日佛敎を有する我等國民が知らざる可からざる所也

花彩鳥裡に住する人民が、深遠微妙なる印度哲學を授傳せし始めにありては、縱令其裏面に爭權の事實ありとするも、尙確に蘇我物部二氏の爭に於て既に新舊兩思想の衝突を洩らしき、されど文明の潮流は昔も今も有力なりき、乃ち隋唐の文質的文明の輸入に隨伴して佛敎思想は滔々として我國に注入せられ、殊に朝廷の之が傳播を助けらるゝに於ては、其勢また、すさまじく法相三

論華嚴天台倶舍成實の大小乘は漸々輸入せられ堂塔忽然と聳に起り、圓顱日に多きを加へ、平安朝の貴公子は法華經の誦者と成り、水晶の念珠は縉紳が綾羅の袖を飾りき、此時に當りて、庶民にして貴紳と膝を交へ才媛と朝に相並ぶを得る唯一の道は、解脱幢相の身と成るより外なかりき、故に少しく志ある者は奮て出家得度するに至り、宮中常に圓顱の出入するを見き、從て當時の文學も大抵佛教思想を含まざる者なしと云ふ可し、されど大体に於ては唯法華の諸品維摩が譬喩を僅かに消化したるに止まりて深遠なる佛教思想は決して歌はれざりしが如し故に彼等が出家得度も却て俗生に戀々たるの致す所にて、眞の得度なりしかば大に疑ふ可き所なり、此に於てか普く十方衆生を救濟せんとする佛陀の大誓願は、悲む可し一種衒學の功名心と俗界の名譽との爲に野心滿々たる俗僧の掩弊する所となり、佛陀金口の尊き教は宮殿場裡に討論の問題となるに非ざれば奥山に木魚と枯死する弱虫の唯一の慰みとなりき、もとより其間に名僧高德の吾人が決して忘る可からざる者輩出せざるに非ずと雖も淫奔の風吹きすさみ、柔弱男子のもてはやされし時代に於ては彼等が深遠幽緲なる說法も徒に無常迅速の外は解せられざりし如く、奥山に鳴く鹿の音に恩愛の情羈し難きを感じ、立田河に散りて流るゝ紅葉にはや襲ひ來らん死神を怖れ、花に泣き月にかこち、妻に離れたりとて出家し子に先立れたりとて得度し、天災に遇ひたりとて遁世し、世は擧て涙の淵に沈みつゝありき

嗚呼彼等が厭生は寧ろ薄志弱行の徒が利欲の追求に蹉躓したる結果にして、畢竟佛教の根本思想に躰達する能はず、徒に無常迅速の曠野に流浪して一生を泣き暮したるに非る無きか、清澄掬す可き自然の賜物も流せずしては、終に腐敗して人を毒するが如く、彼等の多くは活きたる宗教を無常厭生の涙の箱に密閉したるが如し、如此偏見は所謂獅子身中の虫にして其が爲めに蠶食せられたる宗教界は今に其害を免れざるに似たり、然りと雖も遙か後に至りて、偉大なる天才の清き涙と溢るゝ許りの熱誠とを以て、忽然教界に出現せらるゝことを見て、恰も空寂枯淡なる宗教界に春風春水一時に來るの感なき能はざる也

四

宮殿場裡、理義の詮索を以て宗教の能事終れりとせし間に人性本然の要求は、自然の理として、枯淡なる哲理以外に渴望する所ありき、かゝる本然の要求は人類として昔も今も變らざりき、若此の如き靈性上の危機を洞察して、其が龜裂せる心田に甘露の法雨を降さんか、是こそ長く彼等が渴を醫するのならず、其妙味も亦永く忘る可らざるものなれ、生が上に擧げし靈界の偉人は實にかゝる時に、かゝる法雨を降せしなりき、

往古猶太に於けるパリサイ、サドカイの徒が煩瑣なる說明と、繁雜なる儀式に拘束せられて渴ける心田に『活ける水』を與ふるを忘却せし時に於て、『天國は近けり、悔い改めよ』との野の叫聲はげに闇路に迷へる罪の子等には喜ばしき光なりき、されどこは將に來らんとする靈界の偉人が僅かに赫耀たる光明を洩ししに過ぎざりき、十三世紀の始に於ける我國にも亦如此ものありき、源信法然は親鸞が爲めの聖ジョンなりき、其唱道し給ひし淨土教は素より珍奇なる法に非ずして、他の聖道諸宗と等しく、平等一味の眞理の大海より時機に相應して流出する所なれども、未だ其

機緣熟するに至らざりしが、此に至りて始めて其眞髓を發揮せられしなりき、聖人は世の所謂哲學者ならざりき、宗教學者ならざりき、徒に空想に馳せて實行に疎き人ならざりき、彼は如來と共に住みて唯其使命をつくすの外なかりき、此卽ち聖人の偉大なる所以にして、邪念堅氷の如き惡徒も聖人が信仰の活火にあひては、自然にとけて、同しく一味の大信心に流入するなりき、宜哉六百有餘歲を經たる今日、尙且人をして歡喜の涙にむせばしむるあるを、かゝる高潔なる信仰が盛に下層社會に蔓延しつゝありし間に、不立文字、見性成佛の直覺的宗教はまた剛毅なる武士の間に行はれ彼等は之に依りて確乎不拔の精神を養ひき、爾後德川時代に至りて、國學の復興と漢學の隆盛とは稍佛教の勢力を削減したる可けれど、一般國民は主として此二種の宗旨によりて精神の安慰を得たりき

かく歷史上より觀察すれば、神儒の二道は祖先崇拜の点に於て契合する所ありて、共に相助けて忠孝仁儀の美德を涵養し、敬神愛國の美風を發揮せりと雖とも既に民族的範疇を超越したる佛教思想は現實以外の實在界に其根底を有するにより民族的色彩を帶ひたる心眼には、餘りに廣漠偉大にして十分之を咀嚼すること能はず、其活潑々地たる微妙なる活動的方面は朦朧の裡に見失はれんとしたるに、喜しき哉千有餘歲の國民が修養は空しからず、其微妙なる活動が實現せられんとする傾向あるを見て、吾人は親鸞の偉大なるを憶ひ、其信仰を敬慕する所以なり

五

物の成就するは、成るの日に成るに非ずして、必ずよつて來る所ある可し、東海の孤島が一躍して世界のコンミユニテイに入りたる日本文明急轉直下の勢力は不思議に非る也、歷史上の奇蹟に非る也、南洋の蠻民にカントの哲學を敎へ、トルストイを談ずるは、眞に解せられざる所なりと雖も、既に二千有餘歲の歷史を有する國民が今日西洋の文明を咀嚼するは、文明の淵源存するの致す所也、然るを徒に國民の摸擬性に歸し却て自己を卑くして、輕薄なる風潮に投入したらんは青年學生の爲めに決して喜ばしき事に非る也、テニソン卿歌ふて曰く

I held it truth, with him who sings
To one clear harp in divers tones,
That men may rise on stepping-stones
Of their dead selves to higher things.

青年學生も他日第二の國民として、先輩の後を繼承し、一層高尙なる他位に進み得可くんは、吾人が現今の一擧一動は亦以て、將來をトす可き也、故に青年は未だ世故に馴れず、學識淺陋なりとても一概に青年を蔑視し、其言行を鉗束せらるゝに至りては、既に己に青年を顧みざる者と云ふ可し、況んや青年其自身に於ても、相互ひに輕蔑して鼓舞する所なきに於てをや、青年は人生の春に於ける半開の花の如きか、而も半開の花なりとて之を棄てゝ顧みざる時には、何時其爛熟の美を見得可きぞ、故に青年たる者は少なくとも青年間に於て自由の精神を發揮す可き也

此に於て吾人は『ビー、アンビシアス』と古人が叫びしを玆に再び絕叫すると同時に、現今の社會を目擊する青年に對しては、特に物欲の追求以上に於て、此語を繰返さゝるを得ざる也、かの罪惡

を感ずるパブリカンは滿足したるフアリシイズより進歩の望ありと云ふ者さへあるに、清淨潔白なる青年に於て豈此言なかる可けんや

賢明なる諸兄は云はん、爾は我等を以て暗に宗教家に擬する者也、宗教は我の關する所に非ずと、諸兄よ、人生の歸趣を教へ、吾人が日常行爲の根本となり、苦悶する精神に一大安慰を與ふ可きものは、何處に於て此を求めんと爲し給ふぞ、科學に求む可きか、哲學に依る可きか、我は未だ此に答ふるの技量を有せずと雖とも古來より諸兄に傳へらるゝ歴史的事實は明に之に答へ、旦日に之を證するに非ずや、然るに賢明なる諸兄が尙此言を爲し給ふとすれは他に其原因なかる可からず吾人は之をポープの歌を藉りて云はんが、乃彼歌うて曰く

For modes of faith,, let priest and bigots fight,
He cant be wrong whose life is in the right.

如此思想は確に青年學生一般の有する所にして、抑も彼等が宗教を度外視する所以に非らさる無きか是を以て生は前に述べし古來一般の我國民が宗教思想の反動に歸する者なり、乃ち極樂淨土と云へは十萬億佛土の彼方に金銀瑠璃を以て光り輝く世界なりとし、其大會中に往生するは啻に此土を厭離し、死と云ふ唯一の關門による可しと思惟せしに非ざれば、奥山に香の煙細き處、無念無想を以て、佛教の極致なりと誤解せし無智人民の思想を以て青年が直ちに、宗教其物の價値を推斷するに非るか、是生が佛教を有する國民として、愈益親鸞に對する敬慕の念を深くし、民族的範疇を超越したる宗教の鼓吹者として、感謝せざるを得ざる所也、

吾人は社會の一人にして、社會は一人の社會に非る也、私の不平や、私の憤懣を以て、公然社會を咒咀し徒に心理的老弱に陷りて、世をはかなむが如きは、個人として存せんも社會上には死したる者也、寧ろ奮て社會萬般の事情に於て其の病根を指摘し以て社會をして、一歩一歩、高尙なる地位に進ましむるは、畢竟吾人青年たる者の如何なる事業に從ふに關らず、最も名譽ある、最偉大なる企圖にして、人類としての價値もまた此に存するには非ざるか、吾人はトルストイ伯が作の「レザレクシヨン」を讀みて愈益此感を深くせざるを得ざる也、ロングフェローが

Life is real! Life is earnest!
And the grave is not its goal;
Dust thou art, to dust returnest,
was not spoken of the soul.

と歌ひたるは、實に社會の精神が、人生の戰場に花々しき討死をなして　笑ひつゝ絶待に復歸す可く我等に向て奏したる進軍喇叭の響に非ずや『身後堆金柱北斗、不如生前一樽酒』と云ふは、たゞに醉狂詩人が囈語と看過す可きのみ

諸兄よ、此思想を以て十九世紀の社會が生み出したるものと思ふ勿れ、かゝる偉大なる精神は既に已に遠き昔に於て、釋迦牟尼世尊が金口より「無我」の二字となりて、數千年の今日活動しつゝあるに非ずや、利己的根性は佛陀の嚴しく戒め給ふ所にして、方等の彈訶は正しく社會を顧みざる輩に向ての警醒の聲なりき、其一に曰く高原の陸地に蓮花生ずとも、聲聞緣覺は成佛なし難し

と、迦葉尊者之を聞きて泣き、善吉尊者茫然自失、手にしたる鉢の落つるを覺えざりきと、是に由て之を觀るとも宗教は決して社會を離れたるものに非る也

然りと雖も、諸兄或は云はん、かゝる廣漠たる思想はたゞに理想に過ぎざる可しと、されど諸兄よ思へ、理想なりとて顧みざる時は、進歩何處にか之あらん、發達何處にか之を見む、信仰は事實なりとは決して動す可らざる眞理なり、

諸兄よ、ダマスカスの途上忽然と感せしポーロは以て後世の聖ポーロたりし事實を思ひ、「ミザラブル」中のジャン、バルヂャンは死より復活せるBishop Bienvenuなるを信せば、他日社會の經緯と成る可き青年學生が、元氣旺盛にして欲望熾盛なる時に當りて、高潔なる信念の修養あらずんば爭てか溷濁せる社會に其責任を盡し得可きぞや、

佛教の實踐信仰主義を鼓吹す

本莊廿一郎

一、いかにして人世行路を經過すべきか、―大難門、二、人世は大洋か、―人世の運命と誘惑と、―人世の羅針盤、―偶然耳僥倖耳、―佛教の光明、三、予の佛教に對する態度、―直覺信仰主義、―樗牛の與へし教訓、―予の佛教理想は簡單平易、四、佛教の厭世に就きて、―詩人と宗教との厭世、―佛教の光は積極的也、―佛教の受けたる不幸、―五、濁世、―無信仰の社會、―來れ佛の靈光、

一、

人間は抑も何の爲めに人世に生れ出でたるか、何によりて險惡多難なる世波を安かに渡り得べきか、奈何にして人世行路を尤も滿足に經過し得べきか、これ實に予れ等が先づ第一に研究すべき絶大至重の問題に非ずや、夫れ一日を迎へたる時、吾人は如何にしてこの新來の一日を尤も平和に尤も滿足に經過し得べきかを念ひ、一年を迎へたる時、いかにしてこの新來の一年を尤も安全に尤も神聖に經過し得べきかを想ふの吾人は、五十の春秋を送迎すべく人世に世を享けたる事實の下に、今や正に世波紛糾の巷に踏み出ださんとする門出に於て、いかにしてこの五十年を尤も平和に尤も安全に尤も神聖にはた尤も滿足に經過し得べきか、換言すれば吾人の處世策人世觀を確定し置く事は敬虔眞摯なる人間の至重なる義務に屬す、さはれ這般の問題たるや、頗る單純の如くにして而も複雜に、一見易々たる如くにして而も幽玄也、地の東西と云はず、時の古今と云はず、よくこの大問題を提へて之に明快切實精透嚴正なる解釋を下し得たるもの實に寥々として曉星も啻ならず、あゝこれ一切人間の前に提供せられたる大難問に非ずや、予れ豈大難問を解せんとすと云はんや。

二、

卑近に例を採らば人世は夫れ茫々たる大洋の如きか、而して吾人人間はその上に活動すべき航海者ともたとふべきか、大洋には航海者を苦しむべく迷はすべき濃霧あり、暴風怒濤あり、乃至暗礁潮流の千障万難ある如く、變轉極りなき所謂浮き世には予れらを苦むべく汚すべく迷はすべく離別、機會、天變、老、病、死の如き無限の運命あり、肉慾、功名富貴、法律、階級形式、帝國主義、戰爭の如き無數の誘惑あり、爲めに人は古も今も迷、悔恨、悲哀、落膽、罪惡の送迎に

疲れてその貴き靈の光を發揮し能はざるもの〻如し、想うてこゝに至れば誰れか悚然として恐れざるを得んや、夫れ航海者や僅々數日の航海を爲さんとするにも必ず先づ尤も精功なる羅針盤、健全なる航海術の智識、その他暴風狂浪等に備ふる一切の用意殆んど周到ならずと云ふことなし、夫れ然らんか人生の航海者たる吾人は、遙遠多難なる五十年の航海に焉んぞ恐るべき暴風狂浪に備ふる一切の用意なくして可ならんや、精巧堅固なる一羅針盤なくして可ならんや、果して人生の航海に一羅針盤を要すとせばそは實に何者なるか、知らず、武士道か、個人本能主義か、唯物論か、國民教育勅語か、古今東西の倫理道德哲學說か、吾人を以て見れば、伊庭壯太郎を名殘として今や正に泯滅せんとする武士道は一競爭的偏狹的種屬を形作ることの外何等大なる意義なきものの如く、自尊と自我とを向上せる個人主義は社會の存在を否定し難きはた眞面目なる人生の眞理としては頗る狂暴空論の感や切に、唯物論や冷酷、野性、淺見遂に云ふに足らず、教育勅語を中心とせる國民教育は所謂忠君愛國者以外偉大なる人格の成立を可能せざるもの〻如く、はた古今東西の倫理道德哲學說や煩瑣なる形式條理を措いて遂に人世の大歸趣に何等の解釋を與ふるべく不適當なるもの〻如し、されど世人或は云はむ、夫れらによりて殆んど安全に滿足に人生の歸趣に到達したる人少からじと、想ふに彼等が安全滿足に人世の航海を遂げ得たるは、恰も一葉の扁舟に掉さして偶恙なく大洋を横ぎりて彼の岸に達したるが如し、これ元より偶然のみ僥倖のみ、何ぞ必ずしも人世航海に成功したりと稱し得べけんや、もしこれを見て直ちに一葉の扁舟を以て大洋の航海を敢へてせんとする人あらば、誰れかその狂と愚とを哂はざるものあらん、彼の教育勅語、武士道、哲學倫理道德說等によりて人世の歸趣のみに到達し得べしと思惟する淺見者流に至りては、遂に扁舟に掉さして蒼茫万程、何時怒濤狂嵐の襲來を保し難き大洋に乘り出さんとするに異ならず、時に或は無難に彼の岸に着することなしとせず、こは偶然のことのみ、誰れか其の前途の難破漂流を豫め否定し得るものぞ、吾人その可なる所以を知らず。

然らば予れらの完全なる羅針盤とは果して何者なるか、暗雲妖霧の間に予れらの進路を明かに照さん光明は抑も何者なるか、他なし、大聖佛陀の教の光明也、その眞理を中心とせる活きたる信仰は確にその一つなることを予れは深く信ず。

三、

予れの佛教は奈何なるものなるか、予れの佛教は尤も簡單平易淺薄也、自白すれは予れは佛教に就きて必ずしも多くを知らじ亦知らんともせじ、予は信仰の佛教を知りて教理研究と哲學化せんとする佛教を知らず、實踐的、迷信的(常識と一致せざる信仰を迷信と云ふ人あらば)情的、社會的の佛教を好みて万卷の經典引證的、煩瑣形式的、個人的佛教を好まざるもの也、かの哲學的常識的の眼光を以て佛教を疑ふ冷血動物研究先生の余りに多きに嫌焉たるもの〻一人也、夫れ佛教は學理に非すして信仰也、信念也、かの佛教の晩近漸くその社會的宗教制力の著しく衰微せんとする悲しむべき傾向を示せるは確にその學究的、形式的、個人的に偏したるの弊に因せずんば非じ、又余は信せんと欲す、佛教々理は目的に非ずして手段の一つ也、信仰は目的也、轉迷解悟し涅槃に入るは佛教最終の目的也、實に佛教は古今無限永劫に渝らざるべき大活動、社會的大偉業

也、逝ける樗牛博士がその深大なる學究と哲學とによりて得たる日本主義乃至本能主義の人間最終の大問題を解釋することに於て、遂に淺近なる迷信にだに及ばるざることを悟りての「予れらの求むるはパンにしてパンの比較研究には非らざる也」てふ信仰要求の痛刻なる絶叫は鏘として今も予れらの耳に新しき響のあるに非ずや、予れらは夫によりてあらゆる主義、科學、乃至哲學の實に愚夫愚婦の淺薄なる信仰にだに及ばざること頗る遠きの大眞理を學ばずんは非じ、

繰り返へす、予れの佛敎は尤も平易簡單淺薄也、乃ち予れの佛敎は吾人々間を佛となし現世を極樂となすの方法也、地獄ともたとふべき現世を黃金時代と化し、鬼の如き吾人罪惡愚痴の塊を具足圓滿、大智識、大慈悲の佛となすの大理想はやがて予れの佛敎也、少しく詳しく云へは予れの佛敎は予れらをして、肉體を離れて淸淨無垢にするもの也、物質を離れて滿足淸明にするもの也、外界を離れて堅固勇猛にするもの也、自己を離れて謙遜慈悲にするもの也、卑しく小さき人間を離れて唯一の眞理に到達せんとするもの也、轉迷開悟、涅槃に漸近する大理想也、あゝ予れの佛敎はしかく簡單平易也。

四、

予れは序でに佛敎に對する重なる批難の一つに辨解を與ふるの勞を辨せざらんとす、世人稍もすれば曰く、佛敎は厭世の敎也、吾人は與みす可からずと、然り佛敎は夫れ或は厭世敎ならん、されどその厭世は特殊の意義を有す、凡て現世は現實也、尤も罪惡に充てる處也、「あらゆる惡魔の潜める處也、尤も不淨不潔なる處也、換言すれは頗る度し難き處なり、」もし純潔、圓滿、至美、を要求し理想とする人世詩人や社會宗敎家の目より見んか、現世は餘りに汚れたる者ならずや、餘りに恐ろしき處ならすや、於是乎、厭世の念勃然として彼等に起る寧ろこれ自然のことのみ、必ずしも深く怪むに足らざる也、而してこの厭世の念たるや詩人にありては失望の夫にして宗敎家にありては希望の夫也、詩人にありては消極的にして宗敎家にありては積極的也、詩人の厭世はこの濁れる現世を厭惡して長へに遁れ去らんとするの夫にして、宗敎家の厭世はこの腐敗せる現世を厭ひて之を救濟せんとするの夫也、かくて佛敎の厭世は現世に慊焉たると同時に極樂を讃美理想とする希望的積極的の厭世主義也、若し夫れそこに現世に滿足せる、樂天せる人間あらんか、主義あらんか、宗敎あらんか、そは正しく墮落の聲也、落膽自棄の聲也、吾人深く恐れざる可けんや。

かの現世を救濟せんとする宗敎家を『世を捨てたる人』と稱し、宗敎傳導所たる寺院を世捨人の隱遁所または閑人の集會所と考ふる今の日本に於ける佛敎に對せる大なる謬想は、恐らくは頑迷なる漢學者國學者一流によりて流布せられしものならん、而して夫によりて予れらの佛敎の受けたる不幸や深大也。

五、

あゝ混濁たる末世、この混濁たる末世は尤も佛陀の信仰を渴望せるの世には非ずや、

あゝ奇怪なる濁世、この奇怪なる濁世は尤も佛陀の靈光を翹望せるの世には非ずや。

そもこの混濁たる末世、奇怪なる濁世はいかにしてしかく完全に形成せられしなるか、そは他

なし、さぞ信仰なきのゆゑのみ、そこには宗教の形式と大なる寺院教會と無數の宗教家と所謂信徒なるものとはあり、然れども活たる信仰や信念やなし、かゝる條件の上に形成せられたる世、換言すれば信仰なき社會はしかく混濁奇怪正にこれ百鬼夜行圖に髣髴たるもの也、今の日本にては、其の政治家は信仰を無用視する也、其の教育家は信仰を無用視する也、其の學者は信仰を無用視する也、其の實業家は信仰を無用視する也、其の軍人は信仰を無用視する也、其の宗教家すら信仰を無用視する也、彼等は實に其の權謀術數と學究道學と營利拜金と横暴權勢と教理研究との外、活たる信仰を向望するの良心と識見と余裕とを缺如せるもの也、彼等は人生最極の大問題を解釋するに今日に於て宗教を除き信仰を離れて何者もなきことの尤も明白なる事實と、崇高なる品性、偉大なる人格とを形作るに今日に於て宗教を除き信仰を離れて何者もなきの確乎たる眞理とをさへ懷疑し否定せんとあせる淺見無謀の輩也、危い哉、彼等によりて形成せらるゝ世や、墮落また腐敗、澆季末世、滔々一世を擧げてその渦中に沒し去らんとするもの豈夫れ偶然なりとせんや、今の時、三千年の佛陀の永久不滅の靈光を仰望するの聲はこの腐敗混濁の世道人心を救濟せんとする尤も偉大なる聲の一つたらずんば非じ。

この稿を草し終れる時、一友來りて余の毫も予の佛教信仰を解釋せざるの不可なることを語りぬ、想ふにそは自ら世にその人多からん、何ぞ必らずしも淺劣予の如きに待たんや、若し夫れクリスト教に關して予の全く言說せざりしは自らこの愼重なるべき問題を精査考究の他日に殘さんとする所以のみ。（三十六年二月十日紀元節の前夜脫稿す）

雜錄

歷史的諺の二

浦井恒堂

Cato (イ) He is a Cato (ロ) Catonic severity (ハ) Censorius

(イ)は質朴の生活を爲し品行方正克己心强く擧動粗野愛國の熱情に富める如き人をいひ(ロ)は社會の風紀個人の道德督勵の嚴なるをいひ(ハ)は惡德を示す語にしてcensorius person とは好みて人の秘密を發く人 censorius critik は皮肉的罵詈的の批評をいふ皆古代羅馬勇士の最後の典型として慕仰せられたる Marcus Porcius Cato より出たり史を案するに渠は紀元前二三四年羅馬の北方タスクルムの農家に生れ稍長したる後は其雇役せる奴隷と同一の麁食粗衣に甘じ自ら耕耘に從事せしが十七歳の時出てゝ軍隊に入り二〇九年タレンタム役に二〇七年カルタゴの將ハスドルーバルの戰歿したるメタウルスの戰に與り二〇四年スキピオに從ひてシ、リイに赴き一九九年羅馬に於て警視(エーディル)となり累進して一九八年行法官(プレートル)となり任期滿て後サルヂニアの太守となりしか嚴に有司の收斂を禁し令名嘖々たり一九五年執政官(コンサル)に推され其後或はシリア役に從軍し或は西班牙の太守に任せられ名聲益す揚かりしか特に渠の名をして世界的ならしめしは一八四年渠か其友フラックスと共に監察官(センソール)たりし時にあり蓋し羅馬が東方諸國殊に希臘地方卽ち當時文明の點に於ては遙に羅馬に優れる地方と盛に交通するに至るや希臘の文物盛に羅馬に輸入せらるゝと

同時に最も有害なる影響を蒙り古の勤儉尚武の美風地に墜ち士風の敗頽社會の墮落滔々として底止するところなからむとす而して由來カトーは極力素朴なる古羅馬の美風を保存せむことを努めしを以て今や其職權を以て持說を厲行し嚴に驕奢淫蕩の風を戒飾し犯す者は顯貴を憚らすして檢査し同時に元老院議員七人を處罰し一時を聳動しけれは時人渠を呼んてセンソリユスといへり公平に觀察すれば當時希臘文明に心醉せるスキピオの一派の如き其罪少からすと雖もカトーの擧措も亦他の極端に馳せたる者といはさるべからす渠の主張をして實行せしめば永久未開の狀態に甘せさるべからず一國文明の進步と並立する能はさるや明なり況んや當時羅馬社會の墜落は其由來する所遠く希臘文明の輸入は偶ま以て其勢を促進したるに過きさればなりされは彼の主義は其熱誠を諒とすへきも實は不通の論に過きす果して彼の熱心も水泡に歸したりき

Damon and pythias（獨 Damon und Phintias） 頸頸の友管鮑の交の意　此二人はピタゴラス派の哲學者にしてシヽリイ島のシラキユースに住み夙に其交情を以て鳴れり傳說に憑れば一日ヂオニシウス王の時（シラキユースにヂオニシウ王二人あり父子相承け長ヂオニシウス及び少ヂオウニシウスといふ其孰れなるかを知らず）其侍臣の間に此二人の親交に關して爭論を惹起しけるに王は元來暴戾の君なりしを以て直に之を實際に就きて檢せむとを欲し國王弑虐の陰謀に與れる者なりとてピシヤスを拘引し之に死刑を宣告し以てダーモンの擧措如何を窺はむとすピシヤス宣告を受くるや自若として色を變せす曰く謹みて命を奉すたゝ臣一私事の緊急處分を要する者あり願はくは臣に假すに日沒まて約半日の時を以てせよ臣家に歸り處分を終らば直に還り來り死に就かむ王は臣の擔保として臣か還り來たるまて臣か親友ダーモンを拘禁せらるべしと王之を妙としダーモンを召して之を告くダーモン亦た欣然進て自ら質となれり既にして夕陽漸く傾き黃昏に及へともピシヤスの歸り來らす因て王はダーモンに迫りたれと彼は彼の友の約に背くべきにあらず必す何等の免るべからさる障碍の爲め遲延する者なるを信じ王に請ふに少時の猶豫を以てせしか其終に還り來らさるを見進むて刑の實行を乞ひ將に刎られんとす而してピシヤスは種々の障碍の爲め甚た遲れしかば親友の危きを虞り急走して還り來たり白刃の既にダーモンの頭に蒞めるを望見し絕叫して曰くピシヤス是に在りと刑場に闖入して卒倒す王は二人の相信することの厚きを見て感歎し直に其罪を釋し且つ第三者として王をも彼等の友に加へんことを請ひしかど二人は之を容れさりきとそ此語の他エパミノンダスとペロピダス獨の文豪シルレルとゲーテも亦た屢々同義に用ひらる

Danaides' Work（Eine Daneidenarbeit） 無益の努力徒勞の意　ダナオスは希臘アルゴス市の創建者にして埃及より來たれり初め埃及リビア國王たりしが其兄弟エギプトスの嫉視する所となり難を避けて希臘に來たりアルゴスの王となれり彼は多くの妻妾を蓄ひ女子のみ五十人あり總稱してダナイデスといふ而してエギプトスも亦た五十人の子ありしが皆男子なりき彼は此兒童に命し盡くアルゴスに赴きダナオスを圖らしむダナオス之を悟り敵の謀の裏をかゝむと欲し彼等を諭して曰く吾に對し不軌を圖るを止めなば吾か女婿とし吾女を娶らしめむと五十人の子喜ひて

之に從へり於是ダナオスは其女に謀を授け結婚の夜に於て其良人を刺し殺さしむ獨り王女Hypermnestra のみは假借にも己の良人の名あるLynkeusを殺すに忍びすと爲し告くるに實を以てし相携へて奔る後王の怒解け公然リンケウスの婦たらしめしか他の四十九人の王女は其良人を騙討にしたる爲め人其罪を惡み之を娶らむといふ者なし王大に苦しみ王女を懸賞として盛大なる演武戲を行ひ勝者に與へたり既にしてリンケウスは皇婿となりたる後も彼の兄弟のため復仇の念を斷たず機に乘して四十九人の王女を虐殺し尋て國王ダナオスを弑し王位に登れり偖四十九人の王女は冥府に於て良人殺の罪により地獄に送られ底に漏穴ある桶を以て水汲の苦役に服し從て汲めは從て漏れ永久苦惱し居れりといふ是に因りダナイデスの勞働といふ語出たり

Die is cast (Der Würfel ist geworfen) 骰子は投せられたりとは吾意決せりとの意なり

紀元前六〇年ジーザア。ポムペイウス。クラッス、の三雄同盟成り五四年ポムペイウスの妻シーザアの女ジユリア歿し五三年クラッス、は波斯と戰ひ欺き殺されシーザアホムペイウスの兩雄大に撞突せむとす是時に方リシーザアはゴールのラベンナに在り元老院に對し努めて恭順の意を表し事局の圓滑なる解釋を冀ひしかとも以太利の風雲益す急にして元老院はポムペイウスの敎唆により不當なる最後通牒を發しゝかはシーサアは到底平和の期待すへからざるを察し敵の機先を制せむと欲し見兵五千を率ゐ羅馬に向ひシーザアの管轄地と以太利との境界を作れるRubicon(獨Rubico)といふ小河に到るシーザアにして一歩を進まば國賊の名を免れす畢生の安危此瞬間に於て決せらるへけれは流石のシーザアも馬を停め水に臨みて躊躇すること良久しかりけるか竟に叫ひて曰く骰子は既に投せられたりと馬を躍らして進めり(四九年)されと此語はシーサアの創意に出てしにはあらず希臘の文豪メナンデルに始まりプルタークのシーザア傳に依れはシーザアは希臘語を以て此語を發せるなり後世宗敎革新時代に於て著名なる武士ウルリヒ、フッテンは此語を採用して箴言となし拉丁語を用ゐて又は獨語を用ゐてIch hab's gewlagt といへり此ルビコンの事蹟より To pass the Rubicon は決心したるを示し Caesar at the Rubicon (C ad Rubiconem)は決心を必要とする位置を示し Caesar on this side of the Rubicon (C. citra Rubicon.nem)は既に決行し了りたる意を示すものとす

Diogenes　富人と共に地獄に在るよりもデオネゲスと共に桶中に在れ(Besser bei D. in der Tonne, als beim reichen Mann in der Hölle)不義にして富且貴きは浮雲の如しの意　デオゲネスはキニック哲學者の鏘々たる者なり cynic は希臘 kynikos (Dog-like) より出て其行狀犬に類するより名けられたりとは普通の說なれと實は此派の開祖アンチステネスか雅典の學校 Kynosarges に於て敎授せしより出たるなり渠は黑海海岸シノープの人にして後雅典に來り盛にキニック派の哲學を皷吹し齡稍傾きし後エギナ嶋に赴かむとして海賊に獲られ當時奴隷賣買の中心市場たりしクリート嶋に連れ行かれ賣却されんとせしか渠は市場に於て大呼して曰く何人か己れの主公を購むとする者は無きか吾を購ふ者は吾を師父として仕へさるへからすとコリンス市の富豪 Xeniades 之を奇としデオゲネスを購ひ去りて其兒輩の師傅としデオゲネスも其位置に滿足し三二三年コリンスに於て易簀せりデオゲネス夙に碩德を以て稱せられ淡然として世に求むる所無く人の

嗤笑するを顧みす常に長髯を垂れ襤褸の衣を纏ひ大桶の內に睡る其所有品は食品を收むる一敝囊と一本の杖と一の木椀のみなりしか後幼兒か手もて水を掬ひ飲めるを見木椀すらも無用の長物として棄て去りきといふされは人々渠を罵りて犬といひ大哲學者プラトーは笑ふて發狂せるソクラテス（ソクラテスが淸貧を樂むへき敎訓を極端に實行せし故）といひしかとも毫も以て意と爲さず傳說に依れは歷山大王か希臘を征してコリンスに在るや夙にヂオゲネスの名を聞知せしに因り儀仗を盛にし往て之を見る先生方に桶の前に出て日に向て溫を取る大王の來るを見て起て去らむとす大王進みて禮を行ひ之と問答時を移す終に至り歷山之に謂て曰く先生の敎を受け益すること甚た多し何を以て厚く先生に謝せむとヂオゲネス對へて曰く吾願はくは吾前を避けて太陽の光を障く事なくんば足れりと歷山の從者皆ヂオゲネスを以て愚にして禮を知らすと爲し王を勸めて歸らしむ王既に去り更に回顧し喟然として歎して曰く嗚呼吾若し歷山ならずんは必すヂオゲネスたらむことを冀ふと

Diogenes' Lantern (Diogenes laterne)　ヂオゲネスの雅典に在るや一日白晝提灯に點火し街上を走れり人異みて其故を問ふ對へて曰く吾今人を索めつゝあるなりと（I am seeking a man）先つ慈愛の神を祀れる祠に至りしに一僧の其門に立てるありヂオゲネス進み請ふて曰く吾か貧を憐み一銅貨を惠め以て吾か老を養ふの資たるべきなりと僧曰く我か兒よ我か祈禱を以て滿足せよ汝に與ふべき者無しと顧みすして去れり乃ち進みて一商店の前を過きしに盛裝せる貴婦人ありて買物を爲せりヂオゲネス進み寄り請ふて曰く貴女よ貴女は空しく貴女の快樂の爲めに貨を費して顧みす此飢餓に迫れる老翁を憐み給へ貴女曰く如何にも妾は汝か貧苦を憐む之を以て行て麵麭の一片を得よと一銅貨を地上に投す而してヂオゲネスは竊に貴女の爲さむ樣を窺ひしに十二片の銀貨を以て彼女の愛犬の頸環を購ひ得々として去れり乃ち歎して曰く嗚呼吾れ人にして一小犬に如かすと次に一貴人の車を馳せて過くるに遭ひ直に車に飛ひ付き叫ひて曰く貴公子暫く車を停めて吾か請ふ所を聽けと貴公子勃然憤を發し罵り曰く咄狂漢何をか爲す退かすは踏み殺すべしと會ま一奴隷あり翁を押し除け恭しく一片の銅貨をとり之を其帽に入れて翁に獻せりヂオゲネス叫ひて曰く天よ吾は始めて人を發見せり而して其人は嗚呼奴隷にてありけりと乃ち彼の提灯を消し去れり

Du sublime au ridicule is u'y a qu'un pas (Vom Erhabenen zum Lächerlichen ist nur ein Schritt) 大賢と至愚と其差一步のみ此語は拿破烈翁か露國より敗走せる時の語にして有名なる者なり

Draconian Low (Drakonische Gesetze) ドラコ（希臘ドラコン）は雅典の貴族なり紀元前六百二十年同族の推薦に因り首席アルコンに任じ雅典の慣習法を編纂して成文律と爲し、が渠は一般の冀望に反し新法典を以て貴族專政の利器と爲さむことを謀りしかは苦情百出するに至れり渠の編纂せる刑法は亂暴至極の者にして極めて輕き竊盜罪も浮浪罪も之に擬するに死刑を以てし殺人犯瀆神罪の如き重罪と徑庭なかりき是に依りドラコの法律とは峻嚴酷烈なる法を呼ふ諺となり有名なる希臘羅馬比較傳記の著者プルタークは形容的にドラコの法は墨を以て書せられす血を以て書せりといへりドラコの事績詳ならす人民の憤怒の爲め雅典より出奔しエギナに於て客死せし

か如し

Egg of Columbus (Das Ei des C.) 一見しては非常に困難にして不可能の如き事も實行したる後より見れば何でも無き事をいふ　コロンブスの新太陸に達して本國に歸還し其名聲嘖々たるや其大功を嫉く思へる貴族輩は渠の功を小にせむとして皆曰くコロンブスか新世界に到達せしか如きは誰人も皆之を能くせむと一日衆人相會し〻時貴族等此事をいふコロンブス因て一の鷄卵を取り衆に謂て曰く諸君誰れか此卵を几上に立るものありや衆人相顧みて默然たりコロンブス直に其卵を壓し潰し之を几上に立て〻曰く如何と衆叫んで曰く此の如き事ならは吾等亦能く之を爲し得べしとコロンブス笑ふて曰く諸君は能く之を爲し得可しといひ余は已に之を爲し得たり是れ余か諸君と少しく異なる所以なりとされと此卵の話はコロンブス以前より在りし事にしてコロンブスは機に臨みて此話を應用せし者に過きさるなり

El Dorado　古は天國といふ意に用ひ現今は俗に所謂金穴の義に用ふ　エルドラドは西斑牙語にして字義は黃金の土地なり此語は近世紀の初所謂發見時代より始まり南米に在りと信せられたる理想國にして金銀寶石の富計ふべからさる者とせり　盖し此說の出所は米國印度人中に行はれたるCundinamarcaの酋長に關せる傳說にして印度人の信する所によれは該酋長は時々香油を以て全身を塗抹したる後金粉を押捺するを以て外觀純然たる黃金佛なりと而して此說はピザロの遠征に從ひたるOrellandoに因りて針小棒大に觸れ廻されしかは十六世紀に至りては終に事實と認められ其地はParimeの海邊なる西斑牙領Guayanaの附近(今日のヴエネチユラ國)に在る者と定められ多數の冒險者は最も熱心に此天國を發見せむことを努めしか探撿事業の進歩すると共に全く空中樓閣に過さりしを發見せり英のサア、ウオルター、ラレーの如きもエルドラド發見の目的を以て三回迄も大困難の旅行を爲し〻といふ

Fabian policy, Fabian tactic　優勢なる敵に對しては暫く其鋭鋒を避け裏面より敵を窘むる法をいふ紀元前二百十七年ハンニバル以太利に討ち入り其向ふ所披靡せさるは無し羅馬政府は數次の敗衂に懲り新に名將を得て國の大難を救はむことを欲し相議してフハビウスの老成兵法に熟せるを以て推して總督官(ヂクテートル)と爲すフハビウス兵を率ひて出でしか持重戰を爲さす常にアペナイン山上に陣して敵陣を俯瞰しハンニバル右に向へは山を下りて右し左に進めは隨て左し前に進めは退き後に退けは進み常に相從ふて離れす專ら敵の糧道を斷ち土人のハンニバルに內應するを防けりハンニバル大に苦み屢々挑戰するも應せす羅馬の士卒皆以て怯と爲しフハビヤスを嗤笑してCunctatorといへり狐疑者の義なりフハビウス以て意と爲さす曰く愚昧の兵士に嘲笑せらる〻は患ふるに足らす困難を救はゝ乃ち足れりと　後世拿破烈翁の露國遠征に於て彼の如き大敗衂を招きしは主として露廷かフハビアン政策を行ひし爲めに他ならず

To make Fiasco (Fiasco machen)　フイアスコは以太利語にて蘭語にては叱してFiaskとなり此語我邦に入りてフラソコとなれり偖此語は失敗を示す諺となりもとは劇場にて俳優の失錯を喝采する語なりしか其用方擴まりて今日にては一般の失策特に政治的失策を呼ぶ語となれり普通の說に覺れば以太利フローレンス府にDominico Biancolleliといへる滑稽講談師あり何にても看客

の命する物品に就きて滑稽的演舌を爲すに長し頗る名ありしか一日場に登るや看客よりフラソコ瓶に就きて演述を需められしに如何にしけむ例に無く言塞りて千思萬考するも能き考出て來らす看客の催促の爲め愈よ狼狽の怒をフラソコ瓶に移し之を取りて拋ち破碎しけれは看客大笑して止まさりきといふされと是は好事者の虛構にして眞の出所はベニスは古來硝子製造を以て名ある所にて同所の硝子製造者は硝子を吹き分ける際に於て多少の爲損しをなす時は直に之を下等のフラソコ瓶に改造する習慣なりしに因るといへり

To fling down the gauntlet (Jemand den Fehdehandschuh hinwerfen) 鉄手套を投するは卽ち挑戰の意を示すなり　今日にては單に形容的に用ふる語なれと中世時代に於て武士か人に向ひて決鬪を求めむとする時は己の手套を脫して之を對手の足許に投するの慣習なりき（今日洋人の決鬪せむと欲する時は名刺を出して交換を求むるに同し）而して對手か之を拾ひ上るは挑戰に應すへき意を示す者とす當時の武士の手套は革製にして鉄の筋金を入れたる者にて武士の身分の表章の一として重せられたり封建制度滅亡と共に手套を重するの風も亦た消滅せしか聊か其名殘を軍隊の內に留むるありて將校の埋葬式に於ては帶劍制帽と共に手套を其棺上に安置するなり

Look at the both sides of shield 盾の兩面を見よとは片言獄を斷すへからすと同し意にて輕擧盲動すべからすの意なり昔日二人の武士相向ひて進み來りしか路上の一の盾の立てあるを見一人は銀色の盾なりといひ一人は金色なりといひ激しく舌戰の後劍を拔きて鬪はむとし事急なるの際第三の武士來たりて決鬪の理由を訊ね盾を取りて驗すれは其一面は銀色にして他の面は金色なりきとそされは事を處するに當りては愼重なれといふなり

Gordian knot (gordische knoten)　大膽の擧動は能く大困難を排除すべき意なり　ゴルヂオスは小亞細亞フリギア王國の開祖なり王初は貧困の農夫なりしか當時國亂れ民生を聊する能はす乃ち相會して神に禱り有爲の偉人を戴きて彼等の王とし以て秩序を恢復せむとす神託あり曰く汝等相携へてチエウス神の廟に至らむ折先つ牛車に乘りて來る者あらは其人を奉して王と爲せよと衆其神託の如くチエウス神の廟に詣る途に於てゴルヂオスの牛車に乘りて來るに遭ひ直に之を奉して王としけるに國能く治まれりゴオヂオスは一市を興し渠の名に因みてゴルヂウムと名けフリギアの都と定めたりき王は初め彼の乘り居ける牛車を國寶として之をチエウス神の廟に献しけるか如何なる考なりしか山茱萸の樹皮より作れる繩を以て縱橫に車の轅を緊括し大なる纏（ノット）を作れり是に於て預言あり曰く何人にても此纏を解き得る者は亞細亞全部の王たる可しと歷山大王波斯遠征に於てゴルヂウムに滯陣し此預言の事を聽き試みに此纏を解かむとして能はす乃ち劍を拔きて纏を斷ちて曰く吾全亞細亞の王たるべしと是歷史的事實より諺となり次の如き場合に用ひらる卽ち廿世紀の支那問題は世界のゴルヂヤンノットといふべし何人か能く歷山大王たる者ぞの如し

「レヂイ、ヲプ、シヤロット」につきて

田部隆次

テニソンの早き時代の作に『レデイ、ヲブ、シャロット』と云ふのがある、此詩を基として少し話して見たいと思ふ。さて此詩は千八百三十二年卽ちテニソンが未だ二十四歳のとき出版された詩集に現れたものであるが、此詩集には此詩或は『イノーネ』或は『ロートス、イタース』等のやうな不朽の作があつて、何れも此詩人の名聲を確固たらしむるに力あつたものである。此詩は古英國の英雄王と聞えて居るアーサー王の時代にアストーラット侯といへる城主にイレーンと云ふ小女があつて、其家にしばらく止まつたアーサー王隨一の武者ランセロットを見たことが其女の不幸となつて、遂に思ひのためにはかなくなつたと云ふ物語をテニソンが其のち哀れに作つてアーアー王物語中の『イレーン』と題する長篇の詩となしたので、其全篇の主旨を短篇にして、これにやゝ神秘的着色を帶ばしめたのが卽ち此『レデイ、ヲブ、シャロット』である。

そこで、四章十九節よりなつて居る此詩を一々原文につきて說明することはやめて、其梗概だけを爰に書くことにする。

『河のほとり、見渡せば遙かに空とつらなれる田畠の間を通つて、アーサー王の城のあるカメロットの方へ走つて居る一條の道がある。此河によつてなれるシャロットと云へる島のあたり、蓮の咲けるを眺めながら、道行く人は中々多い。

風、垂柳白楊を吹いて此河に仇浪の立つことをも顧みず、大船絹の帆をあげ徐歩の馬ひかるゝをも見ず、麥苅る男が歌うたふをもきかずに偏へに怪しきはたを織れるはかのシャロットの姫である。姫は夜も晝もはでやかなる色の、怪しきはたを織らざるを得なかつたのである、もし手を止めなば禍必ず其身にあらんと姫が耳近くさゝやくものありし故である。其禍の如何なるものかを知らずに姫はたゝはた織りて餘念はたえて無かつた。たゞ姫の前に一つの明鏡があつて此内にカメロットへ通せる大道も、河水も、村童も、或は駒に乘りたる武士も、或は此世樂しき乙女の一群も、云はゝあらゆる浮世の影はうつりて來たのである。されど姫は怪しきはたを織ることを怠らうとは爲なかつた。姫にとりては浮世の面影は鏡にうつりたので充分であつた。しかし淋しき夜半に亡き人の野邊送りする行列の通るとき、天高く月のすめるとき若き愛人の睦しく語り來るときには姫は影のみ見ることにあきはてたりと折節思はないでもなかつた。

あるときカメロットの朝に仕へて居る勇ましきランセロット騎馬にて近づいた、日の光彼が胸當の上や楯の上に映じて燦爛とし、駒の歩むにつれて物の具は鳴つて聲あつた。あゝこれランセロットであつた。此時姫は鏡にうつれる影にてあかなかつたのである、そこで姫は機をすて織物をすて、たしろきなから、窓をのぞき、ランセロットを見てはるかにカメロットを望み見た。突然、はたは亂れ、明鏡は破れた。

禍の身に下りたるを知つたので、卽ち岸に下り船を求め、身を其内に横へて一葦の赴くまゝに任せたが、其船のカメロットに着きしときに人々出てゝ此シャロットの姫の血の氷つて居ることを見出して悲んだ」。

以上は極めて短い、かつ、拙い梗概なるが大躰だけは先づ解つたものと假定して、さて讀者は如何に思はるゝぞ。これ何でもなき話しのやうに見ゆるかも知れぬが、更に進んで言外の意味を

窺ふて見たと思ふ。

此小詩をさきのイレーンの話しに引きあてゝ、シャロットの姫のイレーンであること。此深窓の姫がランセロットを見たことが其身の不幸であつたこと。此姫がランセロット卽ち眞に浮世を見ることなくて、浮世のことはたゞ侍女などの話しのうちに物語などのうちに想ふのみの事卽ち鏡のうちだけと限り置いたらば姫は安らかに世を送ること出來たるならんと云ふこと。姫は其想像と其樓閣と深窓とで滿足しないで此浮世に投じたのが不幸の基であること。等は何人でも少し考へて直ちに解るだらうと思ふ。更に進んでつぎのやうに考へても宜い。卽ち此場合ではシャロットの姫は人間でランセロットは此實世界である、人間が無我無心の境に居る間は幸福であるが一たび此實世界の智識を得ると共に人間の幸福は再び得らるゝものでない、人生文字を知るは不幸の初めである、知らないのが佛の境界である、須らく人は自然の淸き源にかへるべきである。と云ふやふな、確かに此人生の一方面を道破した思想のうちにこれも屬するのである。

さて今述べた思想は何れの神話何れの文學にも見ることを得るのである、二三の例を引いて云へば、例へばアダム、イブの神話は正しく此思想である、アダムとイブが未だ智識の樹に實れる果實を味はないうちは、裸躰も恥づかしくなく猛獸毒蛇皆相親和せる樂園であつたが、一たびさかしき蛇に敎へられて智識の果を味ふことになると共に樂園は去つて仕舞ひ浮世のにがき苦痛を知らなければならぬ事となつて仕舞つた、智識の實はシャロットの姫にとつてランセロットにあたるのである。又ギリシヤの神話ではパンドラとエピメセアスの話しがこれと同じ思想である、天は此二人の小兒に與ふるに凡ての苦しみと歎きを封鎖したる箱を以てした、智識欲に渴して女パンドラ之をのぞき見んとして蓋を開くと共に蜂の巢を破つたときのやうに苦しみと歎きが四方に飛んで天下に廣まるに到つた。又プロメセアスが天より火を盜んで罰せられたと云ふ話しもこれに似て居ると思ふ。かやうに智識を呪ふた話しはいくらもあるべきが我朝では浦島子の傳說之に似て居るのである、浦島が乙姫の言を信じて玉手箱を開かざるうちは彼は老いず死せざるわけなるに、疑ふて智識欲を生じ僅かに箱を開き白氣一道天に上るや、浦島は俄然として死すべく年老いたのである。近世の文字に見えたる一二の例を引いて見やう。シエキスピーヤのシムベリン第三段第三場全体が卽ち此思想である、シムベリンの子イモージエンの同胞ギデリアス、アルヴィラガスの二少年が深林中の太古的生活を悅ばずして功名の浮世に入りたき願を說く處ベラリアス老人之れを戒めて浮世の避くべく厭ふべく朝廷恩賞の生活の賴み難き道理自然の生活の愛すべき道理を說く處は卽ち此思想である、アズ、ユーライキ、イットにあるアーデンの森にて老公の感じたる處もやはり此考であると云へる。水沫集の浮世の波一篇のモーラル又此れに出でないと信ずる、主人ウエリヒ、セバルト法師にきく處なくして、彼が所謂一生の門出に『山を下りて長江大河を見千万人の飮みてもつきぬ其流れにあびん』とを願へるうちは浮世の波は到る處に押しよせて、フリードリヒ、フオン、デル、ハルツの美姫のために命を棄つるやうになつたのである。

かやうな例は一々引かずとも、ルソー或はラスキン、トルストイ等の思想を窺ひたる人或は詩歌小說をよく讀める人は到る處にて此樣な思想に出會ふに相違ない。思ふに此の思想は卽ち現實と

理想との衝突と云ふことに歸着するのである。多感の人は現世に不滿足である、滿足は現世に於て初めは求められぬを常とするのである、之を未來に求め過去に求め自然に求めて、詩歌となりローマンスとなり桃源境となりユトピヤとなるのである、詩人の眼から見れば現在は理想とするに足らないので、もし詩人が現在の事をありのまゝに寫せば大抵諷刺となるのである、さきに述べたる思想も現在に滿足せずして智識の果を味はゞりし以前のアダム、イブの樂園を追想する詩的想像である。

此思想はたゞ詩的空想として想像の娯樂として看過して可なるか、價値として如何のものなるべきや、思想界に入りて如何程の大なる實を結ぶに到りしか等の問題は此に論せぬことにする。ともかくも、人間には理想と云へる否むべからざるものと現實と云へる冷やかなるものとの間に衝突があるので、こゝに煩悶あり涙あり詩歌ありて悠々たる天地人生にたとふべからざる妙趣あることを見るべきだと思ふ。レデイ、ヲブ、シャロットの話しのついでにこんな事を云ふたが、この事のついでにノルウエーのビイエルンソンの小説につぎのやうな一節があるのを思ひ出した。

『昔し昔し、日光を得やうとして東の方へ東の方へと進み行きて、たゞ己れの室に窓を作りて、それを入れることを知らない老いたる女が居た』

併し、此れは此話しに關係が無いかも知れぬ。（完）

連俳雜談抄

梶山紙魚之助

○荒木田守武は伊勢内宮の神官なり、和歌連歌を好て、一時に名あり、或日連歌興行の席に臨みしに、皆法躰の人々なれば、「御座敷を見ればいづれもかみな月」宗祇傍に在て「ひとり時雨のふり烏帽子着て」と附けられしは、殊に興ありてぞ見えける、（俳家奇人談）

○或時秀吉公仰せけるは、歌の上の句を申すべし、紹巴は下の句を次ぎ候へとて、「たく山に紅葉ふみわけなく螢」とありければ、紹巴申しけるは、螢はなく物にてなく候、其上歌は本歌取と申す事の候、にほんのかんばくにてれがなかせるに、なかぬと云ふ事やあるべき、本歌もありと仰せければ、紹巴が曰く螢のなきたる本歌と申すは、神代已來不ㇾ承と申せしかば、幽齋には覺えずや、慥に本歌ありと御赤面にて仰せければ幽齋公、

武藏野のしのをたばねて降る雨に螢ならでは泣く虫もなし

と申す歌の候と仰せられしかば、太閤甚御悅有て、夫紹巴本歌あり、下の句せよとせめ給ふ、紹巴は此上の句にはどうも下の句次け申すこと成り難しと申せし故、いと不興にみえし程に、幽齋公取敢ず、某御下を次ぎ申すべしとて、「しかとも見えぬ光なりけり」と遊ばしければ、太閤もいと興に入り給ひしとぞ、（視聽草）

○寶永年中、京の火災に内裏炎上して、卿相の家過半燒け、中院の宅もやけつる上、文庫に火入て書籍悉く燒けゝり、前内府終に言出されたる事もなかりけり、或時代々重寶なりし古今集の事語り出られし序、燒け失せてをしきことなりと有りしを聞きしばかりなりと、毎に立ちいる

人の語りしとぞ、此日清水谷實業卿、實種卿に向ひて、「風早ときくもうるさき今日のひに」と有りしかば、實種卿とりあへず「清水谷とて燒けもとまらず」優にやさしかりける事にこそ、（窓のすさみ追加）

○小一條院の人々、なぞ〳〵物語す、「勝たず負けずの花のうへの露」といひけるに、「すまひ草あはする人のなければや」（實方朝臣集）

○秦公春といひける隨身、宇治の左大臣殿（賴長）につかうまつりけるが、御沓をまゐらせけるが、御沓のしきに千鳥をかゝれたりけるを見て、

「沓のうちにも飛ぶ千鳥かな」といひいでたりけるを、とりつぐ殿上人も物もいはざりけるに、大殿しばし御沓をはき給はで、「難波なるあしの入江を思ひ出て」と仰せられたりける、いとやさしかりけり、（今物語）

○やんごとなき人のもとに、今參りの侍出來にけり、やき繪をめでたくする由聞えければ、前によびて、檀紙にやき繪をせさせけるに、何をかやき侍るべきといひければ、水に鴛をやけといはれけるに、うちうなづきて「水にはをしをいかゞやくべき」と口ずさみけるを、あるじ聞咎めて、同じくは一首になせといはれければ、かい畏まりて、「波の打つ岩より火をば出すとも」といへりければ人々皆ほめけり、（今物語）

○河内の由座畠山敵致候時、退治の爲、長慶（法名實休）名代として、河内へ相働き合戰、味方まけになり討死候、此時長慶は、飯守にて連歌の席へ、文箱到來候へば、披見候てそばにさし置き、「すゝきにまじる芦の一もと」と申候前句に、「古沼の淺きかたより野となりて」と付候て、實休討死と申し候間、連歌やめ申候由申され候と申傳へ候、（三好別記）

○或時幽齋公と紹巴と御前へ伺候の所に、秀吉公より、「立つもたゝれす居るも居られず」といふ句を御出し有て、此句によき附句ありやと仰せありける時、紹巴、「足のうら尻のとがりに物出來て」かやうに仕候と申上ければ、幽齋如何と仰ある、其時紹巴が句は理屈にて風雅なく候と仰せられしに、然らば幽齋仕候へと御意ありければ、「羽ぬけ鳥弦なき弓に驚きて」と遊ばされたる時。又一句出すべしとて、「丸う四角に長う短う」、「丸盃に豆腐を入れてゆくちんば」、かやうに仕候へと申上げしに、亦々幽齋いかゞと仰ありければ、是も亦前の如く仰上げられける、其時さらば仕り候へと仰ありければ、「筒井筒月つりあげる箱釣瓶」（視聽草）

○廻文の俳句、

ながめしはのぎくのくきのはじめかな　（視聽草）

まるくさかば名こそそこなはかざぐるま　（毛吹草）

ともの名はくさかりかさくはなのもと　（立圃句集）

ながめしは野なはなばなのはじめかな　（同）

をひくだすよどがはかとよすだく氷魚（ヒヲ）　（同）

○近頃奴俳諧とて人のしけるを見しに、冬の事なりしに、

髮水にあたまかッぱる氷かな

といふ句に、又付けゝる、

しやッつらさむき雪の曙　　（一話一言）

○俳句と和歌と

夏草やつは者どもの夢の跡　　芭蕉

ものゝふの年經る屍苔むして　　宇萬伎

秋風さむし桔梗が原

鹿ながら山影門に入る日かな　　蕪村

聲のみや一人月見る窓の前に　　秋成

尾上の鹿の影もたちくる

妹が垣根三味線の花咲きぬ　　蕪村

昔見し妹が垣根は荒れにけり　　公實

つばなまじりの菫のみして

○いぬる永久のころほひ、祇園女御とて、幸ひ人にはしましき、件の女房の住居所は、東山の麓、祇園のほとりにてぞありける、白河院常はかしこへ御幸なる、……此女御姙み給へり、生めらん子女子ならば、朕か子にせん、男子ならば忠盛とりて、弓矢取にしたてよとぞ仰ける、卽ち男をうめり、事にふれては披露せざりけれども、内々はもてなしけり、此事いかにもして奏せばやと思はれけれども、然るべき便宜もなかりけるが、或時白河院熊野へ御幸なる、紀伊國いとがさかといふ所に、輿かきするさせ、暫く御休息ありけり、其時忠盛藪にいくらもありけるぬかごを、袖にもり入れ、御前へ參りかしこまつて、「いもが子は這ふ程にこそなりにけれ」と申されたりければ、院やがて御心えありて、「たゞもりとりて養ひにせよ」とぞつけさせましゝける、さてこそ我子とはもてなされけれ、（平家物語）

○小大進と聞えし歌よみ……八幡の別當光清に相ぐして、樂しくなりにけり、子などできて後、諸共に居たりける所近き所に、芋の蔓の這ひかゝりて、ぬかごなどのなりたりけるを見て、光清「這ふ程にいもがぬかごはなりにけり」といひたりければ、程なく小大進、「今はもりもや取るべかるらん」とつけたりける、おもしろかりけり、（今物語）

○（朝倉）敏景の御内に、堀江七郎景用とて、武勇の士ありけるが、隱れなき連歌の上手なりければ、敏景彼を召して、いざや旗陣の物寂しきに、連歌興行然るべし、味方悠々とするならば、敵定めて機を撓むべし、さあらば、明朝不曉に寄せて、勝負を一戰に決すべし、景用發句を仕れとありしかば、堀江畏り候　乍ゝ去御前に遊ばさるべくや候らん、但し彼の法師の仕たる發句（朝風にもまれて落つるかいで哉）味にめでたく候へば、之をや用ひさせ給ふべきと申しければ、是難句とて、各付煩ひてぞ見えにける、此時敵より物見を立て、味方連歌の躰を見て……今夜逆寄し、敵を一時に討捕らんとて、究竟の兵數百騎すぐり立てゝぞ打出ける、……敏景聞き給ひ、さあらば急ぎ追散らさん、誰彼かくせよなど下知し玉ふ所に、堀江景用……かゝる隙なき折な

がら、右の難句を吟じかけてぞ付けにける、「澤沼のほとりかつ〳〵野となりて」といひすて〻打つて出づ、（朝倉始末記）

前に出せる三好別記の長慶の句と比較して、類似の甚しきを看よ、

人生果して無常なるか

鳴　水

單に稱して人生と言ふ、語頗る簡なるが如くにして、而も是れ實に古來幾多學者の其の解釋に苦しみ、今尙ほ依然として暗黑の中に葬りつゝある難問なり、人苟も此の地に生る、醉生夢死を以て滿足せんとする徒は措て論せず、聊か人らしき頭腦を有する者ならしめば、必ずや其の行路の間に於て、此の問題に逢着すべきは、實に自然の傾向にして又至當の事たるなり、人一たび此の問題に逢へば忽ち懷疑の中に陷り、其の四邊に絕間なく起り來る諸般の現象は悉く疑惑の種となり、疑惑益々疑惑を生じ、懊惱又懊惱、こゝに人生の價値を疑ひ、果ては諸行無常を唱ふるに至る、是れ一般に多くの人々の常に陷らんとする傾向なり、思へ、此の諸行無常の四字古來何ぞ甚しく活氣勃々たるべき青春の血を冷かならしめたる、彼等は言ふ、諸行無常を知るは是れ大に悟る所以なりと、吾人を以て之れを見るに、是れ實に迷へるの甚しきものなり、花の盛りに風吹き、月淸らかなるに雲之を蔽ふ、人は見て以て人世常なしとなす、何ぞ愚なるの甚しき、花咲いて散るは自然の法則なり、月の滿ちて缺くるは天然の狀態なり、時に病的の徒輩之を以て榮枯常なく人間萬事夢に異らざるを說く、識者は聞いて其の愚の到底及ぶべからざるを笑はん。

人生の事決して無常ならず。つら〳〵觀じ來れば吾人は其の間に嚴として動かすべからざる法則あるを認むるなり、花の散るは其の盛りをして益々美ならしめんが爲めなり、月の缺くるは其の滿ちたるをして愈々明かならしめんが爲めなり、世の愚輩之をしも悟らず、滿月を見て其の缺けんことを怖れ、花の盛りに在つて其の頓て散らんことを憂ふ、吾人は寧ろ其の杞憂の甚しきに驚く。

そはさて措き、吾人は既に此の天地の諸現象に於て、一個の法則を認めたりと主張す、法則とは何ぞ、是れ決して一朝一夕に述べ盡し得べきものにあらずと雖も、概言すれば、宇宙間の森羅萬象及び其の間に絕間なく起り來る諸現象は、悉く吾人々類の爲めに造られ、且つ、爲されつゝあること卽是れなり、花の開き、風の吹き、鳥の囀り、蝶の舞ふ、是れ等盡く吾等人類をして樂しからしめんが爲めに存するもの、花の散るは果を結ばんが爲めなり、秋風吹いて蝶の死するは、命數既に盡きたればなり、吾人は些の無常をも其の間に見出す能はず、寧ろ其の法則の美妙なるに驚嘆するのみ。

人或は言はん、見よ、古來幾多花の如き全盛に誇りたりし國民は、今や地上に其の跡を沒して、たゝ青苔滑かなる斷墟零石に其の古を忍ぶのみ、又世上幾多正義の士は絕へず社界の擯斥を蒙り、俗輩常に地を得て、了解に苦しむこと尠からず、是れ果して何の狀ぞや、吾等這個の現象を見て、果して其の間に所謂嚴肅なる法則の存するや否やを疑ふと、言實に一理あるが如しと雖も、是れ

所謂一を知つて二を知らざるもの、宜なり其の言の當を失せること。

論者の如きは人類の行爲と天然の法則とを混したるものと言はざるべからず、人類は固より自然の一部分たりと雖も、彼等は元來自己の意志によりて行動する自由を有す、自由意志を有する彼等は、此の天然の法則に反對するの自由を有す、常識より打算するも、正義の士の榮えて、不義の徒輩の滅ぶべきは當然の理なり、然るに世は此の明かなる眞理を實現することをなさずして多くの場合に於て、反つて反對の現象を呈しつゝあり、然りと雖も、單に此の現象を見て、直ちに天地の法則を無視せんとする者は、實に暴の極と言はざるべからず、何となれば、こは唯不完全なる人類の爲せる誤謬に起因するものにして、斷じて自然そのものゝ法則にあらざればなり、所謂盛者必滅は決して萬古の眞理にあらず、唯其の道をだに得んには、盛者は益々榮えて、終る所を知らざるべきなり、然るに世の所謂盛なる者は、悉く道を得て然る後盛なるにあらずして、彼の浮雲の如き虛榮に誇れるもの、決して其の類少しとなさず、彼等の繁榮既に浮雲の如し、其の夕を待たずして消滅し去るは自然の勢のみ、何ぞ怪しむに足らんや、何ぞ況んや所謂盛者必滅を說いて、先覺を氣取るの必要何處に在らんや。

讀者よ、願くば吾が所論の餘りに暴なるが如きに驚かず、今少しく吾人をして論究せしめよ、吾人の所信より推斷すれば、天地は實に人類活動の大舞臺にして、吾人々類の自由意思の儘に左右し得べきものなり、(固より絕對的に不可能の事あるは言ふを待たず)、卽ち此の社界を天國の如くならしめんも、將又、地獄の如くならしめんも、吾人々類の思ひのまゝなり、人類をして天使の群たらしめんも、將又、惡魔の群たらしめんも、さては此の世を、喜びの野となさんも、涙の谷となさんも、そは全く吾等の意志のまゝなり、吾が此の斷言を否定する人あらば、そは實に驚くべく且つ悲しむべきとなり、否、悲しむべく且つ驚くべくも、現時世の多くの人類は這般の思想を斥けて、反つて不健全なる迷想に耽りつゝあるなり、彼の所謂諸行無常を說き、盛者必滅を論ずるもの卽是れ也。

論じて是に至る、吾人は飽くまでも彼の人世の無常を說く者に反對せざるべからず、人類が此の如き不健全なる謬想に沈める間は社界の改善は得て望むべきものにあらず、況んや靑春の血肉に燃えて、前途の望洋々たる吾人靑年の輩の、時に此の種の思想に支配せらるゝものあるに至つては、啻に其の個人の不利益たるのみならず、實に社界の大不利益と言はざるべからず。

之を要するに、人世は之を何れの方面より觀るも、斷じて所謂常なきものにあらず、若し人世無常を說くものあらば、そはたゞ其の人の無智に起因するのみ、天地の眞理に於て又何かあらん。

或は慨世說といひ、快樂說といふ、そは彼の博識なる哲學者先生の說くに任せん、吾人はたゞ天を信じ、職分を尽し、悠々命に安んじたる、人世の目的に進まんのみ。

匆皇稿を起して、文辭蕪雜殆んど一讀に値せず、讀者願くは言辭の末を咎めずして、吾が意を諒せよ。

Die zwei Blinden

H. Arima.

(von „Hizakurige")

Yajirobei und Kitahachi errlichten das Ufer des Flusses Shioi. Da die Brücke wegen des starken Regens des vorgegangenen Tages weggeschwemmt war, hatten alle Reisende ihre Hose abzunehmen und den Fluss zu durchwaten. Gerade als Beide im Begriffe waren, das zu thun, was die anderen thaten, kamen zwei Blinden an, und nachdem sie gehört hatten, das des Fluss durchwatet werden müsse, fragte der eine, namens Inuichi, ob das Wasser an die Knie reiche. „Ya, ya," erwiederte Kitahachi „aber da der Strom zu schnell läuft, wäre es für Sie besser, mit Vorsicht durch zu waten."

Inuichi: Ya, man kann hören, wie schnell der Fluss eilt. (Er hebt einige Kiesel auf und wirft sie einzeln in verschiedene Teile des Flusses) Diesr Teil scheint am seichtesten zu sein. Nun also, Saruichi, es würde uns grosse Mühe machen, wenn wir Beide die Hosen abnehmen wollten, also, da du der Yüngere bist, trage mich hinüber.

Saruichi: Ha, ha, ha! Du bist ein Affe! Wir müssen es durch Ken bestimmen; und wer geschlagen ist, soll den andern tragen.

Inuichi: Das ist ein Spass! Komme also her! Sie streckten ihre linken Hände aus, um des andern rechte zu fühlen.

Inuichi: Da, ich habe gewonnen!

Saruichi: Wie ärgerlich! Nun, dann, nimm dieses Packet mit, befestige es an deinem Halse. Jetzt, fertig? Vorwärts!

Aber als Saruichi den Rücken dem andern darbot, setzte sich Yajirobei auf denselben, indem er dachte: Der Himmel will mir helfen; und Saruichi, der Yajirobei für seinem Genossen hielt, wutete mit ihm durch den Fluss und erreichte ohne Mühe das andere Ufer.

Indessen wartete Inuichi ungeduldig. „Hier Saruichi," schrie er endlich ihm zu, „Was machst du da? Beeile dich und trage mich sogleich hinüber!" Darüber ärgerte sich Saruichi und erwiederte vom andern Ufer: Ach, du spielst mir wieder einen Streich, nicht wahr? Ich habe dich eben jetzt herüber gebracht; und du bist wieder auf jenes Ufer zurückgekehrt. Du machst einen Spass mit mir.

Inuichi: Was für Unsinn! Du watetest allein, du Schurke!

Saruichi: Wie, Schurke? Das bist bu!

Inuichi: Wie wagst du mich, den Älteren, zu beschimpfen? Trage mich über in diesem Augenblick, sageich!

Da Inuichi mit geöffeneten, grossen weissen Augen so ärgerlich wurde, watete Saruichi unwillig durch das Wasser zurück.

Saruichi: komm denn!

Nun setzte sich Kitahachi Achnell auf den Rücken des Blinden, und Saruichi ging wieder ins Wasser.

Er watete den halben Weg durch, als er Inuichi hörte, der ihm zornig zurief „Saruichi, wo bist du ?"

„Wie, denn, wer ist das ?"

rief Saruichi aus, darüber erstannt, und augenblicklich liess er seine Bürde ins Wasser fallen.

„He Hilfe, Hilfe, Hilfe!" schrie Kitahachi aus, als er zappelnd in den Fluss fiel.

Und da er von dem Wasser hinweggerissen wurde, stürtate sich sein Genosse ins Wasser und zog ihn heraus. Kitahachi war bis auf die Haut nass.

Kitahachi: Wirft mich das blinde Kerl ab!

Yajirobei: Ha, ha, ha! Von allen Dingen, ziehe dich aus; ich will deine Kleider auswinden.

Kitahachi: Es ist doch alles deine Schuld,

Yaji. Als du dich auf seinen Rücken setztest, so zeigtest du mir ein Beispiel; und dadurch bin ich.....

Yajirobei: ..... ins Wasser gefallen· Ha, ha! Es betrübt mich. Ich habe eben einen Vers über dein Unglück zusammengesetzt:

Da hast du den Unglücksmenschen verachtet'
Der durchaus nichts sehen kann;

Nun hat dich die Schlud ins Wasser gebracht,
Die Wellen sind d'rin sehr wild.

Kitahachi: Höre auf! Ich höre es nicht gern. Ich bin so kalt.

Er zog sich seine Kleider aus und wand sie zitternd aus. Inzwischen wateten die Blinden durch den Fluss und gingen an ihnen vorbei.

Yajirobei: Mir können sie hier nicht trocknen. Bringe deinen anderen Anzug heraus. Wir wollen irgend wo ein Feuer bekommen und sie da trocknen.

Kitahachi: Verdammt! Ich habe mich erkältet. (Er niesst.)

Indem er so schwatzte, nahm er seinen eingepackten Anzug heraus und zog sich an; und nachdem er die nassen Kleider ausgewunden hatte, trug er sie in der Hand. Bald kamen sie in Kakegawa an.

Dort riefen viele Kellnerinnen mit lauter Stimme, den Reisenden zu einzutreten.

Sie priesen, die gute Bewirtung und die prächtigen Betten ihrer Gasthäuser.

Dort gingen viele lustige Gepäckträger fröhliche sieder Lingend durch die Strasse.

Hier und da wieherten die Pferde.

Yajirobei: Siehe, Kitahachi! Yene. Blinden trinken dort.

Kitahachi: Ya, mir fällt etwas ein!

Ich will Rache nehmen für meine Masserdouche

Und sie gingen in das Theehaus, wo die Blinden tranken.

Kitahachi : (mit verstellter Stimme) He, erlaube uns !

Aufwärterin : Seien Sie willkommen, meine Herren.

Sie brachte ihnen zwei Tassen Thee, und Kitahachi sass nahe bei den Blinden.

Aufwärterin : Wollen Sie Mittagessen nehmen meine Herren ?

Yajirobei : Nein, wir sind noch satt.

Und die zwei Blinden sassen trinkend, ohne dass sie wussten, dass sie mit den zweien zusammensassen

Inuichi : Ha, wir haben nicht genug Wein gehabt. Lasse uns zwei Go mehr bestellen.

Saruichi : Ya, ya; Heda, Herr Wirt, mehr Wein, bitte.

Aufwärterin : Sogleich, Herr.

Inuichi : Nebenbei, wundere ich mich, was aus dem Thoren, welchen du ins Wasser geworfen hast, geworden sein mag.

Saruichi : Ich möchte es mich gern wissen. Ha, ha, ha ! Aber, lasse uns erst diese frische Flasche pro-bieren.

Darauf füllt er seine Tasse und nachdem er einen Schluck davon genommen, stellte er sie nieder. Da streckt Kitahachi seine Hand ganz heimlich von der Seite aus, um die Tasse des Blinden zu nehmen ;

leert sie aus, und setzt sie dann schnell auf denselben Platz.

Saruichi : Die schamlosen kerle ! Er setzte sie auf meinen Rücken; aber als ich mich an ihm rächte und ihm eine Gabe des Wassers gab, wie schrie er aus vollem Halse ! Weil er das Gute anderer Leute zu bekommen versuchte, muss er gewiss ein Taschendieb sein.

Inuichi : Ya, wie du sagst, sind sie keine güten Leute Wenn solche Kerle auch hierher kämen, würden sie entfliehen, ohne für das Essen zu bezahlen. Aber was hast du mit deiner Tasse gemacht ?

Saruichi : oh, ich habe das ganz und gar vergessen.

Als er aber seine Tasse anfhob, war er überrascht, sie leer zu finden. (fortgesetzt.)

草場舟山

西土牡丹徒自誇　不知東海有名龍
徐生當日求仙處　看做祥雲是此花

文苑

散文

秋夕の露雫

妬翠

去歳の霜月ある日のことなりき、今も想へば淡き夢の迹よ。

紅葉なす一庭の霜樹の風なきに搖れ、一ひら二ひら翩々空を舞うて靜に散り行く枯葉をながめ、友とふたり欄に凭る無言の境、高く澄める碧空は少しく腫昏れて、金城の森陰にひそめる旗雲は美しく夕榮しぬ。

あゝ、天地示寂の景よ、思あるものは沈め悲あるものは泣け、接して一雫哀涙の催さでやは。

友は靜かに語り出だしぬ。

われは未だ嘗て秋景の寂びに浴びて泣かざる時はあらぬなり、人の悲哀は死こそ極みなれ、自然の憺澹は私こそ優れ、陽春の和風に綻ぶ万花も、一夜の嵐に空しく落花の荒景と變じては、誰か弔涙一掬を濺がぬものぞ、されど此種の哀嘆はまた來るべき夏山緑陰濃やかなるところに打戰ぐ涼風の清快に和ぐに非ずや。

獨り秋風闌けし荒涼の自然は、人の臨終の際に似て呼びかへし難き窮終無限の怨恨をふくむものの如し。

あゝ、人は死自然は秋、見給へ、落葉たくなる野烟の末か、霜枯の森の梢に薄くかすめる彼の景よ、遠寺の鐘の音幽かなる黄昏に凩むせぶ茶毘一片の煙にもにたらずや。

あはれ、わか情は紊れぬ、神秘深き墓畔の夕ぐれ、靈華手向くる人の情にもまされるわが今の哀れさ、それよ、灑ぐ涙の湛ゆるはそもいづく。

たゞ天地空濶荒寞々、靜かなるかな自然の墳墓！

かく語り終れる友は漫ろに紅顔の御文章を誦す、琅々として深く心に徹し不覺涙くだる。

夜の黒幕は遙か遠森の陬より徐々と閉ぢ籠め來りぬ。いつ吹くともなき夕風は袖に泌み渡りて、庭隅の竹藪何か叫めき初めつ。天を仰げば星二つ三つ燦として鋭き金線を放ち、歸烏啞々夕空を翔り去りぬ。

われは一語叫びき。

さあれ、冷たき哉自然の死よ。

顧れば友は暗然として瞑目す、君何をか默想する、問へど答なし。下界はいよ〳〵暗闇となりぬ、倏急、友か身は戰慄きつ、われは駭きて袖を引けば、星天を仰ぎて彼は謂ふ。

あゝ、人生は誠に悽慘なる歴史なるかも、榮華の波に漂ひて歡喜の夢こまやかなるあり、生きて焦熱の地獄に苦しみ、斷腸の境に蹌踉するあり、されど彼等が臨終の枕頭、一枝の幽花惆悵なる上、一抹の香煙たゆたふ中には、同じく魂啾々の涙に迷ふに非ずや。

省みて我を思へば、年齒二十餘にして家傳數百年の緋袈裟を脱ぎ捨て、沙門聖界の身を以て、あ

はれ、俗界の學界に投じぬるわが心は、黄金の光に榮耀一閃の夢を見つると、人や譏らん、君や笑はん、されどわれは獨り嘻々の思よ、いざさらばわか宿志君に語らん。

君も知る、われは此世に呱々の產聲放ち初むるや既に一切衆生の救濟に渾身の血を捧くべき運命なりしに、心意一点去り難きの氣は青雲の志とともに油然として胸中にはびこりぬ。

さはれ、光芒寒きメッセルに一壜薫するアルツナイを共に雙手にかゝげて、人生の神秘を探らんの願、からくも黑衣を舊廬に殘し去つて花芳ふ杏林の下に逍遙せんと決しぬるよ。

見給へ、人は肉のみに生くるものにあらず、病は肉のみに憑るものにあらず、ステトスコープはよくこの病魔の消息を知るに足らん、ひとり心靈の病に至りては何に由て癒さんとするか。

徒らに誇揚の辭と咎め給ふな、燕雀何んぞ鴻鵬の志を知らんや。

されど、われはまた苾蒭多年の修養も積みぬ、人生の悲哀は更なり、哀極悲極の死劇に遇ふともまた心魂の迷ふなきを覺悟せり、されど〳〵今日今宵、わが情緒は紛亂錯綜。

あゝ果敢なきかな、陽炎の消ねて迹なき人生よ。

語り終りて友は確乎とわか腕を握りぬ。

折りしも飛雁三影南天に鳴て過ぎぬ。

あゝ厭はしの雁の鳴音

かく呟やきつゝ友は立ちあかりき。

✕　✕　✕　✕　✕　✕

翌日友が姿は教室に見えざりき。

長閑かにして氣澄み、麗かなる小春日和、夜陰に泣ける秋の草木も煦々たる光に躍ると見ゆ。

われは校窓に靠れて遙かに遠山の景を賞し居たりき、急姑肩を打つものあり、顧れば一友傍に立つ、彼れか言を傳ふと云ふ！彼は昨夕妹が訃に接しぬ！

一語聞きたる刹那のわが心情はいかなりけん、されど瞬時心の騷擾雲と散りて後はたゝ哀感極まりて同情の涙に咽ひぬ。其日の午后われは友が寓居の寺門を訪ひぬ。

落葉狼籍の寺庭の寂びは、烟か靄か薄く靡びける野景に舒びて、長閑けさ日の光は影もさゝず、たゞ森としてまさる秋の哀れ。

あゝ、靜寂の御寺の秋よ、生滅々己の鐘の音も、朝な夕なの讀經も、人魂清むる境なれや、凋む秋草に菊花二本折添へ奉れる閼伽もゆかし。

われは一歩入りて彳みぬ、瞬時胸底聲ありき、友は如何に、嗚呼嗚呼友は如何に、此の寂境にありて人生の悲劇を身にしむ友が昨夜の情やいかなりし。熱き涙の一雫覺えずわが頰に傳りぬ。

✕　✕　✕　✕　✕　✕

朦乎として香煙立ち籠むるうち佳香薫する友か室！

哀れ手向の花一枝、愁傷無限の涙の痕よ、机上無量壽佛の姿尊く、幽然上る香爐の烟絶えず、繰るや珠數の緒長く引かれて友は其坐に倒れ伏しぬ。

友よと呼べと答なし、扶け起さんと傍に寄れば漸く頭を擡げたりき、瞻仰げたる友か眼には渾身

の感謝充ちぬ、軈て起上りて端坐しぬ兩腕堅く胸に交へて瞑想すること多時、一坐閲として陰々たる幽魂咽ぶかと覺えぬ。

良時あつて友は語り出しぬ。

あゝ深く君が好意を謝す、われは誠に幸なき兒なり。

語終へずして既に潸然涙珠粒々、手探りに採り出したる一封を示して曰へり、

昨夜更闌けて此の狀着きぬ。

啓き展べて讀下せば、文は簡潔單に妹が死を報せしのみ、されど句々血涙の痕斑々として數十の文字、よく子を想ふ親の情さては慘澹たる愁恨、隱然として紙面に顯はれ來るを見き。

暫し經て衣をつくろひ暗然として友は語り出でぬ。

今こそ君に語り明さん、いざ暫し寛ぎ給へ。

君も覺へあらん、骨肉の愛は一種特別のものなりされど兄妹の情はまた一層異樣のものにこそ、兄と親み妹と愛惜しむ、誠にいはゝ、天女の愛か。

わか妹はわれに少なきこと四歳なりき、彼女はわか唯一の慰籍者なりき、年々の歸省の常に嬉しかりしは一はこの懷かしき愛する妹に遇ふ故にてありしよ。

こぞの春、彼女は漸く鄕黌を卒へて何れ東都の櫻雲にさすらはんと願ひき、されど不幸にして一朝二豎に犯かされまた起つこと能はざりき、近鄕のあらゆる國手の匙もついに無緣となりし哀れさよ、病は端なく慢性となつて。かくて一とせは快々として味氣なき世を果敢なみて暮しき、此春紅花芳草ときめく折りしも病は次第に癒去る氣勢、何れ浮世樂む幸の日も指折る數にと待ち居たりき、親の喜びは更なりわれは如何に嬉しかりしよ、されどその樂その喜ひは長く續かざりしなり。

想へば過ぎし皐月の末つかた、風は荒み雷は殷々遠く鳴り近く轟き滂沱と降りくる雨の音、いと物凄き夕なりき、故鄕のたより一封は妹が危篤を報し來りぬ、われは此の一片を讀み了ふるに堪へずして昏倒したりき、漸く同宿の友に扶けられて氣を落据へしもせきくる涙は瀧と落ち轉輾反側終夜泣き明かしぬ、翌日直ちに歸鄕の意を決したりしもまた友に諭されて止みぬ、後三日を經て彼女か病怠りしとの報に接して初めて蘇生の思せりき。

あゝ、されど此の危篤の悲報や正に晴天の霹靂なりしよ。

友が語は途絶へて獻欷嗚咽、いとゞ哀を催しぬ、かくてまた語を次ぎぬ。

われは學年の試驗了はるや怱忙金城の夏を辭して故山の雲に投じぬ、妹は近かき病院にありき、髮の黑きは昔に代らねど、眼眸の涼しきは猶ほ幼稚の俤ありしも、あゝされど、顏色は憔悴し体軀は柳楊と細そりて白き腕はつらゝのごと……

當初相見てひたすら哀涙の袖を絞りぬ、されど病は快方に趣きつゝありしなり。

われは彼女と雪のやうなる寢臺のもとに泣き明かしたるも幾夜ぞ。

夏月涼しき夕、庭の樹影に相携へて既往を語り將來を慰め合ひし時、青葉の闇暗を縫うて泉水の流瀟々たるなかに、彼女が愛らしき唇もれし一曲「荒城の月」、涼夜の肅氣に嫋々の餘音を波うた

せたる妙音！あゝ、われは忘るゝ能はざりしよ其日其宵……あゝその病院の夕、
今にして想へば　其夕妹か歌へる幽沈の音は夏林血に啼く杜鵑の一聲、あゝ不歸の叫びなりしよ。
友が語は次第に細うなり尾は長く引かれて口内に嚙み呑まれつ。
折から落し來る野分一陣、窓戸をかすめて過き行くよと思へば庭松颯々、妙なる調いと哀れなりき、われも潸々と泣きぬ、やゝありて瞻仰ぐれば瞑目沈想せる友が頰に熱き涙の珠雫！
語は再び續きぬ、
昨夕よもすからわれは泣き明かしき、夢と現の境に逍遙ふ魂は幾度となく白衣憔悴の彼女に抱きつかんとしぬ、憂恨啾々夜半危坐せしも幾度。われは如何にしても信を措く能はざりき、現に覺めては幾度となく封紙を繰り返して讀み改めたり、されど皆無益なりき。
今朝黎明、野分寒き郊野に茫然と彳立するわれを知りぬ、されど其の何の故にして何時赴きたるか、たゞ夢のごとかりしよ。曙の光を受けて歸る途すがら一友に遇うて君に言傳てたりしなり。
芳蘭露繁げき一枝を携へてわが室に歸來るまでは全く無識の境なりき。
あゝ妹は既に遠逝しぬ、愁傷の遊子自今歸鄉の慰樂何處にかある。
故山の雲、旦暮の榮は變らねど、寂一点の憂色はあゝあゝ、とこしへに消ねじな。
かくて友は哭き倒れぬ
哀感極まりて胸ふさがり、また慰むる言葉も出でざりき。

× × × × ×

明くる日も明くる日も友が姿は見えざりき、三日目の朝になりて、曉を拂うて友は突如われを誘ひぬ、とみる顏色一点の憂悶の色なし、熙々としてわれと語る、
疑念の雲簇然としてわが心にれてりぬ、されど最後に友は告げき。
君よ心安かれ、四顧茫々の荒野をすぎて、向上の一路を踏み、忽然としてわれは今大慈大悲の佛陀の聖懷に入りぬ、われはこの世此時此宇宙にして、一縷の光明燦として閃くを望みき、望み望みて妹と語りぬ、妹はとこしへに死せず。
言ひ終れば滿面血躍りて舒暢たり、なほ一語を次ぎき、
君！　たゞ察し給へ、經にし三日のわが悶へを。
窓を排せば曉天一碧、曙光竹籔の間を漏れて眩ゆく射し入りぬ。（終り）

春季行軍　秋風

明治三十五年四月十四日朝暾輝く金澤停車場の野邊に若草布きて憩へる武裝勇ましき一大隊あり、櫻は早も地に委したれど、日當よき南椽に肱を枕に長き春日を轉寢して消すもの多き今日此頃、吾校半千の健兒は等しく脾肉の嘆に惱みき、折しも粟津一泊行軍の壯擧あり。
やかて瀘車は一行を乘せ黑煙すさまじく鐵笛一聲を後に殘して出づ、野には菖蒲公英蓮華草の錦に被はれ、畑は菜の花の黃、麥の綠に鎖されて胡蝶の舞へるも見え、雲雀の歌ふも聞ゆ、實に心

ゆく眺かな、小松にて瀛車を下る、我等六人給養掛なれば大隊と分れて俥を驅る。

いつしか俥は三湖臺を走れり、土赤き丘に亭々たる老松翠いと深く、そよ吹く風を孕みて彈琴の音を添ふ、雲は全く消えて空清く晴れたり、松の葉越に藍なせる湖ほの見ゆるに千古の皓雪を戴ける白山そが影を浸しつ、網うてる小舟も數へられていひしらぬ清けさを我が心に與ふ。

雪白き白山影のうつるなり菜の花につゝく湖の上に

去にし年戰に死せしますらをか石碑立てり湖見ゆる丘

老松の枝うちかはす間より湖ほの見えて白帆ただよふ

野人が歌に驚きてふと頭を上ぐれば俥は今しも桃咲ける賤が家を過ぐ、過ぐる年二三の伴侶と那谷に遊べる時、此家に雨を避けて芋をたかせ老婆がをかしき話にしばし雨のなやみを忘れたる事今更に興淺からず。

去年の秋雨やとりせし賤か家のひさし傾き桃の花ちる

庭前に菜の花かほる賤が家の干せる草紙に春の風ふく

とある坂を下りし所眼界とみに開けて鏡の如き湖あらはれぬ、水の極まるところ菜の花さき續きたるに、乙女がかぶれるま白き手拭も見ゆ、

朝霧のうするゝまゝにさやかなる白山かげを日は出にけり

底清き流れに沿ひし枝垂柳の吹くとしもなき春風を千筋の糸に知らせたる下陰に二人三人の里子の蟹追ひまはし木屑浮べなとして遊ひ戯れたる、世の浪風も知らて笑ひさざめける樣のけに樂しげなる哉、ふと我もかく幼かりし折もありけるよとほゝ笑まれぬ、童等が貧しき衣も中々に此所の景色にふさはしく見ゆ、汝れ等か父は彼方の湖に漁るか、はたあそこの畑に種播くか、汝れ等か母は礫(こいし)美しく水清き小川に布を晒すか、さらずは桃の花ちる窓に歌ひつゝ機織るか、美しきは此湖の邊ぞ、樂しきは此里の生活ぞ、夢、都の塵をな戀ひそ。

篠原ま白き鳥のふとたちて人もあらぬに小舟ゆらめく

青柳の風に亂るゝ岸の邊に背の子ともに子守眠れり

俥の木の下路を下れる時さゝやかなる家の木影を洩れて二つ三つ見えたるはあれこそ粟津の温泉(いでゆ)なりとか。

立つづく菜の花がくれ村見えて水車の音賤の女が歌

午少し過くる頃、六つの俥は嘉宮といふに引こまれぬ、宿舍など色々定め終へつ、あやしき下駄はきて一行を迎ひにとて村の端に至る。

美はしきは田園の夕景色ゝな、暮色を脊にして四方の山々紫を帶び、茂れる森かげは薄墨の色やう〳〵深くなり行くに、足下の小川靜にさゝらぎて菫の花流水に点頭く、水にさやかなる音あるは若香魚の飛べるにや。

橋の欄干に腰うちかけて待つ間程なく、彼方の森を出でゝ坂を下り來る長蛇の一隊、夕日に輝く劒の光、嵐になびく白旗の影、實に雄々しさの眺ならずや。

此夜粟津の温き泉に、幾百の武夫畫の勞れを流しつ、村は其日の功名話に賑ひぬ、夜やう〳〵更

けぬれど月光の窓にさすなし明日は雨にはあらずや、夜の半にして夢は破れぬ涛いと薄く寒さ身にしみたれば起き出てゞ暖かき湯に浴びつ、歩哨が劒の音の遠ざかりし後は逆旅の悲み我が心に滿ちぬ。

あくる日の朝まだき濃き霧白山の頂をこめ連山の夢まださめざるに、一大隊の武夫は勇ましく數多の人に目送せられて出で立つ、正午には早くも小松を經て町端梅林宮に憩へり。

やがて開戰の報は四軍に傳はりぬ、警戒行軍によりて木曾街道を進む、半にして午食を終へ尚も進軍すれば路はいつしゝの砂に入りて幾度か斥候は尖兵より出でぬ、戰場は白砂青松の地、兵士は各身内の勇氣に打振ふを覺えつ、校旗翩翻として濱風にひるかへるも勇ましや、前衛敵兵發見の信號を殘して直ちに松翠の中に沒し去るや銃聲遙かの森に震ひぬ、戰やう〳〵烈しく傳令益繁し湊村にては敵兵手取川を後に我軍を迎へぬ、南軍散兵して此に當り小丘の上銃聲漸く高く松林の間白煙愈深し。

砂丘の上なる本隊旗風勇ましく散兵線に加はりて軍勢愈振ふ、忽ち一隊また翠綠の中より顯はれ愈進みて遂に進軍叭喇に全軍振ひたち突喊喚聲、劒光閃々南軍一時に砂塵を蹴りて敵陣に躍り入りぬ、休戰の令茲に傳はり老松の陰に叉銃して憩ふ、快談壯語盡きむともせず興いと深し。

傳令の踏み迷ひたる小松原松葉かく子よ路はあらずや
汗に濡れて武夫共はやすらへり風ぞ涼しき手取川岸

小舞子の濱とは實に詐ならず、砂いと清く松の綠いと深き間、紺碧なせる海原遠く空に連りて眞帆片帆は波の花とも見ゆ。

春日さす砂清き濱に海見えて一里につゞく夢の松原
船歌の遠く聞えて松原のあなたの海を鷗飛ぶなり
綠濃き松原かげを行く船の白帆は海の花にやあるらむ

やかて手取川に架せる長橋を渡る、河龍橋とはあはれをかしき名なるかな、遠く望まばまこと蛟龍の河を躍るとも見ゆべし。

巖に碎けては白雪を散らし石に淀みては碧を湛ふる溪水足下にさはぐ、遠くま白き手取の川原幾うねりして榮の花にかくれ青空清くたゞ彼方の天白雲二つ三つ浮べり、河水の海に注ぐ所波の花散りて檣林をなす間、海鳥遠くかけり行く、何れか心ゆく眺ならざる、我れ茲に臨むごとに我身の極めて自然に近く立てるを覺ゆるの外また何事も思ふ能はず、過ぎし年全身雨に濡れなからもなほ去るに忍びざりし事なとふと思ひ浮べぬ。

美川に憩ふこと一時、やかて滊車に乘りて金澤に向ふ、我等はまたも紅塵の中に沒せんとするなり、白山の麓白雲いと深く昨日の壯遊夢か現か。（完）

谿の隱者

鶴田耿介

左にものするはヴ井ーカーチプツエークフ井ノルドニあるやさ男バーチエルが意中の女ソフ井アに花さきにほふ野邊にて歌ひきかせだるバラッドの意味を骨子となして作りしものなり

オ、谿の隱者どの、よるべなく道を失ひて、此深き山に迷ひ入りたる我に、幽に光るかしこの燈火までの道を敎へ給へ、我足はつかれ氣力はつき果て、一歩を進むれば進むる程、山はかぎりなく廣かり行きてはてしなければ、彼處にて一宿を乞はんと思ふに。

谿の隱者はしづかに制していひけらく、旅人よ、さなきだに蕭條たる此山中を、ひとりとぼ〳〵と歩き給ふをやめよ、かしこに青くかすかに明滅するは、世のつねの燈にはあらで、あやしき惡魔が君を誘はんためと覺ゆ、我詫住居は此ほとりにあり、子なく妻なきさゝやかなるものなれど、今宵はともかくも、我詫住居に宿り玉へかし、旅人よ安心かれ、はかなき浮世の苦勞は誠に益なきものぞ、

天より下る露よりも柔かき此隱者の言葉に、俗界にはなきやさしき人よと、心窃かに思ひつゝ、ねんごろに一宿を乞ひ、覺束なき足引ずりて、旅人はかの人に從ひぬ、貧き茅葺には何の貯もなければ盜難のたそれ露だにな〳〵、戸は明けたるまゝにて、拂はぬ庭に落葉つもれる小き家に、旅人と隱者とは迎へられぬ、餌をあさり尋ねし鳥獸は、最早たのが巢にかへる頃なれば、主人は燈火ともしいほりをとゝのへ、菓物持出しなどしつゝ、面白き昔がたりに、さびしき夜をまぎらはさむとつとめしが、客はいかにしけむ、心進まず打ふさげる樣にて、深き思に沈みがちなるは、永きうき思ひの名殘かとあはれなり。

隱者は徐ろに問ひぬ、一年まだ若き青年よ、卿は何事のためにかくは深き思ひに沈み給ふぞ、すみなれし故鄕をすてゝ諸國をめぐりめぐり、かく奥深き山に迷ひ入りしは、何事かいはれあらむ、一樹の蔭一河の流、皆これ他生の緣と申せば、そをつばらに我に語られよかし、助となるべきよすがも有るべけむに、されど旅人よ、君の悲みは年若きものに常なる戀のそれにはあらざるか、池塘春草の夢まださめやらぬ君よ、紙よりうすき人情、氷より冷き此世の人の中に、まことの愛情ありと思ひ給ふや、かの心浮きたる女子の愛とはそも何ものぞ、岸邊に咲ける花、しばし留まれど、そがうつらふ頃には、仇し色になり行くものぞや、今の世に初戀のさゝやき泉の水より尙清き乙女の、何處の天にかすむべき、もし此世に僞りなき愛ありとせば、そは神のつかはし給ひし鳩の中にか、さらずばねれ翅を立てゝ、しづかに春の花に眠る胡蝶の中にあるべし、我身も昔ははかなき人生の戀に泣きしこともありしよ、三年のこひも一時のゆめ、覺めては落花の雨の風情、春の夜の淡雪にことならじ、それよりつく〴〵女といふ女は見るもうとましく、世をのがれてここに居を定めてよりの長閑けさは、何にたとふべうもあらず、心は自ら、六塵の巷に馳せず、意は四慾の辻に迷はずして、春は深山の詫住居、落花を載する谷川の流をくみ、秋は柴の庵に、曇らぬ眞如の月影を友とする長閑けさよ、あゝ迷へるかな旅人よ、卿の悲みをしづめよ、はかなき戀にあくがるな、世の女は皆僞りものぞ。

かくいひし刹那、青年の顏に紅の色一汐さつと匂ひたり、恰も豐坂登る朝日子の、山の端よりかゞやき初めし如くに――隱者は其ときの青年の新しき美に目をみはりぬ、耻づる顏激する胸、かはる〳〵青年を苦むることしばし、今や青年は決然顏をあげ、わなゝく聲にいひけらく、なさけ深き君よ、な驚き給ひそ、今まで男子なりと僞りゐし我身はまこと女子にて侍べるなり、罪ふかき

妾の身の、神もすむらむ此清き家を汚しまゐらせしことの耻しさよ、浮世の戀のはかなきをさとりしもの君のみかは、あはれ薄命の妾がくり言、しばしが間き〻給へや。

妾が父は菫花さくタイネ川のほとりに住みし、いとゆたかなる貴族にて侍りき、子といふもの妾より外に一人もなかりし故、妾が心は、指にかゞやくゆびわ、身にまとふ綺羅にほこり、數多の人々が妾と共にならむといひよるによりて、愈たかぶりしが、思へば妾が一生の誤りなりしよ、若き公達數多くたはせし中に、エドヴヰンとなむよべる君こそは、すぐれて……やゝいかにのたまふぞ、エドヴヰンとな、さてそれより後の物語は……妾に心をよせ給ひき、されど此君にかぎりて、みだりかはしき言は絶ねて口にし給ひしことなし、思ひぞいづる此君が、タイネ川近き森中にて歌ひ給ひし時は、其息のため風もかむばしく、妙に美はしき聲は森にひゞき渡りて、花に囀づる鳥も耻づるはがりなり、まことや川の邊に咲く白百合も、草葉にやどる白露も、かの君の心ばせの清きには比すべうもあらざりき、露や花や、いつまでか梢にとまり花にやどらむ、無常のたとへにもれず、あるは消えあるは散るならひなり、げにやエドヴヰンの君を花露の麗しきにたとへまゐらせば、妾は散りゆく無常の心にて侍りしなり、今に及びて彼の君をよそにせしことを悔ゆれども最早せむ方なし、指を縷ふれば今より三年以前、ある夜かの君いづかたへか身をかくし給ひき、霞はこめて森は遠し、かの美しき聲は何處にかかくれし かくて夕とくれ晨と明けて月日はうつり行けど、つひにそよとのたとづれだに無し、恐くはたよりなく、そこはかとなく迷ひて、妾のすげなきを怨みつゝ彼の世の人とならせ給ひしならめ、思へばたぞましくもまた淺ましき舉動し侍りしよ、妾はかの君に對してつくさむ術もしらず、只我身もエドヴヰンの君と同じ地にて身をはたし、一日もはやく御あとを慕ひて御心をはらさむと、一人旅のさすがたそろしければ姿を男にやつして、野くれ山くれ其の地を尋ねまはり侍るなり。

卿のまごころ明になりぬ、アンジェリナ孃よと、いふまもあらせず隱者は、俯せる乙女アンジェリナをしかと其胸にかゝへて、愛にみちたるあつきキッスを施しぬ、こはらうがはし君よと目あぐれば、こはそもいかに、己を抱きしは夢の間も忘れざるエドヴヰン其人ならむとは、三年の永き年月山にいねぬ野にやどりて、千辛萬苦をなめつくせしは此君あればこそ、今ゆくりなくもこゝに再會せしことのうれしさよ、耻しさよ、只泣くより外にせむすべぞなき。

秋の暮の如くさびしかりし一室は、今や春の水の如く洋々たる仙境と化しぬ。タイネ河畔水面に傳ひしひゞきは、今や此寂寞たる山中に反響して、幾久し振りにて唱へ出づる、谿の隱者の愛の歌！

師走遊山の記

山廻

松翁か師走東山に遊ひしにならひて已れも徒然のあまり晦杖を卯辰山へと曳きぬ誠に雪こそ降らぬ北國の冬空風いとすさまじく吹きて身の毛もよ立つ程なりき

淺の川の邊にて過ぎし八月小童共が或は泳ぎあるは漁りなどせし事を思ひ出して

ゆく水の流のいろはかはらねどかはるは人の心なりけり

天神坂の左なる丘の上に軒破れ門傾きいと物あはれなる草庵のたち並びつるをみて

冬籠るぬしは西行か文覺か

俗に云ふ帽子山の上にて金石の沖をみやりて過ぎにし八月の半頃港に錨ろしし軍艦富士のことを思ひ起して

皇國のみ栖と仰ぐ軍船今や何處の沖守るらむ

天神の祠の境内なる我藩勤王の士安達氏の碑の前にぬかつきて

手向草しをれて茲に三十年

招魂社に詣てゝ近き年新しく改め建てられし碑を拜み戊辰の事を思ひ出して

越後路のつゆと消ねにし大丈夫の赤きこゝろは今ぞにほへる

大日堂の傍への見晴しいとめでたき芝生に松の並木を暫しの友となし遠く蓮湖を望みて

漁船の歸を急く時雨かな

一度は寶泉坊の五本松と互に其の偉を競ひ金澤名物の一として諸人にめではやされし一本松の今は唯だ其の趾かたのみ殘れるは世の無常を示していとあはれなり

松朽ちぬ風の音昔にて

山の麓なる精舍の入相告くる鐘の音に塒求むる夕鴉三つ四つ二つ悲しげにあなたの毘沙門堂の森へ飛び去りぬ

多門堂へ何相談に夕鴉

など拙なき句をうなりつゝ我も足早に家洛につきぬ

（松翁は雛屋立圃なり）

漢文

保眞堂記

村上函峯

保眞堂者。長君克堂讀書之所也。請記於余。余曰保眞非取諸屈原寧超然高擧以保眞乎。然則是避世者之所希焉。而克堂身列華冑。奉養之美。服玩之好。固足以縱其所欲。殆與超然高擧者相背馳。顧以是名其堂。不亦戾乎。克堂笑而不言。嗚呼余得之矣。夫士君子。立身行已。大之死生安危。行藏出處。小之起居食息。寤寐屈伸。無所往而不保眞。何必超然高擧。而後爲保眞哉。克堂春秋鼎盛。博涉漢洋書。旁修禪理。不爲居移。不爲俗化。宜取此語扁其堂以自戒也。今克堂偃仰此堂。左右圖書。咀其芳腴。嚼其精華。優柔厭飫。欣然會心。與昔賢爲友。是保眞也。目之所觸。耳之所聽。有所適意。發之詞章。嘯歌自樂。欲不必絕也。而自虛矣。情不必祛也。而自無矣。是保眞也。然不止此也。曩祖武健君。從高倉王唱義。驍勇絕倫。雖就縛。神色自若。抗辯不屈。蓋立心一定。能超脫死生之際。是非保眞者乎。方今國家隆盛。或文或武。各從其所長。振刷奮勵。克堂宜琢磨文德。以發中

揮祖業。且華胄以祖先勳績受寵爵。自奉也厚矣。不可不謀之報効。乃保眞者而後得全之。抑保眞有本矣。其心無累於物。而後天下之物。無一足動其心者。所以保眞也。設使心爲物所累。一動一止。顚倒乖亂。皆失其道。果如此。雖有王侯之富。而極天下之美。焉能得保眞乎。克堂已修禪理。不唯保眞於靜時。亦保眞於動時焉。則庶乎其可也。余亦非敢曰能之。而志存焉。不知克堂意果在於此否。試書以問之。明治辛丑臘月。屬稿於白山松軒。

觀青瀧記

櫻陵散人

自古以瀑著者、於支那曰、天臺廬山、於我國曰、華嚴裏見、皆遇文人騷客、其名鳴于天下、蓋無名家之記、則其名不顯、至我菰野山青瀧、則無知之者、余甚悲焉、菰野山距吾鄉二里半許、山間爲邑、山水明媚、游于此者、四時不絕、殊以溫泉顯、有飛瀑、名青瀧最奇、余聞其奇勝、未果一遊、今玆辛丑夏七月、余得暑暇、歸故鄉、偶訪邑某翁、翁爲余說青瀧之勝甚詳、今聞而遊興勃動、乃携兩三友游、時方正午、炎威赫灼、頻惱神氣、西行半里許、到菰野村、北折三瀧川、水淸砂白、沿川西行十町餘、登江野、路漸崎嶇、石稍齪踝、一步一喘、流汗淋漓、遙顧菰野村、已在履底、復渡三瀧川、攀山麓、逕愈險、忽而傍巖壑、忽而橫河水、流汗濡背、搤腕互救而登半里許、忽聞隔溪鏘然有聲、卽青瀧也、於是乎勇氣百倍、神馳魂飛、不覺足進、奇幢雄嶺、隱然隆然、危巖怪石、突兀如夏雲之狀、古松倒垂、葛蘿縈枝、飛瀑直下三百尺、幅二十八尺、若萬疋縞、怒擊巖角、玉迸珠跳、雪舞雹飄、忽急忽緩、訇然轟然、如亂絮如奔霆、山動谷震、雲起風生、變幻無窮、壯觀何極、余等不覺叫絕快、果不負所聞于某翁也、於是乎解匏樽擧杯、吟懷和暢、眞有世外之想矣、古人遊天臺廬山、歌絕妙章、騷客遊華嚴裏見、作流麗詩、皆是愛賞瀑之奇勝者也、故其文詩之骨格、整錯變態、恰瀑故、膾炙人口、可謂盛矣、今青瀑之奇、雖不減天臺廬山華嚴裏見、我無靈妙筆、徒爲山鹿野麋所占領、豈可不惜哉、乃作歌、歌曰、菰野山兮鐘靈氣、絕壁峭立有飛泉、飛泉高兮三百尺、疑是素練半天懸、山風怒兮溪雲捲、萬雷哮吼谷又巔、百鍊劒兮列鋒落、石碎巖裂勢猛然、秀靈氣兮衝天凝、雪舞花飄觀新鮮、人世外兮天地裏、我與飛泉出塵緣、此瀑奇兮此景壯、堪悲埋沒幾百年、欽雅才兮愧我筆、豈無觀瀑一詩篇、旣而暮色遠來、下山歸家、點燈快然援筆、記勝概以示某翁、

新體詩

ホーマー作「イリアド」の一節

（第六卷三六九行―五〇二行）

忘我澤

西歐詩歌の祖「詩人の王」と稱せらるゝホーマーか生存せし年代に就ては學者の說一定せすと雖も大概紀元前九百年內外と見て大差なきか如し、其著「イリアド」「オデッセー」の兩篇は古來天才の手になれる最傑出せる作品の一にして歷代各國の大詩人一として其影響を蒙らさるはなく今殆んと二千八百年の星霜を經て猶少しも讀者の愛賞を失はさるは必すや其中に不朽の眞價なくんはあらず、就中「イリアド」は材を紀元前千二百年頃起りしと想像せらるゝ有名なるトロイ戰爭に取り簡

古流麗而も熱情の迸れる辭句を以て能く複雜なる人情と變化ある光景とを描出し讀者をして恍惚身其境にあるを覺ゆしむる所確に天來の神品たるに耻ぢずといふべし、我が平家物語其性質に於て幾分か彼に類似せる所ありと雖も猶其趣味に於ては彼れ遙に我に勝る、加ふるに後世西歐諸文學之大要素となりし希臘神話の骨髓と希臘古代風俗感情に於ける智識とは此の大作を讀むに當て必す收めらるへき副產物なれは我は特に文學歷史に趣味を持てる學生に向て此詩の誦讀を勸めんと欲す、

「イリアド」の英譯は頗る多しと雖もチャプマン、ポープ、クーパー、ダービー、ブライアント等の韵文譯ランゲの散文譯等最有名なり、就中ターピーブライアントの無韵詩の譯は最平易簡潔にして能く此大「エポス」の精神を傳へたりと稱せらる、獨譯にてはフォツスの六脚律の名譯例のレクラム社の小册子中にあり

「イリアド」に現れたる人物のうち希臘方の大將アキレス、アガメムノンの如きは勇猛慓悍の猪武者にして多く讀者の同情を惹き難し、トロイ方唯一の大將ヘクトルは其地位頗るカーセージのハンニバルに類似し勇氣ありて而も優しき所我等理想の武士氣質を表はせり、今此處に重譯を試みたるヘクトル妻子との譯別の一段は彼の維盛都落の光景に似て其の悲哀之調に於ては全篇二十四卷中の壓卷たるを覺ゆ、唯原文の雄勁なる律語は我が拙劣なる譯文によりて纖弱蠟を嚙むが如き無趣味之七五調と化し冒頭によりて多くを期せる讀者に對し何等の感興をも與へ得ざるは千古の大詩人を辱むるの罪甚た深しといふべし、

兜きらめくヘクトルは
斯く語ひつ足早に
調度整ふ已か家に
歸れば妻は在らざりき。
雪の腕の美しき
アンドロマキは稚兒と
そが婢女を從へて
涙に咽びイリオンの
高き臺に立ちたりき。
ヘクトル妻の見ねされは
敷居越ゆとて斯く問ひぬ
「語れ實を、やよ乙女、
汝等か君はいつこぞや、
余妹等をや音連れし、
同胞達の妻のそばか、
アンドロマキは髮清き
トロイの乙女がミネルバの
御名呼ぶ寺にも居玉はず、
家の媼の答ふらく、
「まこと、我殿、我君は
姉妹君をもたとづれず、
御同胞の內君の
もとにもあらず、髮清き
トロイの乙女がミネルバの
御名呼ぶ寺にも居玉はず、
アンドロマキはイリオンの
高きうてなに往きませり。
グリースの勢强くして
トロイ負色見ねたりと
聞かれて御心狂はしく
乳母に若君抱かせられ
城壁さして急かれぬ」。
媼は斯くぞ。ヘクトルは
廣き大路を急き行く。
やがて都の町はづれ
過ぎて野原につゞくてふ
スキアの門に到りしに、
夫に會はんと比ひなき
アンドロマキぞ急き來ぬ。
そが父の名はエチオンとて
プラコの森の麓なる
テベスの君主とあがめられ
キリキアの地を治めけり。
銅鎧のヘクトルに
王は娘を嫁かせつ、
今しも逢ひしは此れなりき。

あとに乳母が抱けるは
まだ心なき幼人、
こはヘクトルの獨り子よ、
星と見まがふ其姿、
スカマンドリアスとヘクトルは
稚兒を呼びしも皆人は
父がトロイの杖柱
またなき大將なればとて
アスチアナキスと名づけゝり。
彼は子を見て打笑みつ、
アンドロマキはそが夫の
腕に涙そゝぎつゝ。
「喃、我夫は猛ければ
今日や打死し玉はん。
賴みなき兒のそれのみか、
やがては寡婦の身となられん
妾も不便と思すまじ。

グリース兵に皆共に
君をは攻めて失はん。
君に別れて生きんより
土に入らまし、君なくて
何樂にいつまでも
盡きぬ歎きに沈まんや。
せめて父上いと尊き
母君にてもましまさば。
されど妾が父君は
彼のアキレスがキリキアの
テベスの町を荒す時
そが手に討たれ玉ひけり。
彼は父をはうちたるも、
流石に心ためらひて、
武具とらで火にかけつ、
墓を上にぞ築きける。
デョーブの神の山姫は

父の御墓の四方にしも
楡の樹數多植え玉ふ。
兄弟七人ありつれど
皆アキレスの荒し夫に
一日が程に戮られて
エイスの邦に旅立ちぬ、
家畜の群の中にして。
唯プラコーの女王
母上のみは俘囚等と
こゝに送られ玉ひしを、
黄金に換へて助かりし
其甲斐もなく親里に
デアナの箭尖に失せ玉ふ。
されど我夫君ままば
妾は父母同胞と
君一人をぞ賴むなる。
憫れとたぼし城内に

留り玉へ、必よ
幼き者を孤兒と
妾を寡婦とし玉ふな。
此の無花果の木のもとに
隊を整へ城壁の
薄きを知りてせまり來る
敵を防がせ玉ふべし。
早や敵軍の勇將等
アヤキス二人イドメネス
アトリアスの兒、チヾアスの
兒等は三度も押寄せぬ、
奇しき御告げに從ふか、
勇氣を恃む業なるか。
兒きらめくヘクトルは
これに答へて「我が妻よ、
已が胸にも兼てより
あらざらんやは此の思、

されど後ろを敵に見せ
卑怯者よといはれては
などてトロイの男兒等や
女兒に顏の合されん、
壯年よりの先陣に
幾多の手柄顯はしつ、
父と我名を守りたる
そを今更らに忘られず。
*さはれトロイの尊きも
プリアム王の眷族さへ
又プリアムの御身とて
いつか逃れぬ天命の
廻り來ん日は滅びんと
兼て心に我期しぬ。
されどトロイの悲しみも
ヘクバ、プリアム二方や、
塵にまみれて斃れなん

*此一句はカーセージ落城の際シピオが羅馬の將來をトーて高吟せしと稱せらるゝもの

我か同胞の嘆きさへ
御身の末を思ひやる
歎きに比べば數ならず。
自由なりし身に引かへて
グリース人に捕はれつ、
涙ながらに曳かれ行く
御身の果はいかにぞや。
アルゴスあたりの家婦に
追ひ使はれつ機を織り
ヒペリア、メシスの泉より
水汲む業のひまをなみ
張り裂く胸をや忍ぶらん、
其の涙をば餘所に見て
人は言ふらん「見よ此の女
もとヘクトルの妻なりき
イリオンの野の戰に
匹なかりし大將の」

こを聞く毎に夫あらば
奴隷とはよもならじをと
味氣なき身をかこつらん、
あはれ御身が泣聲も
曳かるゝ影も知らぬまに
早く眠らん土の中に」。
斯くいひながらヘクトルは
子を抱かんと腕延べぬ。
されども稚兒は啼き叫び
避けて乳母にぞすがりたる、
光る兜とますらをの
頭に載く馬の毛の
戰ぐに恐れたりにけん。
二人は共に打笑みつ、
兜を脱ぎてヘクトルは
燦めく儘に地に措きつ、
腕に子をとり接吻けつ
ゆり搖かしつ ヂョーブ神
其他の神に祈るやう、
「やよ聽き玉へヂョーブ神
あらゆる御神、願はくは
此兒の末も己が如
トロイに並ふ者もなき
猛き丈夫此國の
守りの王となし玉へ。
數多の敵を屠りつゝ
分捕物を取り收め
歸るを見なん人々に、
『此若者はげに遙か
失せし父にも勝れり』と
言はしめ玉ひそが母の
憂さを慰め玉へかし。
いひつゝやをら妻の手に
乳兒を返せは抱きしめて

涙なからに打笑みぬ。
哀れと見つゝヘクトルは
其の手を把りて「我妻よ
餘りに我をは歎かしそ、
運の來までは此の命
誰れ取り去らん來なばまた
健けき女々しき分ちなく
共に逃るゝ者ならじ。
されは御身は立歸り
家を治めつ機を織り
婢女ばらに樣々の
業をば爲させ玉ふべし、
弓矢の事は己が身と
男兒のなすに任しつゝ」。

斯くて雄々しきヘクトルの
兜をとればそゞ妻は
熱き涙をそゝぎつゝ
悲しき眼に幾度か
見返りながら歸りゆく。
早やヘクトルの棟高き
館に着けば婢女等
主のほとりに集ひ來つ
そが悲しみを分ちけり。
まだヘクトルは死なざれど
グリース人の刃を逃れ
生きてはよもや歸らじと
なべて斯くこそ嘆きけれ。

向上の曲

木曾紫光

上篇　叫喚の聲

其一、金風

日脚西山に低うして野分身にしむ秋もなか
黄ばみて落つる柿の葉の散りての行くへたれか知る
北に流るゝ叢雲のちぎれちぎれの足はやし。

昨日眺めし折ふしは彼處ぞ黄金の色なせし
五彩七彩染めなして雲の上までいや高に
見上げしそらは彼方にて戀せし關も其處なりき。

小春日和の靜けくも野山に暮るゝ人の子の
蜜吸ふ如き夢路をばいづれ浮世のさだめとや
天上秋の聲あげて地には冷き風起す。

若しとこしへの春なくば花はさばかり愛でられじ、
月とことはに滿ちもせば三五の眺めたれかせん、
うべや散り去る櫻花こゝに缺け行く月の影。

紫磨黄金の雲の色そを見し昨は昨なれや
今日夕ぐれの黒雲の裂けて流るゝ眺めては
關山萬里の故郷の空のかなたをしのぶかな。

漁村の煙天に消え賤づ山がつの夜は更けぬ
燈下思ひに沈みたる遊子窓戸を推しし時
肌つんざく金風に燈火消にて世は闇し。

其二、悲　聲、

天にありては星といひ地球にありては花といふ
星と花とに情あらば星と花とに言寄せん
「星と花との語らひの外にも血あり涙あり」。

花晩春に散りしかど實は夏に熟せしよ、
夜毎に輝る星の色そは永遠に消にもせじ、
花實を結び星輝りてひとり人界に幸なきか。

時し壬寅神無月一夜嵐の荒れすさび
神の宮居に主なくて魍魎今を我か世とや
坤輿一球どよめきて「人の浮世」は壞れしよ。

× × × × ×

手づから蒔きて生ひ立てし菫の花を戀ふべくば
朝な夕なに水かひし菊のひともと愛づべくば
いでや蕾の妹もちし兄なる人の望知れ。

この花清く咲きいでし香も高からば何とせん
友招かんか酒むしろ開きもせんか樂しさよ
日毎夜毎にまさり行く花の蕾のよそほひや。

春うら若き心には菫に涙ありなむや
秋天高き日の前に菊それ何をかこつべき
花をふくめるこの蕾光望かぐやくあづま菊。

花てふもの〻心なき我なき情を知りしとき
春秋こゝに十七の妹のすがたを眺めては
星と花との語らひの笑は人にもなからめや。

× × × × ×

今日夕ぐれの雲足に空を憂ひし我が身にも
群賊天に雄たけびて「世の滅亡」を告ぐるべう
夜半を烏の聲高き「訃」に聞かんとは思ひきや。

其三、破壊、

世は億劫に泝ぼり壊劫の夢は現はれぬ
天日缺けて月落ちて星は奈落に沈淪なん
肉に饑ゑたる腥風のすさぶ跡には草もなし。

山は崩れつ湖枯れつ陵は焔の池と化す
蒼海いつか底出で〻鱗介逃げん淵あせぬ
何を天地の神怒り冥府の羅刹威を振ふ。

蜜より甘き青雲の梯いつか燒け落ちて
心あせりし竹帛の金襴すでに錆びはてつ
希望の光永劫に消ゑひとり荒原に息を吐く。

世を動かさん黄白の光は土と變りつゝ
山の七珍地の九寶いづれ汚れし糞塊を
人の子何の宿業に風姿もしどろに憧るゝ。

夢床に笑みし戀人の靨に罪の水湛へ
輝々たる面子肉瘀み臭氣は傳ふ三百里
臭骸何の慰めぞ後朝何の痴情ぞや。

天に正なく光なく地には法なく「暖氣」なし
四維上下の六方は修羅の雄たけび凄じく
人は鬼なり惡鬼なり神も佛もあるべしや。

冥闇の鎖しし蒿旬の地底の窟の罪人よ

業火の焔天を燒き世界を燒かんただ中に
焦れて燃にて灰となり復た生き回へる罪人よ。

氷の山の峰高く血潮の池の底深し
彼處に凍えて天に泣きこゝに沈淪て地に叫ぶ
風葉関の聲あげて人の叫喚を讃嘆す。

誰が面影ぞ黒鐵の赤熱に灼けたる鋸の
一齒一齒に罪と呼び業苦と宜りて頸を挽く
肉は焦れて煙となり鬼神の嚼る血は黒し。

六道四生の巷には四苦八艱の掟あり
輪廻車に火は燃えて冥府の關には鬼住まふ、
嗚呼嗚呼天に光なく地には救の聲もなし。

× × × ×

夢か現か問ふだにも心につらき悶こそ

世は壞れぬと叫びたる人の最後の聲なれや
夢にはあらず現なり現にあらずあゝ事實。

あゝあゝ妹は奪はれぬ世は億劫に還りしよ
羅刹の前にひれ伏して受けん熱湯の呵責こそ
今我が上の報なれあゝ我が妹は奪はれぬ。

其四、　回顧の涙

死出の山路の末遠く三途の川の水深く
蓮の臺の御座淨く八功德水の潔く
共に怖れし我が妹よ共に樂ひし我が妹よ。

春の花野に草摘みつ夏の夕に風入れつ
後の月夜の月祭り冬の夜比の敎へ草
肉を分けたる我が妹よ血を連らねたる我が妹よ。

慈親の膝に凭れては行手の雲の程を聞き

木陰に書を開きては天を仰ぎて羽振ふ
雲雀を說きし我が妹よ共に勇みし我が妹よ。

夏三伏の暑きをも冬氷雪の寒きをも
か弱き身にも顧みで行手の雲を望みつゝ
勵みし花のひと本のあゝ我が妹よ無理なりき、

海老茶袴の色褪せて風雨の跡のしるきまで
リボンの色の濃紫いつか白みし極みまで
通ふ松原とこしへの翠はあれどあゝ妹よ。

顧みすれば皐月闇山河百里の旅枕
夢にも通ふ我が妹の清〻やさしく愛らしき
姿は床に病めるよと文見し時の驚愕よ。

涙をはらひ筆とりて菫の花も添へたれど
慰籍の文字の鈍り來て果ては机上に咽びにき

返しの文のありし時水莖瘠せし跡を見て。

たゞ憧がれし故郷に妹と相見し夏のころ
豐かなりける面影は何處ぞ骨の高まりて
雲雀を說きし我が妹は哀れや白く蒼白く。

思へば回顧の詩にさへ筆を揮はん勇ありや
墨の跡には涙湧き思ふにだにも魂は消ゆ
情は淺き「時の影」妹と別離の來し時を。

やつれはてたる面には涙の跡のいちじるし
足蹌踉の定めなく門に我が身を送り來て
「希望」の前に別れんは悲しからずと泣きし時。

「來む夏こそは肉肥えて明に兄上を迎へなん
都のそらの音樂の學の園に連れ玉へ
天地微妙の琴線に燃ゆる心を奏づべく。

旅の憂き苦のいく數を忍びますらん兄上よ
父と母との名を思ひ家と姓との名を思ひ
身を愛しませ勉めませ來む夏こそは待たるなれ」。

あゝ神だにもいましなばあゝ佛だにいましなば
清くやさしく潔きかくまで愛の滿つる子を
何の罪科の報ぞや「望」のまゝを奪ひ去る。

思へば短き言葉こそ我れに最後の夫れなりき
頰を傳ひし涙をも拂ひもあへずうなづきし
別離の「時」ぞ永劫の我がはらからの別れなる。

世界の富に榮えにさへかへじと思ふ我が妹の
病みたる妹の袖の露男子の涙のなからめや、
一條道の程遠く顧みすれば妹の立つ。

× × × × ×

海山遠くへだゝれる旅の秋なる草枕
燈火闇き夜すがらを涙に浮ぶ我が薄運
あゝ今生の幾歳も逢はん望は絶えはてぬ。

我が故郷の花園のそこには妹の笑ひつゝ
居間の机に凭れては書繙ける愛らしき
姿は見えつ映ひつあゝ堪へがたき思かな。

笑んで迎ん言の葉の主や來む年そも何處
奥津城處色褪せし標となりて夜な〳〵は
靈を吊ふ虫の音に天の手向けの月見草。

神に愛てふものありと說く人來れ言問はむ
佛に慈悲てふものありと訓す聖僧よ言問はむ
何處に愛は注がるゝいつか慈悲は下さるゝ。

世波七旬の戰鬪に疲れはてたる老翁の

死の榮光を望むをもなほ殘生に見棄てつゝ
花の處女の血を吸ひて屍となししあゝ神よ。

罪に汚され科に染み天を欺き地を騙る
不倶戴天の罪人の今玉樓に驕れるを
問はで處女に死を賜ふあゝみほとけの僞よ。

天に正なく光なく地には法なく誠なし
神は偏愛の化身にて佛は虚僞の慈悲を售る
天籟地籟人籟の終に賴まむ信もなき。

あゝ我が妹よなが兄の月の桂は汚されぬ
あゝ我が妹よなが兄の浮世の幸はこぼたれぬ
暫時は待てよもろ共に永劫の闇路に踏み入らん』

春のあした

外　圃

若夢さめし佐保姫の
夜のみとばりかゝぐれは
山の端もるゝ朝日子に
雲むらさきの曙よ。

草の家に立つうす煙
桃さく垣にたなびきて
春の野遠くふく風に
啼く音のどけし揚雲雀。

匂ふ菫の花むしろ
蝶まだねむるうら園に
米とぐ少女朝〳〵の
唄面白きはね釣瓶。

翁汀に菜を洗ふ
里の川波末とほく
菜の花曇ゆるがして
今し野寺の鐘かすむ。

柳の村をあとにして
山のかすみに歌はむと
今朝も童は笛もちて
牛ひき行きぬ草づゝみ。

啼けよ鶯此處にきて
けがれ果てにし人の世は
榮と富にあこがれて
なやむ罪の子多ければ。

自然のみ手に抱かれて
愛をさゝやく水際の
草花ひとりうなだるゝ
そこに神秘の響あり。

つみ菜に長き春の日を
　そよ吹く風のたもむろに
　　緑野ひろき大空の
　　そこに平和の光あり。

平和の光身にしめて
　神秘のしらべ偲びつゝ
　　塵を外なる片ざとの
　　あはれ樂しき春の朝。

幸なき運命憂きわれも
　彩なす春の朝みれば
　　そゞろに神のしたはれて
　　恨むにあまる愛の色。

春の萌草

秋　風

○發　見　（ゲーテ）

「ゲーテ」なほ若かりける時貧家に美しき少女を見出でゝ、いひよれるを、少女はさかしくも辭みぬ、其後「ゲーテ」の正しき手續もて結婚を申入れけるに喜びて妻となりぬ、此詩はそを歌ひたるものとか

我れたゞひとり里遠き、
　さびしき森を分け入りつ、
　辿り行きけりその奥に
　　何の望もあらなくに。

木蔭に我は見出でたり、
　天なる星とかゞやきて
　愛人の眼と美はしく
　　一もと立てる花の木を

我手折らむと近づけば
　花は靜かにいひ出でぬ、
「折りとりますな情なく
　あはれ此身の凋まんに」。

かくて靜かに此花を
　我は根こじに掘りとりて、
清らなりける我宿の
　こけむす庭に運び來つ。

物靜かなる奥庭に
　心つくして植ゑつけぬ、
今は日毎に瑞枝さし
　咲きつゞくなりその花の。

○禮拜堂　（ウーランド）

此詩は「ウーランド」の嘗て二三の伴侶と「ヴルムリッヘル、ベルグカペルレ」に遊び其佳景を賞して一同各一詩を作りし時、彼が此平和なる美景の中にも悲哀を含めりとて詠みたるものなり。

禮拜堂は尾上より
　靜かに谷を見下しぬ、
泉涌くなる牧場に
　牧童は樂しく歌ふなり。

物悲しげに鐘の音の
　薩露さびしく響き來ぬ、
樂しき歌の音をとめて
　童は仰ぎて聞きとれぬ、

谷に樂しく住める身も
　やがては山に葬られむ、
牧童よ牧童よ、汝もまた
　いつかはそこに挽歌はれん。

○舟行（ハイカ）

我れ檣にもたれては
よせくる浪を數ふなり
うまし故郷いざさらば、
潮路遙けし我が船出。

小窓輝く美はしき
戀人の住家を過ぎし時
心をこめて見やりしが
手招く人もあらざりき。

たえず我が眼にうつろへる
戀人の涙の輝きぞ
心の雲をはらふべき
唯一すぢの光なる。

○蛇（自作）

冷たき血潮もたぎれる胸は
亂るゝ動悸に波をこそうて、
叢雲南に飛び行く夕
蛇は血に染み歸り來れる、

夜嵐荒らぶ洞穴に
分け來し草むら小篠の路は
爪の痕より嘴の傷より
漲る血潮に紅にぞ染みぬ。

峰の暴驚と一日一夜さ
牙の強さと羽の力に
天地をゆるがす苦戰を思へば
今なほ蛇の鱗こそたて。

心はたけり意氣はあがりて、
總身の痛を聲にもたてず
無念の眼を閉ぢ冷けき穴に
臨終の蛇は牙をぞならす。

× × × ×
× × × × ×

我れ今地球を七卷八卷
まきしめ〳〵わが身の力に
微塵と碎きて我が吐く息に
際なき宇宙に霰と飛ばさむ。

いざ我が裂けたる口をばはりて
紅蓮の炎と吐き出す舌に
天をも焦がし地をも燒かなむ、
かくてぞあらゆる命も絶たむ。

恨の焰はすはや見る間に
上にも下にも山にも野にも
彌猛に猛り進みに進む
とく行け疾く燒けあな心地よや。

炎の眞只中天地にひゞくは
苦痛にあげし叫喚の音よ、
森羅萬象破滅の聲よ、
かくてぞ初めて我は瞑せむ。

× × × × ×
× × × × ×

穴なる蛇の吼ゆる響も
猛れる姿も折から荒める
嵐と雨との音に消えつゝ
峰より下れる雲に隱れぬ。

ブゼントの墓

山ざくら

一

ブゼント川の夕まぐれ
かなしき歌は聞ゆなり

水のひぶきかまつ風か
夜毎夜毎にものすごく

二

川をのぼりつ下りつゝ
ゴーテン人の幽靈が
アラリヒ王を慕ひつゝ
王の最期をなげきつゝ

三

年なほわかく金色の
髪ふさふさと肩を蔽ふ
王を此地にうづむなり
故國に遠きとつくにゝ

四

鋤鍬手々にたづさへて
彼等は岸にならぶなり
川のながれを堰き止めて
水なき底を堀らんとて

五

馬劍甲冑諸共に
王の死骸をうづめたり
英雄ねむる墓のうへに
草の生ねんを祈りつゝ

六

堰はふたゝび破られぬ
逆まく浪はすさまじく
ふるき底をば流れゆく
秘密の墓を隠しつゝ

七

忽ち起る歌の聲
「眠れ勇者よやすらけく
例ひローマノ毒手にも
汝が墓はあばかれじ」

八

「歌へや歌へもろともに
王を讃ふるこのうたを
廣めよ世々にプゼント
海より海にながしつゝ」

（アッグスト、グラーフ、ホン、プラーテン）

老いし小使

山崎麓

電氣の光うすうして
廊下にものゝ影も無く
小き鼠のひそやかに
蜜柑の皮を曳き去りぬ。
玻璃の窓にたばしれる
霰は白くほの見ゐて
杉の葉傳ふ曉鐘は
暗き間毎を訪ひ行きぬ、
見よ、破れたる洋服の
老いし小使唯一人
武士の戰場に臨むごと
勇みて伏床起き出でぬ。
六十路の坂をたどりこえ
右に左によろぼひて
冷き足に足袋もなく
先づ火を焚くと勉むれど。
暖爐も釜も冷かに
死せるが如く横はり
痩せ衰へし細き手を
喇る如く見ゆるかな。
人猶寢たる朝早う
暗きにひとり働くは

食を求めて巣にひそむ
鼠に劣る汝が身よ。

たとへば聖者、野に隱れ
罌粟紅に咲くほとり
詩集懷に鍬を持ち
樂む樣に似たるかな。

（完）

さはれ、厭はず心地よく
勉むる汝の面見れば
憎惡もあらず恨みなく
己が職務をいそしみて。

和歌

いとし子　其月

いとし子を炬燵に寢せて幾度か物縫ふ母のかへり見るらむ
た歸りと玄關に出でし幼な子の笑顏し見れば物思ひもなし
振りかさす醜の夷の太刀すらも乳兒の笑には鈍るとぞ聞く
稚な子を持たせ給ふか左もなくて物の哀のなど知らるべき
隙間もる風や冷き乳や欲しきあはれ誰が子か夜半に泣くなり
子に連ぶ親の心や七里あゆみ十里あゆみて遂ひ都まで

露の雫　秋風

涙なく別れながらも行く船の暮るゝも知らで岸に彳む
世の憂さは山にも野にも同じきを山に入る人野に潛む人
いつしかに庭の銀杏の散りつきて星の光の近き宵かな
白萩の白玉露に繪の具とき畫を思ふ夜を虫なきしきる
雁の音の雲より落つる夜を寒み待つ人は來ず歌成らざりき
秋の夜を笛の亂のくるほしく管も裂けよと一人もだえぬ
雪路をつれの御僧の物語月をめでつゝ早や一里來ぬ
裏畑に桑摘む妹が鄙歌に我とる鍬のいとも輕けき
溪間より清水汲みての歸るさを梅の下路月朧なり

ゆふ雲　紫浪

朝戸出や馬の嘶き鈴の音鷄なく小村月かげ低し
月清き夜を甲板の上にして大空渡る雁の聲きく
千鳥なく湊入江の泊舟檣寒うかゝる月かげ
霜たきしあしの枯葉に風もなく狹霧晴れゆくあけの湖
水仙の匂は高き八疊間軒の鳥籠鶯のなく
高殿の灯影は水にゆらめきて月なき夜半を川千鳥なく

夜半寒う隙もる風に目ざむれば障子に黒う梅が枝斜

雪解する廐の廂鷄なきて門の馬塞垣梅の花咲く

軒に吊りし干菜大根に音たてゝ霰たばしるたそがれの空

鶯の餌にとて植ゑし菜畑に今朝淡雪のやゝ積りぬる

くれなゐ集

紅城

野原にて

大野原草むらかげに花つめば野飼の雄馬朝風に鳴く

山はかすみ朝風清き大野原小松のもとに萩の花咲く

友に寄す

蟲の音もあはれ芭蕉葉破れたり語らへる友今あらずして

月今宵友大江に歌やよむ別れし岸に我獨り泣く

病の床にて

巖角に咽げる浪を如何にせむ傷負へる鷲うち羽振るとも

折にふれて

十五夜の月をかくせる雲の足ひろごり行きて繁き雨ふる

雨の音風の聲憂き秋の夜にくさむらの蟲壁に來て鳴く

孤兒の花賣今朝も呼びとめむ父の忌日は過ぎにたれども

よる更けて池の渚に佇めば朧の月の水に動かず

俳句

紫影

○

釋奠や昌平坂を三助が

釋奠や螟蛉の子賢にして

袴はいて畑打つ本曾の女哉

ころ〳〵と水にこけこむ寄居虫哉

初虹や狩衣寒き奈良の京

げんげ咲く浦江の里や春の水

出替や三十過ぎて養子聟

門聯の金字いかめし沉丁花

陽炎やこゝにも一つ犬の糞

く　ま

○

梅咲くや屋根石黒き加賀の町

冬籠時計の針の遲々として

新道や赤土匂ふ春の雨　外圃

○

月うすき侍町やうたひ初
湯戻りの女美し春のあめ
雛棚に雀來て居る山家かな
寒垢離の顔ものすごし杉の月
野を焼きし石の温みや狐雨
笹原に犬迷ひけり夕あられ
比良は雪膳所唐崎の霞かな
大藩の行列長きつばめかな

手拭（春）　K・N生

手拭の帶に接木の鋏哉
出代や手拭三筋下駄二足
手拭に陽炎立つや手水鉢
踐みぬきに手拭結ひて汐干狩
摘草の手拭敷くや膝の下
手拭で土瓶提げゆく田打哉
春の夜を借り手拭の湯浴哉

遠足部小鳥狩雜吟　木象生

柿の村出て温泉の村にはいりけり
溪間を温泉の村道の芒かな
朝寒や辨當はよし草鞋いざ
上り阪露の道草鳥たちぬ
鳥山にかゝるにうれし鴫の聲
鳥まつや網を遠目の山の上
山畑の芋は堀られて小鳥網
引き返して網にかゝりし鵜かな

兼六公園所見　木象生

成巽閣

木蓮花成巽閣は閉ぢてけり
紅梅に能の舞台や明け放ち
よき庭をのぞきもぞ行く春の雨

金城靈澤

醫王山笑へはこれの水温む

幾秋の水を湛へて岩疊　紅葉山

此の山の椿に來る烏かな

市人や此頃疎し散紅葉

雨多き日頃の秋や紅葉山　霞が池

岸の躑躅美人去つて春のゆく所　榮螺山

榮螺山に雨催すや若楓　園内

皆人の湖を見て夕涼

椿阪小春の人の往來かな

市中所見

紅梅や玆に能の日謠の日　尾山神社

舟の月鮭をつかんの謀り事　犀川

鰍とりや餘寒の水に立ち盡す　淺野川

圍子賣るよき家古りぬ枯柳　柳橋

竹の子の名所尋ね行く春よ　十一屋

永き日を眼白の會やとある寺　市内

初雪や女なりける魚賣

批評

前號新體詩、和歌等の批評

白桃、梅花、合評

白桃、梅花の兩生必ずしも詩歌の嗜味を解するにあらず。故に我等兩人今前號新体詩等の批評を試みとんするは實に是れ烏乎の沙汰に屬し。其の評言の支離滅裂なるはその所にして、評言の正鴻を得るなど本より我等の覺悟にあらず。一日、白桃生來り談ず、會々談の新詩體の和歌に及ぶあり、白桃慨然として曰く、我校近時詩壇の振はざるや久矣會々詩を論ずる者を聞くも我等詩に因緣少

き黄吩の兒、尙ほ之を聽て其淺に驚く、必ずしも瘦顏枯軀の人、詩歌を論ずるを欲せずと雖も、滔々たる我北辰星校裡、聽く可きの詩なく、吟ずへきの歌を有せずと云はゞ其の荒凉眞に亞弗利加の沙漠にも類せずや。我今日北辰會雜誌を見て文苑欄に至り切に之を覺ゆと、彼れ乃ち懷より雜誌を出し、我と共に駄評を試みんとす。余又固より駄評を好むものなり喜んで彼と論ず、此の一編乃ち是れ(梅花)

○「月下低調」(靜池庵)　白桃曰く、此の作者未だ詩堂に登る日久しからずと見ゆ。『わかれ』の起句既に稚氣臭々彼の陽關三疊韻の結句より脫化し來りし者か、「いたくも我は感じつゝ」の如き總計十二句に於て別離の情緒を披攄せんとす、平凡にあらずんば陳腐に終らんのみ。句に奇なく新なし、平々淡々斯の如くんば、到底出關の曲と想ふ能はざるなり。梅花曰く、鐵幹の送別歌を「天地玄黃」かに見し事ありしが我は是の『わかれ』を讀みて偶然思ひ及ぼせり、乃ち起句「卿を出づれば故人なし」は巧を弄せしに似たりと雖も遂に陳腐たるを免れず。何時の頃か「山高水淸」とか云ふ新體詩集に此の作の筆路の如き靜平なる調を見しを覺ゆ要するに未だ稚を免れず。

梅花曰く「泣くか櫻よ」は翻譯なり、原詩の淸妙を寫し出さんと力めたる如きも、終結の二句は我其の可なるを知らず。「まさる色香あらぬなり」にて其の二句の意を解するを得と云ふを得ば別に論なしと雖も、此にては完全とする能はざらん。詩元來ある程度までは朦朧を排せず寧ろ淺薄なる露骨を忌むも、印象の定かならぬ斯の如きは如何あらん。我は斯の如き詩風を好まず。總じて此の如き最短の形を有する詩は其の短きだけ左樣に洗練磨を施し以て眞珠の二三珠盤上に躍るが如くならざる可らずと信ず。白桃曰く、「通りし時の美しき、唇、花にまさりしと」は窮したりと謂ふ可し、寸錦に無用の巧を弄す、稚なり。

白桃曰く、「水車」は竹柏園主人佐々木信綱宗匠の短歌の延長したる者、輕妙。梅花曰く輕妙は輕妙なるも惜むらくは窩臼を脫し得ざる底の亞流なり。與作の名も耳に馴るれば珍しからず。

梅花生、「未亡人」の英詩宗テニスン卿の作を譯したるを見、敬畏の念を以て之を讀む、白桃生傍より揶揄して曰く詩宗の此の原詩は韻律を以て勝るものなり、其の事其の者に至りては敢て珍となすに足らず。這般の詩彼の廿七八年役當時の雜誌を翻せば紛々として枚擧に遑あらず、英詩宗の詩なりとも既に翻譯したる以上は我等の所謂自家流の審美眼を以て照鑑せさる可らず。我は云はん、惜むらくは譯家唯勞せしのみ「されども妻」云々をレピートしたる如き原詩の如き妙之なる者韻の美を含む者あらば兎も角、身動きもせでゐたりけり」底の修辭にては寧ろ去らまほしの感あり、殊に「あふ愛らし」の「あふ」は「オー」の假名とすれば餘りに直譯なるにあらずか。梅花曰く兎も角、我は譯家の淸麗なる筆致を受する者なり、但し時代たくれなるは爭ふ可らず。白桃又曰く、此の詩題の如きは此の譯家には不適當なり矣、調あまりに流暢にして些の淸婉愁痛の風趣を見ず、七五調にても今少し音韻の素養を有する者ならは成功の域に近きしならん。藤村の「終焉の夕」の風神此處に捕ふるに由なし矣、「潮は落ちてかへりけり」。凄慘幽絕の趣、譯家希くは力めよ。白桃又再曰、譯家の「八十路あまりの乳母一人」の「一人」は拙。結末の一節に於て技能に於ける譯家の短所は甚しきものあり

『野分』、白桃驚て曰く、斯の如きもの亦詩と稱すべきか、俳句になせばまだしもなり。梅花、白桃を止めて曰く、君が此の詩に於て非とする者は取材のそれか將た彫琢の技に於てか、白桃答て曰く、語なし希くは許せと。梅花生辨ぜんと欲して得ず。

『鈴が森』　白桃曰く、余は此の題を見し瞬間、彼の人口に膾炙する「八百屋お七を懷想して詩美を愁々悲風の鈴が森に見出さんとするものならんと。思へらく可憐なる市井の處女が可憐なる戀に鳩にも似たる胸を焦し、計らずも慘憺の光景を描出せし事、固に詩家藥籠中の好詩題、刮目して作家が彼の女に對する同情を樂まんと。然るに熟讀一過、餘りに豫想に耽りし余は反比例なる不快以て漸く讀み了らざるを得ざりき。梅花以て如何となすと。梅花生また歴史的情味を以て之の『鈴が森』を迎ひたるものなりき。しかも唯『三百年のた仕置物』的の調格には亦惜まざるを得ず、曰く作家此の最後の『鈴が森』に於て前五詩と異りたる『陰火明滅鬼秋々』的の新調を用ゐしは掉尾の飛躍を試みん爲なりしか、不幸大失敗の作に洩るゝ能はず、此作家に未だ此の大詩題を捕えて所理するの手腕なきが如し矣、白桃傍より口を狹みて曰く宛然これ流行おくれ鐵道唱歌の口調なり。」

梅花、白桃兩生、『月下底調』の論難を試み、甚だ罵倒に終りたるを哀み、詩人靖池庵に對して實にすまざる者あり。然りと雖兩個の青年、常に粗直を尚ぶを主義とするもの、談論遂に不知不識冷罵に了るも顧みて作家苦心に對するの敬意は秋毫も變せず、苦茗すゝり終りて『櫨紅葉』の同人に向ふ。秋風、龍門、紫光は其の序によりて同好會心の伴侶たるを知るも其の果して何人たるやは兩生遂に精ならず。唯月光婆娑たる霜の夜、相會して天地錦繡の美を多恨の筆に寄すてふ、風雅のパーチーたるを羨むのみ。

『乳母が家』　白桃案を打ちて快哉一番曰く初節の叙筆まことに清麗、宛として山家村の我が乳母が家を彷彿にしのばしむ、秋風よく叙し出せり。梅花應じて曰く然り結節實に是れ靈犀一點の晴、太古の靜天地、野徑一路の村娘しづかに家路にいそく、歌ふはそも何？、秋晩の鐘聲、夕煙たなびく處、燈火兩三點、所謂彼の醉茗調なるものか。白桃、須臾にして腕を組み且つ云らく、好叙事詩惜らくは秋風、兵を知らず、秋風乳母が家を描寫するを知りて乳母が家の家を描くを忘却せり。一讀朗然たり、二讀、其の流暢に服す、然れども三讀四讀興味未だ全からざる如きもの腦中にす往來。靜思冥想、れもむろに乳母が家を想へば尚ほ童顔鶴髪、否、圓滿なる乳母を點じて今の我れは舊の乳兒にかへる底のモメントを要す。『垣根に萩の伏すところ』、我が乳母は今如何、秋風以て首肯するや否や。

『希望』、『さはれ招くよ花すゝき』と次句との接續如何、『花すゝき』は『希望の星光』のエンゼルか。白桃曰く登龍の門希くは我等の希望に好當なるか。

『吊正岡子規歌』、白桃突然として問ふて曰く梅兄、『若菜集』にたさむる中野逍遙を吊ふ詩と、『曉鐘』に載する吉國樟堂を悼む挽歌と較べ孰れをかとる。梅花生、晩翠の清麗沈痛をあげ、藤村の清婉悠揚をとる。白桃聲に應じて咳一咳口を開て徐に曰く兄の言固に當れり多情多恨、若溪の怨み綿々盡きずして、花に哭し風をいたみ、恨裡の身、銷して夢に香ある彼の青年詩人逍遙を吊ふは晩翠の筆それ或は硬に失せん。今正岡子規を悼む、調果して剛硬晩翠の格調を撰ばんか將た他に

ゆかんか。梅花曰く我は其の孰の果して子規を吊ふに適するかを知る能はずと雖も、「若菜集」のそれが「曉鐘」のそれよりは深き印象を與ひしを喜ぶ。白桃、沈思數分、曰く紫光の此の詩、晩翠を學びて未だ深からず。措辭また調和を缺くものあり。「柿紅の夕空」「一聲天に響あり」「凄くもたてる塔の上」「泣きあかしたる子規」、晩翠の遺韻そこに存するあるも氣いたづらに昂りて沈鬱雄大の調を欠く。是れ其の三句を以て一プロセスと爲したるに由るか。第五節穩當を失し、結末最後の節また斧削の跟跡斑々として肯ずる能はず。斷じて成功の作にあらず。梅花、然り我亦失敗の作なるを知る、此の如き格調を以てして此の短小詩に偉人を吊ふ作者未だ經營の術に迂なるの誹を免る能はざるなり。

「夕ぐれ岸にたちて」、巧みに讀み出でられたり、珍らしくも七五ならぬ調を試み玉へしよ。白桃は取題新らしからざるを云ひ、陳腐々々の冷罵を操り返さんとするも、梅花は何となく罵倒のあはれを感じぬ、筆致甚だ長けたるとにはあらねど、又すて難き優なる節なきにしもあらず。葡萄にそむる夕榮ます〳〵葡萄をかなしめ。

○和歌

其月

堪かねし百度の殘暑いまいづこ庭の梧桐に木枯の吹く

(白)、「百度の殘暑」は雅ならず、(紅)、陳腐、

朝毎に庭はく少女昨日今日はきぞ煩ふ落葉しげきに。

(白)、趣味索然たり、詩人想化の凡なる者か。(紅)、所謂當世流の純客觀詩の好摸型。

はら〳〵とちりくる木の葉しばし見てとみに小猫の庭にとびとぶ。

(白)、奇を求めんとして却て滑稽に類せずや、一誦啞然たるもの久し矣。(紅)、我は必しも此の歌を排するに與みする能はず。白桃の評言少しく酷に失せざるか。

肌さむみ書齋の小窓たしして見れは倉が嶽には雪ぞ積れる。

(白)第三句より第四句に移る所是れを之れ腰折と云ふ。

風さむくふるや時雨に戸たて〻晝も淋しき町のつじ〳〵。

(白)、既に歌の體を得たる者にあらず。況んや、第三句の如きは第五句を相待ちて失敗の双璧なりと云ふべし。(紅)、然り乳臭紛々近づく可らず。作者若し此の如きを以て得たりとなさば詩魔の魑する所とならん、

小止みぬる時雨のひまをかつ見れば空冴え渡り星のかゞやく。

(白)、「空さりげなくすめる月かな」　(紅)、「きりたちのぼる秋の夕暮

(白)「雪の日やあれも人の子温飩賣」　(紅)　其月の短歌、餘りに曲折なし。

夕靄　　潮東

夕靄に鹿磯のあたりたそがれて入日の名殘紅の海づら。

(白)、幷べ給へり、晩色の景物。夕靄あればたそがるゝは當然なり。海濱落日の大觀も上半輕きに過ぎて調和せず、雄麗なる紅蓮錦繡の大乾坤もさほどには思はれず。

浦やどに濤の音たかき旅枕むすびつさめつ故郷の夢

(白)　上三句今一層の洗錬を請ふ。(紅)、海濤斷續の音、耳にあるが如し。
うぶすなの神樂きこえて星一つ光かすけく明け殘る見ゆ

(白)、清絶、聖絶、　(紅)、清絶聖絶とは大に過ぎたり是の如きは初歩の詩のみ、
佇めば我もろともに奥つ城の夕をうけてながくかげひく。

(白)、朦朧曖昧、詩趣冷然、落日西山、古墳累々裡、潮東の感會我摸索するに苦む此の一首そも何のインハルトを有する。

野菊、　外圃

峰堂の甍の落葉つゆにぬれて鞍馬山杉朝の霧うごく。

(白)、所謂是れ莊重體の雛形とも云ふべきか。但し上三句は冷味人を襲ふも下二句窮せずか。
野營する篝は消ねて霜の朝いなゝきさむし片われの月。

(白)、平凡。(紅)、然り。
牛追ふて歸る蕎麥畠薄月夜村の古寺暮の鐘なる。

(白)、好画題、惜む可し夫子色彩の濃淡を誤れり。　(紅)、此の一首、蕎麥畠の薄月夜を寫して拙、
薄野に狐なくなる夕月夜妹はかへらず此の夜さびしも。

(白)、銀河空に流れて薄を渡る風冷なり、此の夜妹あらずと、冷然として夜色頓に深きを覺ゆ、

樒一枝　百光

『歌ひませと』妹がたくりし樂の譜を妹を吊ふ琴にかなでし。

(白)　一讀深沈なる靈氣に打たる、再讀　語調の稍かたきを感ず。歌ひませの樂譜をば、さりとは今吊歌の譜に奏すとか、誠に哀婉の極み、絃をはしる哀韻そもや如何。
夜は半ば妹が初七日經を誦せば香の煙の花に古ゆたふ。

(白)、上半よし、下半巧緻か拙劣か。(紅)、我れは上半の秀、下半の拙に消されんを憂ふ　大手腕あるものにあらずんば得てよくす可きにあらず。起句の「夜は半」は如何、調を害せずか。

ひと葉　秋風

(白)、「月清き夜半」「山寺にわび居」の二首雅なり、幽なり

(紅)　「その昔、罪人きりし森かげに今朝霜白く雉子鳴くなる」は餘りに腐朽矣。

(白)、「足すゝぐ宿のたらひの眞清水に小松葉うきて灯かげうつらふ」清烈、紅烈。

(紅)、「浴して家に送らん文もかきつ夕さびしく船歌をきく」、巧に似て拙。

(白)、「宵やみを物思ひつゝ庭にたてば木犀の香のいとゞ身にしむ」。新ならず。

(白)　「草笛をふきならしつゝ馬子の行く夕日てりそふ能登の山路」、　秋風兄何ぞ群小の舊套を襲ふことしきりなる。今一般の精彩を望む。

白桃、紅梅、漫罵の辨を弄する數時、白桃は喉枯れ、紅梅は舌爛る、思ひらく是れ漫罵の惡報なりと。兩個よく罵倒の最も不德なるを知る、加ふるに兩個の罵倒先生筆とりていざ鎌倉と云ふ時、三十一文字をすら幷ぶる能はざる哀むべき玄れ者なり。而して如此散漫の亂罵を敢てする事固に宿報の程いと恐ろしと云ふも愚なり。然れとも諸兄、局外漢の觀察批評時ありて專門家の參

照に値するもの無きにあらずとか、諸兄の洪量なる必ずや其の愚を憐みて其の亂暴なりしを恕し玉ふ可きか。然りと雖も白桃、紅梅また男の片端に籍を有するもの、強ちに根もなき惡罵を事として樂む漢にあらず。されば諸兄にして我等の惡罵に介然たるあらば、兩個の瘦軀を兄等の前に横へて陣頭鞭打の犧牲となるを辭せざる可し。諸兄希くは諒せよ。

十里黃雲白日暉、北風吹雁雪紛々、莫愁前路無知己、天下誰人不識君、

高適

雜報

小松宮の薨去。

卷頭に於て奉悼せし如く小松宮殿下薨去に付、御葬祭の日なる二月二十六日、本校にては職員及生徒一同謹んで遙拜式を行ひ哀悼の微意を表せり。式場は至誠堂にして殿下去る明治卅一年北陸地方巡行の際、本校の爲に揮毫せられたる「至誠」の大額は楣間にかゝり、ひとしほに畏く感せられき。

誄

明治卅六年二月十八日、元帥陸軍大將功三級彰仁親王殿下薨ジ給フ。嗚呼哀哉。恭ク惟ルニ殿下ハ皇室ノ懿親ヲ以テ國家干城ノ重任ニ當リ皇室ノ倚仁シテ國民ノ具瞻スル所ナリ。夙ニ中興ノ皇猷ヲ贊ケ尋デ軍國ノ偉業ヲ擧ゲ寧處ニ遑アラセラレズ。數々歐洲ニ航シ列國ノ帝王ニ相見シ國光ヲ樽俎ノ間ニ顯彰シ皇威ヲ中外ニ發揚セラル。其ノ不績盡シ之ト與ニ京ナルハ莫シ。今ヤ薤露ノ化、將ニ海內ニ遍カラントスルノ時、

溘焉トシテ薨セラル、嗚呼哀哉。本日國葬ヲ擧ゲラル朝野誰レカ哀感慟哭セザランヤ。本校職員生徒相會シテ奉悼ノ式ヲ行ヒ謹テ哀辭ヲ陳ジ以テ殿下ノ英靈ヲ吊シ奉ル。

明治三十六年二月二十六日

第四高等學校長正五位勳五等　吉村寅太郎誠惶誠懼

春を迎ふ

燎亂當來の衰見ゆるなく、將た彼の詩人をして吹き來る落花に無象のかなしみを歌はしむるの哀韻もなく、滿城の春今將に闌ならんとす。

吟遊、犀川河畔を行けば見ゆる限りの有象無象、幷びたつ向岸の林、乾坤悉く生氣勃々たるを認むるを得。山に色あり、河にさゝやきあり、見ずや曉しらむ割長屋の井戸端に米すゝぐ婢も春の潮は生々として彼の女の頰邊に燃ゆるを。而して、書窓書を講じ敎場ノートに苦む靑衿子、春や今、兩々三々至る所春を尋ねて柳條梅蕊に靑春の氣を吸ふにあらずや。

快なる哉早春の候、絮果の紛たるなく、落英の繽たるなし。壯なる哉、早春の候、夜半の嵐に亂れんの痛なく、散りての後を恨まん切もあらず。此の時此の候、春は如何許のエナーヂーを以て乾坤裡に藏せんとはする、蓋し算數の計る所にあらざるへけん、壯快なる早春新柳の好時節。

大塊の裡、自然あり人世あり、早忙として來り夙忽として去る彼の四時は、抑も悠久なる歲月を轉する球子の如く、連鎖の如し。人間此の間に生活して、一葉浮ふ太洋に慨る。四時の季ありて生々たるあらば人間何んすれぞ洋々の春を一葉裡に悔らざるの理あらんや。一葉せまると悔るなかれ此の裡無限の靈あり、天地大なりと驚くなかれ是れ一葉舟裡方寸の量に及ばざる

なり。先哲喝破するあり曰く

開眼俯仰天地以觀之、則壤石卽吾骨肉、草木卽吾毛髮、雨水川流卽吾膏血精液、雲煙風籟卽吾呼吸吹噓、日月星辰之光卽吾兩眼之光、春夏秋冬之運、卽吾五常之運、而太虛卽吾心之蘊也、嗚呼、人七尺之軀而與天地齊乃如此、三才之稱豈徒然哉、宜變化氣質以復太虛之體也。

偉なる哉、哲人の識。天地間に於て蕞爾たる形體を浮世に托する吾人七尺の軀は天地と其の大を較して毫も損色なしとよ。春は百花の錦繡を敷き、秋は森嚴の象を萬物に捺すは是れ天地の作用にあらずや。哲人、骨を刺すの痛憤、人生の靈機を指教するも、何事ぞ人間默々として蠢くのみ、天風そらに怒號するも床下塵埃の裡、安如として巢を造る鈍虫あり。迅雷霹靂、乾坤を振動するも地に閑如たる啞子のあるあり。思へば我れ人の營々として終日なす所果して鈍虫啞子の倫なるなからんや。

春や來ぬ、旭に匂ふ滿朶の櫻、當來それ近きにあり、借問す青々たる青袗の子よく人世の花に悔るの意氣を存するか。青春夙忽、雙鬢に白莖を植うるの時、顧みて青春紅顏の昔に鏡前老涙を揮ふの愚を演ずる莫れ。

萬物皆自個を超越するものを造出せざるなし、而して爾等此の大潮流に逆行し自ら人を超過せず、反て退化して禽獸とならんと欲するか。

爾曹既に蛆蟲より進みて人となるの途を開けり。然れども其多數は依然たる蛆蟲のみ。嘗て爾曹は猿なりき。而も人は所謂猿よりも反て猿たること甚しきなり。爾曹は人世の輕侮者なり、自ら衰滅し自ら毒害し、世間に勞れたるものなり、

爾曹此の如き爾曹を遠けよ。

春は既に來れり。人世の春は既に來れり、誰ぞや、蛆蟲の如く淸けなくも人世の花に背かんとするは。青袗子、爾等の胸を張り爾等の頭を直立せしめよ、爾等は是れ斷崖千尺近づく可らず底の大活物にあらずか。爾等の褥を整え、爾等の步を潤くし昂然として行け、此の時爾等五尺の軀は正に是れ黃河天門より落ち來る底の大偉人にあらずか。爾等理の爲に論じ、正の爲に談ずる時、爾等の言語、音聲は是れ天來の靈音にあらずか。男兒須らく大を養ひ、正を蓄ひ、堂々戰場に奮鬪するの戰士たるを期せざる可らざるなり。嗚呼戰士！如何に戛として響ある語なるよ。帳下、百萬の兵士あるも、威風凜然、士氣既に敵を壓する戰士なくんば如何に。羅馬は斯の如くにして滅ひ、希臘の文明は斯の如くにして滅しぬ。而して戰士に乏しかりし德川幕府は白髮の遺臣をして中夜、涙潸然たらしむ。

戰士なる哉、戰士なるかな。戰士は人間天賦のプライドなり。義の爲に戰へ、愛の爲に戰へ、學の爲に戰へ、而して人道の爲に劍を執れ。而して又凡てを壓服して超然富嶽嶺上劍を橫へて皎月に臨む、男兒の雄懷斯の如くにして少しく悔るに足るものなり。

嗚呼、山に色あり、河に聲あり、天地の春は今將に闌ならんとす。寄語す、青袗の子弟、花に醉ふの痴を學ぶ事なく、大に人世の春を快とせよ。最も深く、戰士たるの榮を得し天の恩寵に感謝せよ。甚だ痛切に、男子たるを得し資に絕大の抱負を捧げよ。

嶺南子の語、

嶺南子と語りて中夜を過ぐ。子、將に歸らんとして語りて曰く。

卿、頻りに男子＝戰士論をかつぐ、我れ人

實に男子てふ自覺を欠ぐ事、最も痛切なり。卿の戰士は抑も如何なる劒をか佩ぶる、卿の所謂戰士は一面彼の西歐中世の理想的勳爵士なるか、又は我國我士道の結晶せる、理想的武士なるか、卿の意那邊にか存する、

雜報子笑ふて曰く。「所謂愚禿主義に入る第一門階」と嶺南子、微笑をたゝへ領き去る。

皆勤賞牌を廢せよ

金殿玉樓何者ぞ、美酒佳肴何者ぞ、輕衣暖服何者ぞ、博學多識何者ぞ、若かず壯神健躰に。

世に身躰を練るの法多々あり、野球といひ、庭球といひ、漕艇といひ、サンドウといひ、僕を更ふるも夫れ盡すと能はざるべし。然り而して身躰を練ると共に士魂を養ふべきもの、獨り武道に於てのみ之を見る。

我校夙に演武場を設けて之を奬勵するの意、また將に其身躰を練ると共に士魂を養はむと欲するに外ならざるべし。大に可也。然れども現實の豫期に伴はざるは世の通弊にして、依て以て士魂を養ふべき武道が、時に或は却て士魂を敗ぶるの具とならむとするの傾あるに至りては、慨嘆すべきもの、極にあらずして何ぞ。

頃者、寒稽古の擧あり。寒を犯して每夜無聲堂に集る者二百を以て數ふべし。彼等劒を執つて立つや、群虜を塵にせむとする武者振あり。彼等腕を扼して進むや、猛虎を嵎に搏たむとする概あり。其鋭氣や以て稱すべく、以て讚すべし。

然り吾人は飽く迄も彼等の鋭氣を稱讚せむと欲し、しかせむとするの意切なれども、獨り悲しむ、數個腐敗分子の加はるありて、吾人をして稱讚するに躊躇せしむるを。

吾人一夜衆に從ひて劒を擊ち、將に家に歸らむとす。時に一生の外より來るあり、獨語して曰く、咄、彼等の勉むる所のもの、只一個の賞牌を得むとするにあらざるかと。咄々、何等無禮の言ぞ。吾人にして蠹魚たるべき者ならばいざ知らず、苟も然らざる以上は、身躰を練磨し、士魂を修養するの要あるべし。是に於てか吾人勇を鼓して武を勵む、區々たる賞牌吾人に於て何の關する所かあらむ。吾人は將に彼無禮漢の頭上に鐵拳を見舞はむとせり、然れども吾人の胸は之を許さざりき。そも何が故に彼を懲さゞりしか。願くば吾人を責むる勿れ。彼既に無禮の言をなす、吾人にして心中に顧みる所あらざりせば、何ぞ彼を懲らさゞるあらむや。

吾人が彼を懲すの勇氣なかりしは他なし。無聲堂裡眞に區々たる賞牌に戀々たる者之あれば也啻に戀々たるのみならず、自ら出席せずして人をして己が名を簿上に記せしめて以て、彼等が所謂名譽ありとする賞牌を得むとする醜漢之あれば也。吾人が士魂を養ふべき武道が、却て士魂を敗るの具とならむとする傾ありと叫べるもの、また此謂に外ならざる也。

進で吾人は無聲堂に忠告せむとす。希くは今後寒稽古皆勤賞牌を廢して用うる勿れ、皆勤の勞を表するの要あらば、須く贈るに一葉の證明書を以てせよ。若し夫れ眞正なる奬勵法に至りては多々あるべし。豈に獨り區々たる賞牌の力を借るを要せむや。

吾人の言少しく驕激にすぐ、然れども沈思默考せよ、吾人の言豈に秋毫の理なしとせむや。

（汪　洋）

榮葉（あつば）

徒に教師を排斥せむとするが如き彌次馬者流の行動を目して、吾人は活氣ありとは認めざれども、不幸、我校に活氣なきや久し。煙朦々たる暖爐を圍みて取り止めも無き談話に時を費す懦

夫はあり、然れども、朔風寒き庭に立ちて雪玉投げむとする快心兒はなし。昨日も今日も机に嚙ぢり付き教科書に頸突き込む菜葉はあり、然れども、自ら已が知田を耕さむとする强の者はなし。

あはれかの菜葉を見よ。彼等の面には人の色なく彼等の腕には肉の一塊だに無し。更に見よ其の歩む樣のさながら中風患者の如くしかく奇なるを。而かも彼等が重そうにして運ぶものは何、教科書に非ずや。

世の忘想家が唱ふる共產主義の社會來るあらば彼等菜葉は安かるべし。然れどもかゝる社會は眞に夢想に過ぎずして、世は益々適者生存の場とならむとす、是に於て、あゝ菜葉何をか爲し得んや。不幸なり菜葉、不憫なり菜葉。

然れども、吾人は彼等菜葉を罵倒するを以て吾人の能事了れりとはせず。吾人は寧ろ彼等を憐み、彼等の爲めに泣かむと欲する者なり。彼等は何が故にしかく蒼きか、彼等は何か故にしかく弱きか。乞ふ市に立つて見よ、人は皆彼等の如く蒼きか、彼等の如く弱きか。あゝ誰か人皆蒼く且つ弱しと斷じ得ん。（命也）

第二回演說會

子　子　子

余は病氣にて前回の演說會に出席する能はざりし爲、今回は大なる期待を以て出席したりしに、聽衆三十余名の少數なりき、千羊の皮は一狐の腋にしかざるを知れる余は、不熱心なる多數の聽衆よりも熱心誠意なる少數の人々が出席せらるゝと好むか故に聽衆の寡多を以て直に會の盛否をトせんとするものにあらずと雖、今回の會が不振なりしは蓋掩ふべからざる事實也、聽衆のしかく少數なるに反して十余名の辯士が相躉で登壇し最熱心に誠實に演ぜられたるは實に人意を强くするに足る、遮莫、辯舌の修養が今日の社會に必要なるは今更吾人の呶々を要せざると等しく由來北辰校學生が之に對して無頓着不熱心なるも亦今更呶々を要せざる所也、併し演說討論に向つて不熱心なりとて、北辰校の學生が何も卑屈也無腸漢也木偶也傀儡也と云ふ譯にはあらざるべし、高崇なる渴望を醫せんとするに急なる、玄妙幽微の眞理を追はんとするに切なる諸子の如きが、默思潛念小心翼々として書を讀み道を思ひ品性を陶冶し精神を修養すべき一刻値千金の時を、可惜無益の演說會などに徒消せらるゝに忍ひざるは余の不敏なるも猶且之を知れり、余は寔に諸子に向つて滿腔の同情なからんと欲するもうべからざるなり、余は諸子が演說會に出でよと云はるゝの御迷惑千萬なるを察した氣の毒の餘り二度之を諸子に乞ふの勇氣を有せざるなり、六百てふ多數の內、悠々閒々青樓に起臥し時間を殺す工夫に苦める餘り卑淺陋穢の所業に及び已むなくんば不義なる快樂をも辭せざらんとする徒なきを保せず、然れども是等の徒に向つて出席を云ふ事は余のよくすべき事にあらず、他人の慫慂教唆に乘せられて事に從ふが如き徒と齒するは余の最も耻辱とする所也、亦余が性癖也、故に余は何事に限らず、他者の教唆に乘る如き人物を相手とせず自ら發心して熱心事に從はんとする意志抱負手腕を有する人に向つて之を激勵する也、されば無頓着不熱心なる徒及び附加雷同的の傀儡を拉し來るを欲せず苟も口は食ふのみの爲に造られたるにあらざるを解し、辯舌の練磨か忽諸等閑に附すべからざるを知れる人士は大擧して來れ吾人正に屐を倒にして歡迎せん、饒舌は能辯の義にあらず又辯舌の餘弊を惡むで之を棄てんとするは食傷を惡むで一粒だも口に入れざるは一般なる

を記せよ

當日の辯士及演題は左の如し

權謀に就て	藤澤廉之助
書生社會的勢力	山田　正吉
矛盾	高木　章
耶蘇教信者の儒教觀	塩田　傳
國民發達の要素	逢坂元吉郎
文學思想	及能　謙一
西洋熱	河村粂二郎
品性と其修養	川田　末子
本能を論じて人生に及ふ	多田平五郎
他力信者の人生觀	富山　智海
所謂嘆息家	盛　賢藏

の暇なく艸々筆を呵して已に期限の切れ居るのを無理に乞ひて本紙の餘白をかりし次第なれは恰も急行列車にて新橋より神戸に來れるものが東海東山五畿の山容水態より人情風俗の微を談せんとすると一般、疎漏誤謬多く大に正鵠を失せるものあらん、諸子幸に諒せられよ

論理薄弱との非難を免れざる議論をなせる辯士も少なからさりき、是れ演說の第一要義として心得ふへき事也

二物を比較論評せんとせば宜しく其二物同一根底上に立てる点を捕へて論ずべし、馬琴は僅に八犬傳を艸せるに止まれど辨慶は百斤の鋏條を弄べり、故に辨慶が馬琴に勝れるや明なりと論じ一丈と一貫目とは孰れが重く孰れが短きやと云ふが如き議論は成立せざる也

他說を攻擊せんとせば先づ其說の主張論点を十二分に咀嚼悟了するを要す、意義內容の如何を云はずとも明白なる事なれど實際に於て辨士諸子が陷れりと認めし二三の点に就て反省を煩はさんとす、しかも余や淺識短才、加ふるに熟圖

顧みず其用語の發音字形のみによつて之を論駁せば時としては浪華の蘆は伊勢の濱荻たるの奇觀に終る、孔子が聞くがまゝに之を行はんやてふ問に對して、聞くがまゝに之を行へと云ひ又は父母の在すありと應へたるが如きは外觀上は確に矛盾也、されど其意に至つては同一也、茲に留意するなくんば折角の辨駁は無駄口に終る也

又他說を駁する時同一の立脚点より之を見て駁せざるべからず、例へば、酒は飲むも可なりと云へるに對して、是れ校則の禁ずる所にあらずやと直に排斥する如きは無意義の駁擊たる事あり、一は社會普通の人に付て之を云ひ他は學生の立場より之を論ずれば也

目を透して智識感情に訴ふる文章と耳を透して智識感情に訴ふる演說とは其間異れる点不鮮共に論理的正確を要すべきは勿論なれど議論の構成法に於て稍趣を殊にす、又文章語として適切なるも口語としては不可なるものあり、戲曲に同一節の內に波瀾あり、各節々毎に其趣を異にし最後に大團末(カタフクト)ある如く演說にも論旨音調に於て之を要す、終始平板にして何れが主意の存する所なるやに苦ましむ如き事なき樣注意ありたきものなり

事を論ずるに當りて餘りに極端に餘りに　小棒大に之を言表するは大に不可也、滑稽に陷りて反て論鋒の勢を減ずれば也

以上の如きは始めにも云へる如く明々白々の事なれど古來の大能辯家大學者と呼ばるゝ人にして猶且免るゝ能はざる所なり、故に煩なるに拘らず、茲に之を云へるなり、苦は韓非說難を說て說難に罹れり、余豈之をよくすと云はんや、然れども砥は自らよく何物をも切斷する利なきもよく兵を鋭利ならしむ、余が一片の辭只砥の殘片たるを得ば幸甚

劍道部報告

寒稽古幷に大會記事

（冠木劍狂記）

歳漸く寒に入つて天地全く老い、山は白髮を戴き眼は素雲に遮られて瓊林玉樹悉く奇觀を得たり、近く醫王山頭を望めば嵬峨として素簾を懸け、崎脚東に延びて白嶺となり、突兀天を摩して唯白雪の孤なるを見るのみ、更に眼眸一轉北に向へは、巨濤澎湃居然として萬里の勢あり、玉山此に碎けて白龍彼に躍るもの、則ち是我が金城の冬、

傳へ聞く向陵の健兒は陽春東臺の紅葩に游び、孟夏黑田の綠水に親み、以て其氣を養ふと、我は卽ち嚴冬天凝り、地閉ち、風烈しく、雪飛ぶの時に當つて其神を鍛ふ、豈亦偉ならずや、

朔風一陣雪を捲いて來り亙寒身骨に轍す、正に是劍氣森然人に逼り渾身の覇氣落々として血に動くの時、寒稽古の鐵檄一度飛ふや勇士强將雲の如く來り會し、無聲堂上叱咤の聲、劍戟の響、屬寒鴉の眠を驚かせしもの、底事ぞ皆勤者僅に三十八名ならんとは、劍道衰ひたるの故か、將た士氣振はざるの爲めか、劍狂子は校友が年々歳々皆勤者の數を倍蓰し來らざるを見、窃に杞憂に堪へざると俱に、斯道が或は心念脩養の大眼目を藐視して、所謂擊劍つかひてふ卑辭の下に稱呼し去るにあらざるなきかを悲むものなり、

三十日の期間、固より長しとなすに足らざれども、寒風怒號して凛烈綿衣に透るの夕、仙鶴舞ふて玉塵街路を埋むるの時、不屈不撓一點の火氣だに有らざる道場に上り、徒跣冷板を踏み脛足破るゝを厭はず、兩腕鮮血滴るも意とせず、刻苦精勵、能く其膽を鍊り技を磨く、豈に此等健兒の意氣眞に感ずべきものなしとせんや、今左に此の名譽ある皆勤者の姓名を列記せむ、

明治三十六年劍道部寒稽古皆勤者姓名

千秋　寛	上野意純	藤田圭太郎	富岡敎雲
大串榮太郎	高松　博	高木靖彦	多田淳良
青山暢性	前田幹雄	富山智海	增谷平八
栗林豊作	中村秀太郎	見間芳野	三上房吉
田邊邦平	金子庄八郎	高田澤智	栗本快一
佐倉八十松	後藤幸太郎	龜川兼吉	菊池信次
森　祐吉	石黑文吉	太田原清美	山本三治
新谷哉二	山内秀一	高木　章	野波靜雄
藤澤廉之助	得能佳吉	倉賀野晋	藤岡兵一
神保金衛	根津金吾		

合計參十有八士、此等の士は特に中霄殘夢を破つて蹶起し、曉月を戴き霜雪を踏むて堂に上るにあらざりしを嘆せしとかや、亦以てその熱心銳意なるを知るに足らんか、

劍道部大會は二月十一日紀元節を卜して無聲堂に擧行せられ例年の如く寒稽古皆勤者に皆勤證書並に昇進者に進級證書授與式あり、當日進級の勇士左の如し

千秋　寛

右三級

中村秀太郎	金子庄八郎
前田幹雄	栗林豊作
石黑文吉	佐藤豊次郎
根津金吾	篠原定七
富岡敎雲	

右四級

高木　章	森　彦兵衛
渡邊　清	山田　鼎
田邊邦平	森　三郎
江川義雄	藤田圭太郎
井上胤良	山内秀一

大脇賢一郎　大串榮太郎

右五級

式終て大會に移る、初め大會の告示一たび掲示せられてより士氣大に振ひ、鐵腕叫鳴して止まず、部員皆腕を撫して意氣自ら昂る、一日千秋の思を懷いて待ちたる日は來りぬ、日は是紀元の佳節、人は卽ち四高の健兒、形は僅に一人の敵を摧くに過ぎざれども心は以て萬人を防くに足る、人此心あらば獰鷙猛獅の强暴と雖も幾んぞ意にするに足らんや、されば日常校友が道場に出入して健鬪踴躍此道を脩むるもの全く彼にあらずして是にあり、故を以て部員は勝敗の數の如きに至つては固より深く論ずる所にあらず、別に抱負の雄大なるものありて存ずるなり、況んや百戰百勝は未た善の善なるものにあらざるをや、然れども勝利元來恥辱にあらず、敗北固より驕るに足らず、敗者はその敗れし所以の道を察して益努め、勝者はその勝ちし因由を講じて愈達せんことを期すべし、

三本勝負

（一中）ハ本縣第一中學校、（二中）ハ同第二中學校（師範）ハ本縣師範學校（監獄）ハ本縣監獄署、

甲手
胴、胴（高田　澤智　倉賀野　晋）
甲手、甲手（太田原清美　大谷　勝眞）
面、胴（五十嵐平二　竹内　六藏）
引分甲手（胴太田原清美　野波　靜雄）
面、面（柿田　佳實　高松　博）
甲手、面（藤澤廉太郎　新谷　哉二）
胴、面（藤田圭太郎　田邊　邦平）
甲手（森　祐吉　面、面（野口　耕一）
甲手（原田　芳實　森　彦兵衛）
面（神保　金衛　突、胴（渡邊　清）
甲手、面（前田　幹雄　三上　房吉）

引　分（多田　惇良　糀谷幸十郎）
胴、胴（今井喜代志　富山　智海）
甲手、胴（清水與七郎　寺本濱二郎）
突（內田　節三　面、突（大脇賢一郎）
面、面（佐倉八十松　甲手（山內　鼎）
面、甲手（后藤幸太郎　小川　賢二）
甲手、胴（安藤　德　小林　退藏）
胴、胴（山村　保郎　森　三郎）
面、甲手（小野　定志　大串榮太郎）
甲手（吉澤謙太郎　面、面（青山　暢性）
引分甲手（龜川　兼吉　甲手（江川　義雄）

面、胴（見間　芳郎　增谷　平八）
面、面（由雄　正造（二中）　石黑　文吉）
甲手、甲手（谷澤　一郎（醫專）　中村秀太郎）
胴、甲手（井上　敬　金子庄八郎）
胴、甲手（龜田　某（師範）　鈴木　幸熙）
面、胴（泉　孫三郎（二中）　根津　金吾）
胴、面（藤田　寅次（一中）　千秋　寬）
面、面（山本　孝貞（二中）　林　慶太郎）
面、突（高橋與三太郎（監獄）　山科　龜義）
甲手、面（山田喜久良　鈴木　幸熙）
面、甲手（田中　三次（外來）　宮所富太郎）
面、甲手（都賀田茂穗（外來）　石川　龍三）

引分甲手（高橋　陵（師範）　甲手（富岡　敎雲）
胴、面（齊藤　確（一中）　高木　靖彥）
胴、面（藤波　顯也（二中）　佐藤豈次郎）
面、面（瀨尾　九八（一中）　上野　意純）
胴、胴（三百苅幸治（師範）　栗林　豊作）
甲手、面（市島敬太郎（一中）　篠原　定七）
面、面（矢原　準一（二中）　宮所富太郎）
引面、胴（山形　信廣　分胴甲手（千秋　寬）
甲手　甲手（北川九十郎（師範）　栗林　豊作）
面（千秋　義章（外來）　甲手（吉村　新六）
甲手、甲手（村井長八郎（外來）　甲手（林　慶太郎）
面（兒島　鬼男（監獄）　突、甲手（石川　龍三）

以上の諸氏皆壯烈勇猛氣將に彼蒼を衝かんとするもの、其睥睨太刀を振ふて踏躍空を蹴るに至つては風生雲起眞に龍騰虎驤の赴あり、楯を鴻門に擁して怒髮立ち目を瞋らして項羽を罵倒せる古樊噲も斯くやと想はるゝの活劇あれば周馳健鬪叱咤の聲屋を動かし懦夫をして起たしめ怯者をして勇ならしむるものあり今左にその特に目醒ましかりしもの數番を列記せむ、

柿田氏高松氏、技互に相伯仲の間にあり、柿田氏は斯道の師範家柿田先生の嫡男素養固より凡ならざるものあり、高松氏は年少氣英昔壽永の役平家方の公達も斯くやと思はるゝ風貌、鉄面甲手に身裝を堅めて甲斐々々しく場に進み出てたる時は滿場の視線均しく氏に注ぎ、拍手湧くが如く萬人均しく花を散らすな、情を知れと、口々に呼ばはる中、互に目禮一番竹刀を青眼に搆へ、叱咤奮躍火花を散らして戰ひしが、直實ならぬ佳實、固より小次郎直家に思を寄するの情も知らねば可惜明眸可憐の若武者遂に討たれて戰場の露と消えぬ、

高橋氏富岡氏、敗を取つては俱に校名を辱かし

むとや思へけん、互に態度嚴かに立合しが富岡氏の太刀風の鋭さに敵は尠からず惱める樣なりしも、敵も去る者容易に屈せず、屬富岡氏を襲ひ互に一刀を加へたりしが勝敗遂に何れとも定め難く、引分に終りしは兩士よく戰ひて我人俱に遺憾なかりし、

由雄君石黑君、由雄君面貌魁偉一見勇士の俤あり其術侮るべからざるものあるや必せり、石黑君太刀を横振に振りて敵を迷はし善く戰ひたりと雖遂に敗れぬ、遺憾々々、劍狂子いふ、太刀を横振にする敵を迷はすの術に於ては或は策の得たるものならんか、然れともあまりに輕卒らしく機急の場合には切込に大に氣合を損ずるの嫌なしとせんや、請ふ君一考せられよ、

齋藤氏高木氏、齋藤氏は二中の勇士、高木氏は我校の新進。互に鎬を削りしが高木氏遂に面、胴の二本を得て見事に敵を斃しぬ、

谷澤君中村君、中村君師に向ふて太刀を執る、英鋒當に歸の賞する所たり、されど決戰場裡に望むでは、あまりに凝りて敵の爲めに機先を制せらるゝの嫌あり、此日醫專の猛士谷澤氏に向ひ平素の敏捷に似ず切先甚た鈍かりし、此戰幸に敵を斃せしと雖、此弊を矯めずんば遂には敵の爲めに乘せらるゝに至らん、爾後戰に望む毎に勝敗の數に鑑るなく勇往直進敵に向はば蓋しその鋒や當るべからざるものあらん、君それ之を努めよ、

藤波氏佐藤氏、兩氏の戰や當日の花にして天下の耳目を蒐めしもの、佐藤氏や新進氣鋭雷名夙に校内に鳴る、過くる二中の戰に不幸にして敗を取りしと雖其の技倆や決して敵手の下にあるものにあらず、敵は幸にして奇勝を博し得たりしかば、今回の役其精を拔いて此に當らしめ、以て昔日の虚榮を維持せんとし、その最剛藤波氏を拔いてその任に充てたるなり、此を以て萬衆の兩士を迎ふるの拍手は恰も急霰の如く、天下の勝敗を言ふもの容易に定まらず、萬口籍々各其說を異にす、兩士の場に上るや佐氏は雄心落々眼中人なく、藤氏は意氣鬱勃敵を斃さずんば己まず、一は猛虎の絶壑に踞るが如く、一は雄豹の嶠を負ふが如く、未た戰はざるに滿場既に風生じ雲起るの慨あり、其一たび相搏つに當てや兩勇相寄ると見る間一髮、藤氏は瞠と大地に斃る、斃ると雖名だたる勇士、何條拔かるべき太刀取直して敵に向はんとするや、佐氏隙さず渾身の力を籠めて打下す切先、見事敵の眞甲を打留め續いて甲手を得し早業、電光石火のそれよりも劇しく、眞に東北男兒の氣を負ふもの、固より北陸男兒の企及すべき所にあらざるなり、

請ふ佐氏幸に自重せられんことを、

井上氏金子氏、金子氏小兵なれども敏捷、飜然身を跳らして敵の虚を突き、敵驚き避くるに乘じて巧に之を討つ奇術に長ずといふべし

瀨尾氏上野氏、一は敏、一は捷、擊突奮鬪互によく秘術を盡せしと雖、上野氏遂に瀨尾氏のために敗らる、敗ると雖も氏の胸中自ら光風霽月の慨ありしもの、遂に亦快男兒たるを失はざりし、

龜田氏鈴木氏、鈴木氏堅固なる處あれども龜田氏の早業に制せられて敗を取りぬ、鈴木氏天性巧妙にして氣合といひ、太刀筋といひ、態度といひ、誠に得易からざるの妙所あり、勉めて倦まずんば天晴斯道の勇者たらんや必せり氏それ之を旃めよ、

三百苅氏栗林氏、栗林氏は白虎隊の名殘を留めし會津武士の流、太刀先の激しきこと校内に隱れなきの勇士、場に上るや莞爾として餘裕あるが如く、凛乎として一點の惰氣なき武力絶倫の三百苅氏を二度まで得意の胴にて勝を制せしこそ流石に見事なりき、氏や將來我校の重鎭たらむ、希くは發奮自重せられんことを、

泉氏根津氏、太刀打ち合はすこと僅に一二合、雜作もなく泉氏のために、仕てやられし脆さ、觀者固より御自分さへも呆きれ返りし風情、劍狂いかでかあきれざらん、執る筆さへも進まず、慨又嘆、

市嶋氏篠原氏、篠原氏根津氏の敗衂を無念とや思ひけん、白眼屹と敵を睨むて身搏しも、敵の力や優りけん手もなく逆撃ちの果敢なき最後を遂けぬ、

藤田氏千秋氏、勝ち驕りたる敵軍は亦もや我が軍の勇士を摧いて藤田氏意氣虹蜺の如く、千秋氏千秋の恨を呑むて退く、

矢原氏宮所氏、我軍の連戰利有らざるを見て、慓悍無雙の宮所氏、其將林氏を顧て曰く、臣敢て股肱の力を竭し、之に繼くに死を以てせざらんやと、その敵に向ふや怒髮逆に立て目眥裂け、猛然として蹶起し激突奮鬪百雷轟き紫電閃き壯烈言はん方なし、是に於てか劍狂亦筆を投して勇士決戰の狀を見、心窃かに宮氏の成功を祈りしに、嗚呼天乎、命乎、百計遂に効なく好漢空しく敵刄に觸れて忠義の鬼となる、無念々々、

山本氏林氏、これぞ當日の大立物、兩將霰の如き拍手と雷の如き喝采の間に場に上る、山本氏は二中の重鎭、見事林氏を斃して霸を天下に稱へんと欲し、林氏は幾多の戰場を經來りて武名赫々たる我軍第一の老將、部下の連りに敗るゝを見ると雖も心少しも動する色なく、獅子奮迅の勢を以て之に當り、虛々實々互に挑み戰ひ、一上一下、孰れ劣らぬ手煉の早業、觀る者手に汗握らざるはなく、凝視默然滿堂水を打ちたるが如く、丁と打ては發止と受留め、右を拂ひ左を透かし、寄せては返す太刀音被聲、兩虎深山に挑むとき、錚然として風發り、二龍青潭に戰ふ時、沛然として雲起るも、斯くぞあらんと思はれけり、かくて林氏矯捷韋馱天の如く一たび飛んで眞甲目掛けて斬り込むや、流石武勇の敵將も受留めかねて、無念とや思ひけん阿脩羅の荒れたる勢にて押寄せ來るを、林氏心得たりと受流し亦もや敵と面を打ち、これにて見事に敵を斃せしかば、萬衆の喝采耳も聾せんばかりなり、敵の精悍なるは固よりなれど、林の老巧感ずるに餘あり、殊に悠然太刀を收めて立退きし風采、天晴稀世の武者振なりけり、

都賀田氏石川氏、兒島氏石川氏、此の師範家諸先生の立合に至つては眞に天下の範、斯道の型たるべきものにして、その一進一退苟もせず擧作悉く法に適し、義に合するもの敬服の外なし、特に我師が兩將を斃せしに至つては吾曹の狂喜何物か之れに加へんや、我劍道部は之の得難きの良師あり、部員たるもの宜しく奮勵努力我校のために盡されよ

（安評多謝）

○柔道部大會記事

極冬の三旬寒風飛雪を犯し、我が無聲堂に養ひし我が校幾多の健男士、今や腕鳴り膽脹るの際、明治三十六年二月十五日我が柔道部は其の大會を開きたり、此の日や朝來黑雲暗々として一天を蔽ひ、彼の西比利亞嵐は勢を猛くし、軟弱蒲柳の輩は爐邊に呻吟するの折柄、凄風に面を曝らしつゝ先を爭ふて、今日の勇戰を見んと欲し來る者の、所狹き迄に高きが低きが入り亂れて立出たる、愈々戰士をして忿勵せしめたり、只惜むらくは本校諸先生の出席少なかりし事を。

斯くて午前十時半豫定の番組に從ひ勝負は開かれぬ、抱負ある勇士が鍛へに鍛へたる膽、練りに練りたる腕を表はして、決戰せし其の勇ましさは、觀衆をして手に汗を掌らしめ膽を寒からしめたり其の勝負左の如し

○第一回　引分（山本三治　藤嶋兼道）

○第二回　腰投　大外刈（上野意純　八田善之助）
○第三回　足拂（大野奥三郎　塚原忠兵衛）
○第四回　押込、同（糀谷幸十郎　齋藤重保）
○第五回　引分（根津政吉　津金吾）
○第六回　大外刈、同（富山知海　萩飾）
○第七回　引分（新谷哉二　白井鐵太郎）
○第八回　腰投、大外刈（櫻田圭太郎　井正矩）
○第九回　巴投（小川堅二　金子庄八郎）
○第十回　内股、同（高田澤智　清水德太郎）
○第十一回　押込、同（丸山俊二　多田淳良）
○第十二回　小外刈（政野梅吉　山内秀一）
○第十三回　引分　腰投（森田桂三　巴投　青山暢性）
○第十四回　内股、同（南達吉　内股　山本嘉三郎）
○第十五回　腰投、同（藤井正太郎　西成信）
○第十六回　大外刈、横捨身（藤田考四郎　加藤完治）
○第十七回　小外刈、同（淺見興四藏　磯部喜右衛門）
○第十八回　大外刈、腰投（田口邦重　神藤純一郎）
○第十九回　横捨身（藤澤廉之助　奥田祐安）
○第二十回　大外刈（吉澤謙太郎　木子七郎）
○第二十一回　体落、大外刈（菊地信次　板垣贊造）
○第二十二回　引分（下野沈村靜　雄茂）
○第二十三回　引分　浮腰（小山永顯　島田朋三郎）

次で河原繁、芝沼榮作二氏の講道館勝負之形あり

○第二十四回　巴投（矢口長三　竹内六藏）
○第二十五回　隣車（今井喜代志　加藤虎之助）
○第二十六回　十文字絞（伊藤直　後藤多喜藏）
○第二十七回　横捨身浮腰（加藤完治　大外刈　小川信次）
○第二十八回　引分（林秩父慶太郎　順次）
○第二十九回　押込、同（栗本快一　背負投　野田勢次郎）
○第三十回　足拂返シ（石田龍作　山口濟）

○次で白石喜之、中大路氏爲二氏の講道館投之形あり

○第三十一回　引分　背負投（山崎亮五郎　本正生）
○第三十二回　引分　背負投（西野勇喜智　由雄正雄）
○第三十四回　大內刈（原辰治司　上出長）
○第三十五回　引分（河原繁次郎　磯川辰）
○第三十六回　引分（山添喜代三　池田林作）
○第三十七回　引分（芝沼榮作　小出貞次郎）
○第三十八回　引分（河野喜藏　安達登記雄）
○第三十九回　体落、大外刈（加藤鐵之助　竹松勘太郎）
○第四十回　小外刈、大外刈（藤澤廉之助　大和田信吉）
○第四十一回　引分（原恭造　田四郎）
○第四十二回　跳腰、小外刈（白石喜之　山田伊之助）
○第四十三回　引分（芝沼榮作　佐藤軒二）
○第四十四回　引分（金尾惟敏　澤野彦次郎）
○第四十五回　引分　駒込腰（中大路氏爲　盛岡宅平）

次で伊藤直、栗本快一、二氏の拍子流手取之形あり

○番外五人懸　里見寛二（磯川辰次郎　竹松勘太郎　吉田某　澤野彦次郎　盛岡宅平）

いでや右勝負中其の重なる者を述べなん。三本勝負の先鋒承はつたる山本氏我れこそは先陣の勝を得んものと、勇みに勇んで藤島氏と組む、奮戰務めしと雖も、而も遂に勝を決する事能はず、息も絶え〳〵となりて、引き分けぬ。新谷氏は白井氏と相對す、勇戰奮闘上に乘り、下に押へ、揉みつ揉まれつする程に、今は共に疲れ果てゝむつくと立ち上り、只茫然と互に顏打合せしは可咲も氣の毒にてもありき、かくて新谷氏氣をいらち奮闘一番遂に敵を投せしは目さましかり

き。山内氏は政野氏と立つしばし爭ふと見る間に山内氏小外刈に一本を占む、是に於てか政野氏堅く守りて動ず、さればさすがの山内氏も施すに術なく又の日を約してぞ別れたり。青山氏は森田氏と渡り合ふ突差の間に美事巴投にて一本を利す而も勝を一擧に定めんと欲し、進で小外刈を試む、成らずして却つて隙に乘せられ、腰投に破れて、前勝を失す、是に於てか共に克く意を用ゐ技を盡して戰ふと雖遂に決する能はざりしは、惜むべし。次に立ちたる二人の驅雄南氏、山本氏、剛勇を振ひ投げつ投げられつ戰ふ樣狂へる獅子の如し最后に打出せし南氏の腰投にもろくも山本氏は無念の涙を呑ぬ、西氏堂々と出陣し、藤井氏と組む、よく隙に乘して敵を苦しむされど藤井氏もさる者にて堅く守りて動かざりしか遂に敵する能はず續きて打たれし脊負腰に二度ながら脊を疊み落しぬ、人々西氏の機敏に嘆賞せざるはなし。次に出でたる藤田氏は小兵の内に名も知られたる、勇者なれど、對手の加藤氏も又巧なる者にて、烈しく戰ひしが藤田氏の業や優りたりけん、忽ちにして勝をぞ占められける。

時已に亭午爆然たる砲聲耳朶をかすめ彼方此方に空腹の聲生せし、三十分間休憩の張札は委員の手によりて揭げられたり、觀衆去る者頻々、遂に堂に殘る者委員のみ。

既にして午後一時、一人來り二人來り、やがて堂内復た立錐の餘地をだに殘さず、來賓席亦大に狹隘を感ずるに至れり。此に於てか午後の勝負は開かれたり剛勇無双の田口氏は、拍手の中に表はれ、瞬く暇に敵を美事破りしは、快ちよかりき。次に淺見氏は、磯部氏と組む、淺見氏克く戰ひしと雖も磯部氏の剛力施すに便なく、無念や敵の小外刈に倒る、藤澤氏眞田氏と相當り、屢腰投を打つて殺す能はず、眞田氏克く之れを守り隙に乘じて敵を苦しむ、しばしは勝負も見えざりしが、最後に眞田氏の横捨身功を奏して、勝を占む。次に表はれたる小兵の若武者、木子氏吉澤氏、の二騎さすがに廣き道場を、狹しと走り回り、飛び合ひ奮戰數時に渡りしか、木子氏が早業や勝れたりけん、美事大外刈に敵を殺せり。板垣氏は菊地氏と戰ふ程もなく續けて二度其の脊を地に落す。腕力を以て夙に同人間に恐れらるゝ、野波氏は手を扼して下村氏に對す、氏も亦名うての剛の者いざござんなれと備へし其の凄さ、如何なる活劇の演ぜらる事もやと、眸をこらして見る程、別きつ別かれつ、押へつ押へられつ、漸く体疲れ、流汗玉をなして落つ、而も遂に決する事能ざりしは、惜かりき。次で小山氏は、島田氏を敵とす、共に定評ある怪力者、戰ふ事久しからす如何なる隙の生じたりけん、小山氏は一本を失す、之に於てか憤然勢益强く必死に戰ひ敵をして屢危險に落入らしめしが島田氏克く之れを耐へ、何時勝負の決すとも見えず、遂に又の日を約して分る。河原氏と芝沼氏とは愼重なる態度を以て、講道館勝負之形を演ぜらる、面白き事限りなし。次で矢口氏は、竹内氏と爭ふ、氏が輕妙なるの技量は甚だ偉、忽にして、巴投の早業に敵を取つて伏せたり。伊東氏、後藤氏と對す屢膝車を打ちて功を奏す能はず、後藤氏防戰盡すと雖も、腕力や劣りたりけん遂に十文字絞にて打ち取られたり。次に出でたる小川氏は鍛錬輕妙、能く隙に乘じ敵を制するの技あり、先に藤田氏を破り、意氣益々盛なる、加藤氏と衝る、當日一の見物たり、加藤氏は跳腰を以て敵を破りしも、再び打ち出す大外刈の足業に前勝を失ひ、奮鬪數時最後に加藤氏が試みたる得意の横捨身、さすがの小川

氏も避くるに暇なく、遂に無念の涙を呑む。林氏は秩父氏と組み互に戰ふ程に、如何なる機なりけん、林氏負傷して勝負は中絶す。次に野田、栗本二氏、忌憚なく評すれば、技に於ては野田氏遙かに勝れたりしか、腕力に於ては栗本氏に比すべくも非ず、得意の輕妙も施すに便なく敵の爲め押へ込に陷りしは無念なり。次に出たる二人の長髓彥、互に足を蹴立て拂ひ拂はれつ、苦戰する程に、山口氏己れをかけ却つて、石田氏の爲め利を得られしなど。中々の見物なりき。斯くて白石喜之氏と、中大路氏爲氏との講道館投之形は演せられぬ、柔道の柔道たる眞理の顯はれしは、當日好快の見物にて、騷かしかりし觀衆も、息をこらして注視し、技終るや拍手喝采湧くか如し。

之れより我か校撰手と醫學專門學校第一第二兩中學各撰手の勝負は始まれり、さすか健兒を以て自任する撰手の事とて、其の輸贏を爭ひ龍奮虎鬪叱咤突擊兩雄怒りて相挑むの狀一番は一番より活氣を添へ、觀る者手に汗を握る。さて山崎氏は已初陣の功名を立てゝくれんずと、挑戰頗る力めしも敵手第二中の本氏堅く守りて、いツかな之れに應せず。とかくする程に如何なる隙や見られけん山崎氏敵の脊負投に一本を取らる、見る者君が爲め危ふむ、敵は勝に乘じ來る事益々急、圖らざりき山崎氏の妙手急に發し、忽ちにして脊負投以て前敗を補ふ、而も遂に勝を利す能はざりき。西野氏は第二中由雄氏と組む、力相伯仲しては又勝負も見へ分かず數分爭ひし後引分となる。我が原氏は同しく第二中の上出氏を敵とす、暫時戰ふ程に敵の大內刈に功を奏せさせ、其の勝をぞ讓りける。第一中の磯川氏は我が河原氏と對す、敵の樣子は知らねども、味方は名に負ふ河原氏なれば、如何でか負くる事やあると、思ひは同じ勇士の面々、片唾をのみて意を注ぐ、されど磯川氏硬く守り、克く危を辟け、何時勝負の決するとも見わす、終に次回を期して分れたり。名のりと共に立ちしを見れば、之れなん我中已に定評ある强の者山添氏にて對手は如何と見やるに之れも第一中名うての勇者池田氏、如何なる活舞臺を呈す事かと、見る程に、戰ふ事幾もなくして、山添氏負傷し氏の技倆を知る能はさりしは吾人の最も悲む所なりき。我か芝沼氏は醫學小出氏と相對す、氏は本校に鏘々の音高き剛の者とは云へ、小出氏の金剛力を溢らせし赤銅色の腕太く、二王立に搆へたるには如何ともする能はず、さすがの芝沼氏も施すに術盡き、亦の日を約して分る。勝敗は終に決する能はざる者か　技能はすば術を以て勝ち、術能はされば力を以て制せんと、意きまきたる我が河野氏は、第二中の安達氏と組み、其の妙技巧術剛力を振ひしも、功を見る能はず、あちらこちらに漂泊し居る勝利を獲るに至らずして相分る。次で我が加藤氏は第一中の竹松氏を敵とす、爭ふ事五分間竹松氏の大外刈と、躰落とは、功を奏して、二回とも加藤氏をして脊を疊上に觸れしめぬ、さはれ加藤氏か虎嘯奮鬪の勇は、我れ人共に感じ合へり。次に出でたるは小兵の大和氏、如何でか藤澤氏に敵すべきと、思ふ間もなく、突嗟の早業、大外刈、小外刈に藤澤氏の大兵を投げたるは天晴たくみの若者よ。醫專の福田氏は、我か原氏と相當る、揉つ揉まれつ、組みつ組まれつ奮戰數時、息も絶えんばかりになり果て、引分る。かくて引分のみいと多く、中には不平の聲をなど發する者生ずるに至りし折柄、我か白石氏は悠然として表はる對手は醫專に其の名も轟く山田氏たり、白石氏の輕捷体を躍らす事飛燕の如く、敵手之

れに惑ふて体稍崩る、此の時遲く彼の時早く白石氏虚に乘じて進み、忽ちにして小外刈、忽にして跳腰、相次で敵をして地に輾轉せしめしは當日一の見物にして、喝采堂に溢れたり。同じく醫專の佐藤氏は芝沼氏に組む、さすがは有級者の勝負とて、一擧手、一投足、皆以て後進の摸範とすべし、數しか間挑み合ひしが終に中止の命は下れり。次に第一中の澤野氏と、我か金尾氏とは、拍手の間に表はれたり、一方は尋中の將として譽れ高き澤野氏他方は臂力人を兼ね躰軀優れたる勇者其の戰ふや變化百出指顧するの隙なし金尾氏克く危を利して、敵を苦しましむ、爲にさすかの澤野氏も、得意の春負投功を立つるに便なく、引分の止むを得ざるに至りしはいと面白かりき。我か校名うての中大路氏は、尋中の褊將として名も高き盛岡氏と戰ひ渡りしか、之れ亦勝を決する事能はずして止む。悽然たる戰場に忽ち乘り出す一騎の武者、是ぞ五人懸の剛の者里見氏にして、之れに對する面々には、澤野氏盛岡氏を初めとして、磯川氏、吉田氏、竹松氏、の勇士皆一騎當千の兵、先つ磯川氏は大内刈に死し、吉田氏再大内刈に斃れ、竹松氏は押込に陷入り、愈々澤野氏扼して對す、此の時如何なる隙の生じたりけん里見氏は澤野氏か得意の春負投に破れ、遂に宿心をとくる能はさりしは、最も遺憾とする所なり。やかて競力終り、吹き荒む北風に、夕日の影のうす暗く、落ち行く方にさし添ひしぞ是非もなき、あゝげにも宜にも飛花落葉の思ひなる哉

勝一、負二、引分十之れ苟も我か校六百の健兒が撰手を以す任する者の成績なり振はざるの甚しき哉然れども余は此に之れを責むるを欲せず彼れ此れ云ふを好まず只々一層の奮勵あらん事を願ふのみ、因に當日進級證書を受領せるものは左の如し

第二級　里見寛二

第三級　白石喜之、金尾惟敏、矢口清

第四級　服田美濃吉、加藤鐵之輔、山崎亮五郎、西野勇喜智、原恭造、山口龍作、野田勢次郎、

外に寒稽古皆勤証を得たる者五十八名なりき、

○明治三十五年第拾回　秋季陸上大運動會

附天長節祝賀會

黄粱既に熟して、一葉飄々欄干を打ちて秋聲を齎せば、金風颯々として霜葉に渡り江水瘦せたれども漸う清冽にして秋天を涵す、月高空に愈澄み、菊清香益高し、此際天地何所にか灝氣なからん。

天長の佳辰實に此好季にあり、聖上の御威德は今更喋々するの要なく、其祝賀すべきはまた言を待たざる所なり、されば臣民各々其分に應じ祝意を表顯して寶算の無窮を祈る。我等青衿の身なりと雖とも美事に於て豈人後に落るものならむや、吾校毎年此佳節を卜して秋季陸上大運動會を開く、學生が奉祝の方法として誠に其當を得たるものならずや。十月下旬控所には既に一大掲示飜れり、委員は早くも東奔西馳して寧日なく、各部亦清興を援けん爲の魂膽に擾々たる内遂に十一月三日は來りぬ。

午前八時至誠堂に於て拜賀式は嚴肅に擧行せられぬ、今や運動會開會の報せられんとする時、咄、何事ぞ一隅より延期說は起れり、これ當日數日來の雨未だ晴れず陰雲天を被ひ時には數滴の帽檐を打つあるのみならず、地には泥濘深くして競走に少からざる不便あるを以ての故なり、俄に委員は招集せられて終に延期に決す、閉會後全校の天長節祝賀會催さるべき所此又延期の止

むなきに至れり、憤怨何ぞ極まらんや。

翌四日朝來雨下らされとも暗黑未だ晴れず、期して待ちし天日模糊として辨ずべからず、然れとも脾肉の嘆に惱みし隼人等は等しく奮ひ立ちて開會々々と絶叫す、再び委員は招集されて、號砲數聲開會は報せられぬ。一時の後會場は既に整然たり。

校門を入りて右に折るれば一大綠門の聳ゆるあり、其西方靜勝館前又一綠門あり此れ三部館にして科學の標本を陳列し茶菓を饗應す、運動場の中央には一大輪柵あり競技場にして校旗高く翩へり、四方萬國旗を吊し其周圍には數十旒の國旗を樹つ、柵の北側紅蔦纏はれる巨榎の影、天幕一段高うして會長席賞品授與席來賓席等設けらる、他の三面は各學校生徒席及一般縱覽人席にあてられたり、場の西北隅數百の紙旗に飾られたる白色の樓閣ありこれ二部館にして、之と並ひて巨松の下一茶亭あり法文亭あり、共に來賓を待つ。

午前九時來賓既に席に滿ち縱覽席亦餘地なし、委員既に地位に就きて準備全く整ひし時、競技係は鈴聲高く開會を報しぬ、輕裝したる競技者は續て顯はれぬ、抽籤によりて順次既に定まり等しく皆左足を出發線上に置く此時萬人の眼は皆競技者の上に注げり、白勝たんか赤勝たんかはた青か黃か、鈴聲一打二打愈急にして競技者の体は等しく前方に傾きぬ、刹那銃聲一發耳を劈けば沙を捲き地を蹴り健脚に鞭うち風に乘して走る、嗚呼何ぞ其壯なるや。

かくて豫定の順序もて次々と競技は行はれ、健兒相つぎて得意の技を爭へば、遠きオリムピアの昔も忍ばれ、武神茲に降り來て援け給ふかの觀あり。而かも何事ぞ十一時に及ひて天俄に暗く雨滴雫々として天幕を打つや、怪風亦起りて紙旗を捲いて四散せしむ、觀客靜勝館に時習寮に避けて場內俄に廣し、然れとも健兒如何でか恐れむ、猶ほ技を續くること數回、されと雨は愈强ければ午食を兼ねて一先休憩す。

午下一点鐘、天忽ち晴れて裂雲の間靑空さへ望まるゝに總員勇み立ちて、砲聲は開會を滿都に報ず、須臾ならすして觀客また場に充ちて立錐の餘地なし。

二人三脚、步調整然として宛然一人の走るが如し、時に調亂れて轉倒すれば一人は東に向ひ一人は西に面す、人の心に於けるも此に似て終始相一致すること至難の業なり、而して相一致する者最も强し。

戴囊競走、脚も忽にすべからず頭は尙大切なり頭に意を用ゐんか脚蹙んで伸びず、脚に心を注かんか戴囊の頭を滑り落ちんとするあり、頭をすくめ腰を据へて走る樣眞に笑ふ可し。一等二等既に人の手中に歸しぬ、されど急ぐべからず尙三等の殘れるなり、而して先人皆斃れて戰場唯我が蹂躙に任すと、揚々として決勝点に入る僥倖兒あり。

スプーンレース、一發の爆聲に先を爭うて走る刹那無殘や白球は轉々として地上に墜つ、此を見て嘲笑するもの豈に中途にして又己の球の墜つるを知らむや、肘を張りスプーンを持し眼は須臾も球を離れず翼々として走る、既にして決勝点に近く石に躓けば白球地に墜ちて聲あり、此際の恨長へに盡きじ。

サック競走、競技者皆囊中に入りて地上に横はる、一發の銃聲と共に立ちて飛ぶ、人の己に先んずるを見ていらだち急く者、反て顚倒し一たび顚倒すればまた容易に起上る能はず、尙地上に轉々たるに前者は既に決勝線上に在り。

障礙物競走、塀を踰え行けば網の横はるあり、

網を攀ぢ筒をくゞり、棚にすがり袋を脱くる等障害次第に前途を遮る間を逸早く疾驅して賞牌を胸に輝かす者は誰ぞ、人世の行路亦斯の如く諸の障害に屈せず撓まず倦まざる者の頭上に、やがて成功の桂冠は人目を眩せん。

學術競走、試に競技者の心裡を忖度せんが、學術競走は我々脚の弱きものに適す其秘訣は他なし狼狽せざるにあり、泰然たるにあり、尻落ち着けてやるにあり。此を數回服膺して場に上れども、一人二人既に決勝点に入れば早や我心平かなる能はず、前の遠謀も忽ち空しくソコ〳〵にして走り行く、檢閲も請へば一ゼロの欠けたるあり、僅にコンマの落ちたるあり、來る者も來る者も皆然り、茲に於て一同思はず唖然たり、顧みれば尚一人草上に坐して鉛筆を走らせるあり、然れとも定時既に盡きて勝旗は誰の手中にも落ちざるを如何せむ。

横行競走　此れ本年始めての競技なり、即ち背部と背部と癒合せる兩頭四脚の怪物の一隊を見る、其走るや横、然れとも蟹の如く遲きにあらず兎の如く速なり、殊に其中の一匹二頭能く走る夕陽既に沒したる練兵場裡幾度か顚倒して膝頭を擦むきし功か、

其他一二四六町競走武裝競走片足競走巾飛高飛竿飛等何れも目ざましかりしも特に壯觀なりしを公立學校撰手競走となす、名譽の月桂冠は石川師範と富山中學の手に落ちぬ、其生徒は此大功勞者の胴上げに餘念なし。

餘興としては二部生の各分科行列、時習寮生對醫學專門校生の綱引あり。

鶴首して待ちたりし各部撰手競走は來りぬ、數週の練習に我こそと心中窃に成竹を期せる各撰手は各部生に送られ來て今や皆大責任を双肩に負うて出發線上に立てり、白烟銃口に迸りて轟聲耳を貫けば撰手等しく走り出づ、赤青白相亂れて一周二周勝敗の機は愈迫れり此時総ての學生は宛然狂せるか如く帽を揮ひ手巾を振り部名を呼び帽色を叫ぶ。各撰手亦此一回に滿身の意氣を双鐵脚に込めて走る、否走るにあらす又飛ぶにもあらす、唯夫れ風馳電逝。

須臾ならすして旗は振られ賞牌は燦として胸間に輝きぬ、誰の爲に振られ誰の爲に輝きしかは請ふ下に就て見よ。

一哩競走　本日唯一の大競走、此時天地早くも糢糊として漸く人顏を辨すべきのみ、競技者は各渾身の勇を皷して飛ぶ、初めに擢でし者必ずしも勝たさるなり、先づ後れし者必すしも負くべきにあらず、世路亦斯の如きを見る。最後の勝利は果して誰にか歸せし。

四十五回の競技茲に全く終る、嗚呼此運動會は、首尾よく盛大に終始愉快を以て終れるなり、時に日は全く落ちて歸雲西に去り金城の樹梢晩鴉の噪音高くなれば四顧漸う蒼然たり、中天月なく唯北方の空星斗の爛々たるのみ、此時嘹喨たる喇叭一聲暮靄を破つて響き渡れば半千の會員一大圓陣を作り、柵内數十の篝火晝を欺く、今しも天長節祝賀會開かれんとするなり、先づ中野祝賀會委員長登壇して開會の趣旨を述べらるれば音樂隊の合奏につれて「君が代」の合唱あり、次に職員総代一、二、三部総代相次ぎて賀詞を陳べ終れば、天長節の唱歌國の光の合唱ありて折詰は配布せられぬ、折から校歌の合唱は靜かなる天地を震動せしめたり、此間絶へす爆竹、音樂、仕掛花火は少からざる清興を添へ、折詰小なりと雖も滿足を與ふるに十分なり、嗚呼先には勇士の驅馳蹂躙に委せられ、硝煙彈雨大波瀾の運動場裡今は唯歡樂快談の樂園となりぬ、所々天を焦せる篝火を圍みて壯語に耽れる

勇士の胸間には賞牌星の如くに輝けるあり、草に坐して聖恩の優渥なるに感泣せる壯夫の帽檐には白菊の火光に笑めるあり、此際何者か快感に飽き歡笑に醉はざるものあらむや、やかて吉村運動會長の音頭に依て兩陛下の萬歳を三唱し次に今井運動會委員長の音頭にて第四高等學校萬歳を大呼す、其聲實に乾坤を貫徹せり、嗚呼今や平和歡樂の諸神降臨して謳歌する如く清興盡きんともせず、折しも篝火消えんとして漸く暗く尾山城裏の杜影蒼鬱の噪音漸う靜かなる頃會員は三々伍々相携へて散會しぬ、時既に九時に近かりさ。

次に當日の受賞者の氏名を錄せむ。（秋風生）

第一回二丁競走

一、今井喜代志　二、東郷外人　三、池田泰次郎

第二回二丁競走

一、西成伍　二、逢坂元吉郎　三、田口邦重

第三回武裝競走

第四回戴囊競走

一、福田門彌　二、鈴木龍藏　三、森川昌一

第五回四丁競走

一、高畠喜市　二、亀川兼吉　三、小山永顯

第六回學術競走

一、神藤純一郎　二、五藤直晴

第七回障礙物競走

一、木村敬義　二、村上威士　三、安達勝雅

第八回六丁競走

一、盛賢藏　二、亀川兼吉　三、中野亜助　四、高畠喜市

第九回旗拾競走

一、渡邊十三郎　一、關野謙三　一、清水勝雄

第十回一丁競走

一、加藤鐵之助　二、嶋田朋三郎　三、白石喜之

第十一回二人三脚競走

一、（南　達吉　近藤　達兒）　二、（盛賢藏　仲佐貞次郎）　三、（清水德太郎　野波靜雄）

第十二回武裝競走

一、小山永顯　二、富山智海　三、庄田作輔

第十三回幅飛競技

一、南達吉（十三呎七）　二、加藤鐵之助（十二呎三）

第十四回高飛競技

一、福田門彌（五尺三寸）　二、近藤達兒（五尺一寸）

第十五回片脚競走

一、

第十六回横行競走

一、（菊波　信次　清水德太郎）　二、（庄田作輔　安部成廉）

第十七回二丁競走

一、東郷外人　二、增田雷助　三、熊谷亮照

第十八回戴囊競走

一、田口邦重　二、丸山俊二　三、山内秀一

第十九回四丁競走

一、田村貞亮　二、宮長平作　三、木村增太郎

第二十回サック競走

一、小山永顯　二、服田美濃吉　三、渡邊十三郎

第廿一回學術競走

一、小倉文彦

第廿二回障礙物競走

一、神保金衛　二、丸山俊二　三、千代嘉一郎

第廿三回竿飛競技

一、金子庄八郎（九尺）　二、岡本　泰（八尺六）

番外綱引（時習療生對醫學專門校生）

第廿四回二人三脚競走

一、（栗本瀨兵衛　中野　並助）　二、（塚野豐次郎　星　政一）　三、（石黒　文吉　藤田圭太郎）

第廿五回武裝競走

一、渡邊十三郎　二、藤田孝四郎　三、金子賴二

二部各分科行列

第廿六回二丁競走

一、中村秀太郎　二、池田泰次郎　三、南　達吉

第廿七回旗拾競走

一、盛賢藏　二、菊池信次　一、河野嘉藏

第廿八回一分間競走

一、内田節三　二、宮所富太郎　三、仲佐貞次郎

第廿九回一丁撰手競走

一、今井喜代志

第三十回戴囊競走

一、木村自老　二、小番小一　三、清水勝雄

第廿一回學術競走

一、今村奇男　二、川崎清男

第廿二回四丁撰手競走

一、亀川兼吉

第廿三回二人三脚撰手競走

一、（近藤達兒　南　達吉）

第廿四回障礙物競走

一、神藤純一郎　二、松橋紋三　三、服田美濃吉

第廿五回武裝競走

一、田口邦重　二、野田勢次郎　三、小方芳樹

第廿六回來賓競走

一、中屋重樹　二、石川喜直

第廿七回二丁撰手競走

一、中村秀太郎
第卅八回旗拾撰手競走
一、清水勝雄
第卅九回職員競走
一、エ、ウォルファート　二、藤井國弘　三、ド、ハヴ非ルランド
第四十回公立學校撰手競走
一、石川師範、亀田最澄　二、宮山中學、長谷田義良　三、石川師範、伊藤嘉秋
第四十一回障害物撰手競走
一、村山威士
第四十二回武裝撰手競走
一、渡邊十三郎
第四十三回金澤醫學專門撰手競走
一、吉野要　二、濱地藤太郎　三、永江直之
第四十四回各部撰手競走
一、河原繁(二部)　二、下野遠善(一部)　三、西成伍(二部)
第四十五回一哩競走
一、田村貞亮　二、中野並助　三、田邊邦平　四、仲佐貞次郎　五、市川茂三郎

(以上)

運動會雜俎

○吾校運動界に於ての覇王は第二部なりとは何者も必ず首肯する所從つて今回の受賞者も比較的二部に多し、殊に各部が主力を注ぎたりし撰手競走に去歳は三等共に其占むる所となり、本年は第二等を第一部に奪はれたれども猶第一、三等を領せり、なほ全校運動界に雄飛するに足れりといふべし、唯茲に望むべきは此旺盛なる意氣を此に止めず各方面に發揚し又何時までも消沈せしむることなく、しかも熱中のあまり規を逸出せざらんこと、これのみ。

○第一部は昨年の恥辱を首尾よく雪げり、然るに第三部の寥々たる誠に遺憾なき能はず、例令運動會第一の目的は單に勝利を制し賞牌を胸間に輝かすにあらざると勿論なりとはいへ、此れ第三部の鬱勃の元氣を欽けるを證するものにあらずや、これ將來醫に身を立てんとする人なるだけ其氣質の温柔なるが爲なるへけれども、醫科大學及び第一高校第三部の學業及び運動會に於ける勢力の大なるを耳にせるもの誰か感憤せざらんや、茲に於てか第三部諸士が將來の一致協力と活動とを望まざるを得ず。

○運動場裡亦必ずや公德なかるへからず、他人を妨げても己を利せんとするが如き卑劣の行爲最も憎むべきなり、運動會は勝を爭はん爲めのものにあらず。

○競技を申込み番組に其名を載せられし者にして實際競技に加はらざるもの少からず、此が爲に運動會の秩序を亂すこと大なり、此等の人々多少の障害ありとも必ず出場すべき義務を負ふものなるに其義務を履行せざるが爲に多人の不利を起す斷じて男子の所爲にあらず。

○場内西北隅にありて最も人目を引きたるもの二部館あり、天幕優に引廻し數百の紙旗と紅葉せる蔦葛を以て飾りたる二層樓實に手際よく出來たり、餘興として二部各分科行列あり學生の樂隊を眞先に一行場内を練り行く、車輪を擔へる高絹帽(シルクハット)にフロックコートの機械學者あり、軍艦を手にせる大禮服の造船學者あり、犬を連れ繃帶を持ち藥瓶提げたる脊廣服の獸醫先生あり、肥桶をかつき鍬もてる農學士あり、麥酒瓶、電燈、のた化あり、數十の扮裝者各々人を抱腹せしめ、一層の盛況を添へたり、二部生が常に一致の步調を取れるは喜ばし。

○第三部生は靜勝館内に科學の標本及此を應用したる物を陳列す、花中の噴水、水中の布袋、花園の胡蝶、魔術の太鼓、珍らしき動植物の標本、電氣、發音器等其他の器械抔人目を引く少からす、何れも文學的の説明を附しあり、兎角餘興はれ祭的に流れ易きものなるにも拘らず最も其當を得たるもの、以後斯る餘興の盛ならん事を切望に堪へす。

○第一部生は法文亭とて質素なる掛茶屋を青松

蟠屈して風新しく草の香淸き所に設けたり、茲に入りて一碗の苦茗を啜る却つて風趣あるを覺ゆ、尙ほ寒天版の機關新聞を發行したり、好發案たるを失はず。

○猶餘興には時習寮對醫學專門學校の綱引あり數十分の苦戰の上遂に時習寮生の勝に歸しぬ一同寮歌勇ましく優勝旗を翻へし賞品の柿を頰ばつて凱旋す、醫專校敗れたりと雖も非常の劇戰奮鬪に花を咲かせたり敢て不名譽にあらず。

○運動場裡に在つては各部中原の鹿を爭ふて敵視すと雖も場外に於ては各生相協和し親睦してこそ同窓の友なれ、又義なれ、然るを尙ほ其餘憤を固執して勝者を呪ひ敗者を嘲るが如きは斷じて不可なり撰手慰勞會祝勝會等は果して此弊害なからさらむや、端艇競漕會等にも此種の各部個立しての會は斷然廢して全校一致して勝者も敗者も樂しき合同大會の行はれむを望む。

○閉會後天長節祝會あり、滿校の生徒星夜露天の下暖き篝火を圍んで團欒す、斯の會は本年始めて催されたるものにして其趣意にもかなひ愉快も多く殊に例年運動會後開かるゝ各部撰手の慰勞會祝勝會に伴なへる種々の弊害も跡を絕つを得べく最も賛同すべきものなり、我は將來も必ず斯會の催されんことを望んで止まざるものなり。

○當日數日來の雨に場内泥濘深く屢々糠を撒けとも一二回の後又元の如く脛を沒す、此が爲競技者は泥まみれとなる、觀覽者にも不便少からす泥に倒れて泣き出す小兒あり、泥濘に下駄をとられて顏赤らむるれ嬢さんあり、殊に雨の爲め觀客四散して場内俄に淋しくなり泥愈深くなりしも午後一時には雨は晴れたれは再競技を續けしに、須臾にして觀客午前に倍せり、流石市内第一の運動會とうなづかれたり。

○「オイ君の顏はどうしたのだ。「ウン何かついてるか。「何かもないんだ泥まみれじやないか。「そして君の顏にはついて居ない積かネ。「ナニ僕のもか。「アハ、、、、、「アハ、、、、、相見て暫時は洪然たり。

○オイ君は勝たかナ。「元より乃公四町で一等賞だ。「フン甘く云ふな、君は人を欺く積でも顏が謀反しているぜ。「エー何。「一番先に走つたものが前の人の泥汁が顏や胸へつくものか

○「先、君が決勝点の近くで球を落した時の面アつたらなかつたぜ。「それより君がサック競走で倒れると見物は笑ふ、君が紅くなつてあせると猶々起られぬ、その樣子はまるで蟻に攻められる芋虫のやうだつたよ。「ヤアあれを見て居たのかへ、情ないナア

○障礙物競走に網にかゝつて魚のやうにはねる飛び下りて折り重なる、武裝競走にボタン一つとれて居て落第する、勝つて躍る、敗けて泣面する、樣々の滑稽失敗の種は山程で來年の運動會には又澤山芽を出すことなるべし。

○當日負傷者としては蹠を刺せし者一二他は皆リモナーデ位のれ客樣にて衞生係の閑散なりしは目出度かりける次第なり。（秋風生）

斷片錄

○新しき年來りぬ、予は悔恨を以て逝けるを送り希望を以て來れるを迎ふ、想へば予れや送迎幾年何れの年か乙女の夫の如き希望を以て迎へ老婆の夫の如き悔恨を以て送らざる、かくて五十年を送迎すべく希望を以て生れたる予れらは遂に悔恨を以て死なさるべからざる乎。

電光の如くはた朝露の如く、富豪、美人、貴人、英雄の死する時、予れらは必ず一度は來らん死の前にあらゆる名譽、富貴の影だになきを

感せずんば非らじ、あゝ彼等が與ふる不朽の眞理や之を知れる人、之を感ずる人の余りに多くして之を悟れる人の余りに少きを奈何にせん。

死は凡ての人の最後の運命也、終焉の一刻は凡ての人の有する一刻にして終世中尤も美、善良、神聖の一刻也、何とならばそこには名譽なく、功名なく、富貴なく、虚飾なく、たゞ宗教これある耳。

偉大なる悟は深大なる迷の後に來るもの也、釋迦の大悟の前には彼の大迷ありき、故を以て予れは徒らに大なる悟なきを悲まずして、たゞ區々の過失余りに多くして大なる迷の遂に一つだになきを悲まん耳。

○予れは軍人たらん、教育家宗教家たらんと云ふ人あらば予はその勇氣と義氣とに驚かざるを得じ、何とならば軍人や、教育家宗教家や自己以外の爲めの犧牲即ち獻身の覺悟を必要とす、而して凡そ献身は現世に於て尤も困難なる事の一つ也。

○予は宗教を信ぜずと云ふ人あり、宗教は如何なるものぞと問へば知らじと答ふ、かゝる人は宗教を信ずと云ひ能はざる如く亦宗教を信ぜずと云ひ能はじ、唯彼の云ひ得るすべては余れは宗教を知らじ、これ耳。

○懷疑瞑想は眞理發見の第一歩也、『一と一とを加ふれば二となる』てふ所謂一事實は公理なる頗る曖昧なる解釋以外、如何なる大科學者も吾人に充分なる滿足を與へ能はざるは何故なるか、そは凡ての人がその所謂一事實を眞理と假定して、そこに懷疑瞑想の余地を有せざるの故耳、高き所より低き所へ物の落つるを怪まざる予れ等は引力の眞理を發見せんには遠し。

○所謂エラキ人となる方法を問ふ人あらば予れは教へん、凡そ二種あり共にこれ易々たる事のみ、その一は富家に生れて、大學に入りて、洋行して博士となりて、役人樣となる事也、天下の愚衆某氏は誠にエラキ人なりと讃嘆せむ、その二はあらゆる情義を無視し、唯自己の爲めに働き自己の爲めに盡して滿腹の野心を完成すること也、天下の愚弄某氏は實にエラキ人なりと賞稱せむ、前者は戀の成功者にして他力と無能とを表はし、後者は利の成功者にして自力と無情とを表はす。

○友あり云ふ、予れは競爭と戰爭とを好む、それは進歩と平和とを得んが爲めにそれらを好むに非ずして競爭戰爭そのものを好む也と、夫れ競爭と戰爭とは目的に非ずして手段也、進歩と平和とは目的也、目的と手段とを誤るは弊也。

○予れの今日吐く處の言、書く處の文は予れの今日の智識、信仰、主義の表白にして必ずしも明月のそれらには非じ、進化論は眞理也。

（二十一郎）

獨尋春色上高臺、　三月皇州鶯未回、　薛能
幾處松筠燒後死、　誰家桃李亂中開、
姦邪用法元非法、　唱和求才不是才、
自古浮雲蔽白日、　洗天風雨幾時來、

寄贈雜誌

嶽水會雜誌　十九號ヨリ廿一號
ゼ、ヴウイス　四八號ヨリ五三號（十一卷）一號ヨリ九號（十二卷）十二號及（七卷）一號ヨリ三號（八卷）
無盡燈　十八號
學友會報　廿九號
校友會雜誌　五號
信仰界　十二號及（一卷）一號二號（二卷）二六四號ヨリ二六六號
六合雜誌　五一號ヨリ五三號
國士　二五號
十全會雜誌　一二〇號ヨリ一二三號
校友會雜誌　九五號九六號
龍南會雜誌　三八號
城北　二二號
六稜　四號
九十九會々誌

第三高等學校嶽水會
スナツド、グラス氏
無盡燈社
山口高等學校學友會
東京開成中學校友會
東京々北中學校友會
淨土宗傳道會
日本ゆにてりあん弘道會
造士會
金澤醫學專校十全會
第一高等學校々友會
第五高等學校龍南會
東京第四中學校友會
大坂北野中學校友會
千葉成東中學校九十九會

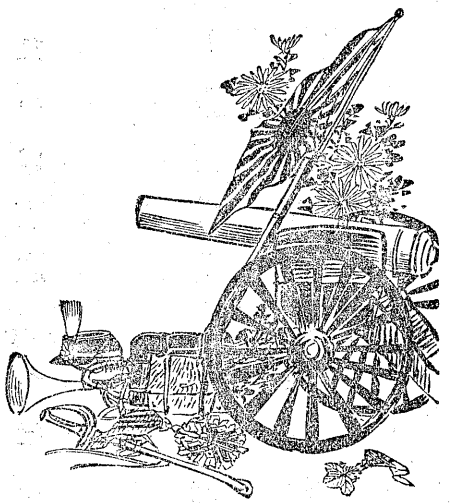
校友會誌　廿三號
華陽　三〇號
和融誌　一號及二號
尙志會雜誌　五二號
校友會雜誌　六號
校友會雜誌　十三號
共同會雜誌　二〇號
校友會雜誌　一〇號
七生　七號
學友會雜誌　十三號
同窓會報告書　二八號
保惠會雜誌　七九號
校友會雜誌　十八號
學友會雜誌　七號

秋田中學校校友會
岐阜中學校華陽會
曹洞宗大學林和融會
第二高等學校尙志會
東京大成中學校友會
東京々華中學校友會
山形中學校共同會
千葉中學校校友會
島根第三中學七生會
石川縣師範校學友會
福島縣立安積中學同窓會
松山中學校保惠會
三重第一中學校友會
新發田中學校學友會

謹告

本誌發刊期日甚〻く延引いたし候は全く印刷會社の業務繁忙のために有之候へは不悪御了承相成度候

本誌發刊に際し玉稿机上に堆く悉く掲載致兼候ため次號に相讓り候分も有之候へは此旨御含み相成度候



投書心得

一投書は本會原稿用紙に限り御認めありたし

一長文と雖も全文を寄贈せざれは掲載せず

一雑誌上には雅號のみを記載することを許せども姓名は必ず編輯委員まで御報道あるべし

一學理上の論説諸小會の記事雅文詩歌等續々寄投ありたし勿論言の或は政治を論し或は德義に背くものは一切掲載致さゞるへし

明治三十六年四月十三日印刷
明治三十六年四月十七日發行

編輯兼發行者　吉村政行　石川縣金澤市早道町五十六番地

印刷者　生沼倍男　同縣同市穴水町二番丁二十九番地

印刷所　明治印刷株式會社　同縣同市高岡町九十番地

發行所　第四高等學校北辰會